
二人で幻想郷入り

カロン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

二人で幻想郷入り

【Nコード】

N6485R

【作者名】

カロン

【あらすじ】

とある大学生、幼馴染関係にある風沢 洋輔と久我 優

ある日、優の研究課題で知りえた幻想郷。そして八雲 紫の手により彼らは幻想入りしてしまう、そして彼らは様々な妖怪・人と出会い成長し、そして幻想郷を揺るがす異変へと関わっていく。

味気無かったので各話タイトル追加

プロローグ

薄暗い森に青年が2人、一人はやる気のなさそうに頂垂れ、もう一人は興奮した面持ちで、一心不乱にメモに何かを書きこんでいる。

「なあ、優」

「なんだい洋輔、今僕は忙しいんだけど？」

「って・・・んな事してる場合か！この馬鹿！」

怒号と共に、優と呼ばれた青年に洋輔と呼ばれた青年の鉄拳が落ちる。

「痛いなあ！洋輔 解っているのかい？僕達は今、大変貴重な経験をしているんだよ、これを書き留めておかないなど冒？にもほどがあるよ」

頭を摩りながら、再びメモ取りに作業を戻した。

「何が悲しくて、神隠しにあつた拳句。遭難する羽目になんだよ！」

そう彼らは、神隠しにあつた拳句遭難の真つ最中なのである。

此処は幻想郷、忘れ去られたモノ達の楽園にして最後の拠り所。

「畜生！あの女、次に会ったらぜってえ泣かす！」

「洋輔、いい加減うるさいよ。」

そこに、紛れ込んだ2人の青年。

彼らの明日は・・・

「優！お前、真面目に遭難してるってこと忘れてないよな？」

「ん？そうだね・・・どうしようか？」

どっちだろう。

1話 二人で遭難（前書き）

この話は、作者がやつつで書いてます過度な期待は
しないでください。

1話 二人で遭難

「おい、優まだ歩けるか？」

「……まだ、なんとか……」

息も絶え絶えながら、自分の後ろをついてくる小柄な青年。優を尻目に、

もう一人の青年 洋輔は、何度目かも忘れた溜息を吐いた。

「……なんで、こんな事になっちまったんだろうかなあ。」

洋輔は遭難する切っ掛けとなった事を思い出し、また溜息を一つ重ねた。

2人の青年、 凧沢 洋輔と久我 優は
十年を超える、洋輔曰く『腐れ縁』で優曰く『友人』である。

小・中・高校も同じ学校・同じクラスという珍事を成し遂げ、
遂には大学まで同じになってしまふという快拳を起こした仲で

あるが、学力に大きな差があったためである。

なぜならば、優は秀才を通りこした天才であり、成績は常にトップそして、洋輔は中の中ぐらい、さらに優は某超有名大学への入学確実と

されていたため、まさか15年連続同級生になるとは、洋輔にとって太陽が西から上がるくらいありえない事であった。

だが、何があったか優は方やはほ無名のである洋輔と同じ大学に入学を

決定したのである。

優曰く、『確かにあつちの大学も良いけど、教授に感銘を受けてね』と

あっさり斬って捨て、学校全体を驚かせたのは言うまでもない。

『今度は4年間、宜しくね』と笑顔を浮かべる優を見て

洋輔は優との仲が縁では無くもはや【呪】レベルだと悟った。

優は入学後、教授の元その天才ぶりを遺憾無く発揮し、民族学の

権威として

頭角を現して行くことなるが……いくつか問題があった。

民族学はフィールドワークが多いが、この二人、移動手段も

実際動くための体力もてんで無かったのである。そこで白羽の矢が立ったのが

洋輔であった、運転免許も体力もある、そこで教授と優は洋輔に協力を求めた。

最初は渋った洋輔であったが、教授の魔法のコトバの前に陥落手伝う事にな

なったのである。

そして、教授が入手した一冊の古本から2人の運命は動き出すことになる。

「……ねえ、洋輔」

「なんだ？休憩はもう少し先だぞ、せめて山からは下りておきたいからな。」

「違うよ・・・民家が見える、民家と言つより洋館だけだね。」

弱々しく優が差し向ける方向にうつすらと何か赤い建物が見える。

「なんとか野宿は、しなくて済みそうだな。」

そんな2人がやっと遭難状態を抜け出す様子を監視する影が一つ。
監視すると言っても、数キロ離れた山の崖上からの話だが。

白いふさふさとした尾と耳を持ち、大剣を携えた白狼天狗の少女

犬走 椛

彼女は彼らが山の中にいたときから、ずっと監視を続けていた
本来、哨戒天狗である彼女は、彼らが山の中に現れた時に接触し
警告するのだが、今回はそれが出来ない。

(・・・取りあえず、山から離れてはくれそうですね)

(まさか・・・妖怪の賢者が直々に『監視だけにしてる』と
接触を図ってくるなんて前代未聞ですね)

面倒事が起こらないといいんですけど溜息を一つ付き
彼らが縄張りから出たのを見ると、音もなく姿を消した。

2話 紅魔館 深夜のお茶会

「・・・おいしいですね」

凧沢 洋輔は人生初となるお茶会に参加していた。

目の前には、見ただけで高級と解るカップに、聞いたことも無い品種の紅茶が注がれ、そして豪勢な茶菓子とまさにテレビや漫画で見た金持ちのお茶会の光景が広がっていた。

人生一度は、こんな豪勢なモノを体感して見たいという願望はある、洋輔も例外では無い

「遠慮しなくて良いのよ、久しぶりのお客様だもの。」

ただ、そのお茶会の主催者が吸血鬼であることを除けばきつと人生最高の経験になっただろう。

(・・・ツイてるのかツイて無いんだか)

そう心の中で思いつつ、ついでにダウンした優を呪いながら目の前に座る、少女もう一度眺めた。

紅魔館の主にして

運命を操る、永遠に紅い幼き月 レミリア・スカーレット

誰がどう見ても10歳前後にしか見えない容姿を持つが
その、血の如く赤い瞳と背中から出る蝙蝠のような翼が人間であら
ざる
ことをものごたてていた。

彼女は少し唇を吊り上げ、まるで新しい玩具を得た子供の如く
楽しそうに洋輔に語りかけた。

「で、詳しく話してくださいませんか？この幻想郷にやってきた理由を」
一方、洋輔はごめんであると言わんばかり少し苦笑いを浮かべなが
ら。

「あー、それなんですけど。」

「何かしら？」

「本来ならそういった難しい事は俺いや私の友人
が「かまわないわ」・・・解りました、では順を追って説明しまし
よう。」

そうして、洋輔は語り始める。自分達がどうしてここに来たのか
どうしてこうなったのか、そして幻想郷に来た一番の原因を。

幻想郷に迷い込む数日前、久我 優は教授と共にある一冊の古書を手に入れる。

所どころ滲み、ページも数枚かけてるが、数百年前に書書かれたものであり。

内容は地方の隠れ里伝承であり、この伝承に興味をもった教授が調査を開始

そして、この伝承が某県の村が発祥の可能性があると解り、学会で

行けない教授を置いて二人は、この村を訪れた。

だが、結果は空振り、この村に長年住む長寿の老夫妻すら御存じないとのこと、しかし

変わりにと、老夫妻からこの村の山奥にある、異界へとつながって

いるという神社の話を聞くことができた。

今度はこの話に興味を持ち、調査したいと提案してきたのである。

こうなった優を止めることは不可能であると良く知ってる洋輔は体力のたの字も無い優の強行登山につきあう羽目になるのである。

そして登山の途中、文字通り優を引っ張りつつ迎えた17回目の休憩のときそれは訪れた。

女性が現れた、別に女性の登山者など今日珍しくもないが、日傘をさして訳のわからない空間から突然現れ。自分たちの本名を確認する登山者などこの世には居ない。

そして、次に発した言葉は『突然だけど、貴方達には神隠しにあつてもらう』である
突然のことで状況を把握しきれない洋輔と優は、足もとにできた女性が出てきた

謎の空間に吸い込まれ、気がつけば山奥に遭難状態であった。

「・・・こんな所ですかね。」
事の顛末を話し終えた洋輔は残っていた紅茶を飲み干し、軽く溜息をついた。

「やっぱり八雲 紫の仕業ね。」

「八雲 紫？」

「妖怪の賢者、神隠しの主犯にして幻想郷最古参の妖怪よ、貴方のような

外来人は奴の手で幻想入りするわ。」

「・・・あの女、やっぱり次あつたら絶対泣かす」

復讐の炎に再度着火し茶菓子をヤケ食いする洋輔、そして無くなつた紅茶に手を伸ばそうと

した瞬間、突然紅茶が一杯になり驚き喉に詰まりかける。

「失礼しました、少々席を外してましたので」

彼女はまるで、最初からそこにいたようにレミリアの斜め後ろに立っていた。

「・・・えっと、咲夜さんでしたよね、いつからそこに？」
そう、彼女は立っていたのだ、気が付くとか。見えているとか。な
んで紅茶が一杯になっているんだとか
そんな小さなことでは無く。超スピードで動いたのかとか。頭が変
になりそうだとか

昔読んだ某漫画の名(迷)台詞がよぎる、あともう一つスカートの
端に血痕が付着してるとか

(そうだ、素数だ、素数を数えて落ち着くんだ！1・2・3・4・5・
6・7・8・9)

完全に混乱している洋輔を差し置いて、彼女はとんでもないことを
口にする。

「少し時を止めたので、驚かして申し訳ありませんでした」

完全に瀟洒なメイド 十六夜 咲夜

「咲夜」

「なんでしよう、お嬢様」「スカートが汚れているわよ」

「・・・私としたことが、申し訳ございません。」

そしてまた、一瞬にしてスカートは新品のように綺麗になる

(マジで頭痛い、優・・・やっぱり殴る・・・絶対殴る・・・)

目の前に繰り広げられる、常識外の光景に
優に不満の矛先を向けつつ、洋輔は思わず頭を抱えた。

「お客様・・・もしかして御気分がすぐれませんか？」

「あら・・・お茶会もそろそろお開きのようね、続きは明日ご友人
と一緒に咲夜」

「はい、お嬢様」

彼女は少し、抜けているのかもしれない・・・

「あ・・・その前に・・・レミリアさん、今回は泊めて頂いて本当に有難うございます」

「かまわないわ・・・意外と礼儀作法はわきまえているのね」

「後一つ・・・どうして人間の俺たちを泊めてくれたんですか？」

「そついう運命だからよ」

壁も紅ければ、床も紅、徹底した紅。夜の暗がりでも眼には優しく
ないそんな廊下を
歩きながら洋輔は問いかけた。

「あの、咲夜さん。一つ聞きたいことがあるんですが」
「なんででしょう？」

「さつき服に血がついていましたけど何かあったんですか？」

「いえ、少し門番の子に少し『注意』した時に・・・お見苦しい所
を申し訳ございません」

「門番の子って、もしかしてあの寝ていた人ですか？」

「はい・・・」

何をしたのかは怖くて聞けなかったが、心の中で門番の人に敬礼を
送った。

部屋の中で、電池切れの人形のように1cmも動いていない優を見て

いらついで、ベッドの脚を少し蹴飛ばし見るが、まるで反応せず静かに
胸を上下させる優を見て溜息をついた洋輔は、崩れる様にもう一つのベッドに
倒れこみそのまま夢の世界へ旅立った。

3話 紅魔館 図書館にて(前)

意識が覚醒するなか、紅い天井が目に入る。

昨夜暗がりの中見たものだが、明るくなるとさらにその趣味の悪さが一層引き立つ。

泊めてもらって居る身で、そう思うのは邪推であるが・

目を擦りながら見た愛用の腕時計はすでに10時を指していた
洋輔は早起きであるが、疲れがたまっていたのか寝坊してしまった
ようだ。

そもそもこの幻想郷が向こうの時間とあっていればの話ではあるが。

すでに優の姿はベットには無かった。

朝飯をもらおうかと廊下に出たとたん、待っていたかのように
咲夜さんが現れる。時を止めていると言っているが実際やられると
心臓に悪いことこの上無い。

「おはようございます、良く寝れましたか？」

「ええ・おかげさまで、所で連れ知りませんか？」

「久我様でしたら、地下の大図書館におられます」

そして、友人が迷惑をかけているという理由をつけて、ほぼ無理やり彼女が運ぶはずだった本を持ち本棚という迷路を抜けこの図書館の主と対面を果たす。

知識と日陰の少女 動かない大図書館 パチユリー・ノーレッジ

彼女と優は、常人ではとても理解出来そうにない言葉の応酬で論争を繰り広げていた。

「朝方こられて、3時間ほどずっとなんですよ」洋輔から受け取った本を
高速で本棚に揃えながら小悪魔はそう言葉を漏らした。

「3時間？」 「ええパチユリー様があんなに楽しそうなのは久しぶりですね」

「そうか・・・あの馬鹿野郎・・・」額に青筋を浮かべながらゆっくりと

優に洋輔は近づいて行く

拳を握りながら

「優————ク————ン！」

「やあ洋輔、起きたのかい？パチユリー彼がさっき言っていた僕の友人の洋輔だよ」

「起きたのかい？じゃね————よ！」

そうして一撃、優の頭に拳骨が落ちた。

4話 紅魔館 図書館にて（後）

「……で重要な事話合う前にお前は、何してたんだ？」

小悪魔が用意した珈琲を飲みながら不機嫌そうに、洋輔は優に尋ねる。優は何をといった顔で

「重要なこと？」「お前、俺達が絶賛神隠し中なの忘れてないよな？」

「ああ、その事が、忘れてたわけじゃないよ？」

「なんで疑問系なんだよ！」

拳を握り、もう一発殴る勢いで優と寸劇を繰り広げる洋輔。

「……貴方達、なかなか面白いわね」

そんな2人に冷静にツツコミを入れるパチュリー

「いや、別に漫才してる気は無いんだけど。えっとノーレッジさんだったかな……友人が世話になったようで」

「パチュリーでいいわ、彼には外の世界の知識を色々教えて貰ったから
特に問題は無かったし」

「所で洋輔、パチュリーから色々教えて貰ったんだけど

ここは「紅魔館で幻想郷で俺達が外来人で俺達を神隠しした

女の名前が八雲紫ってのは知ってるぞ
あれ？洋輔何処で知ったの？」

「昨日お前がダウンした後でだよ、それでお前図書館に来たってことは

色々調べ終わってるんだろ？」

「うん大体はね」

「3時間もかかるとか、お前らしく無いなやっぱ異世界だと勝手が違うか」

優は紛れもない天才である、小学生で地元の図書館の本を読みつくし大人でも手を上げる科学理論などを次々と理解していった天才であるだが、飛び級もせず地元の小・中・高と通い続け洋輔と20年来の幼馴染であり続ける結果を生み出したわけだが。

「いや、1時間くらいで終わったんだけど、ついパチュリーに魔法の理論とか

の議論で盛り上がってね」

「・・・優、やっぱもう一発殴らせろ」

馬鹿と天才は紙一重というか彼は色々ズレているというか

「・・・やっぱり貴方達面白いわね」

小悪魔が珈琲のおかわりを持ってきた所で優は話を切り出す

「それでなんだけど洋輔、僕らはどうして神隠しにあったと思う？」

「どうしてって・・・んなもん、神隠しした本人に聞くしかないだろ」

「幻想郷は忘れ去られたモノ達の最後の楽園、けど別に人が居ない訳じゃない

ここには人里が存在する、つまり人を入れるために神隠した線は薄い」

「だから・・・何が言いたい」

「つまり、僕達は何かしらの目的があって神隠しにあったと考えられるんだ」

「でも待てよ・・・何で俺達なんだよ偶々か？」

「たまたまじゃ無いわよ」

パチュリーが一冊の本を見せる、それは幻想入りの発端となったあの古書だった。

「ぱつと見たらだたの古書だけれど、妖力と霊力が込められているわね

長い年月を経て自然と持つものもあるけれど・・・

これは人為的に込められたものよ」

「それが込められていて、何か問題でもあるのか？」

「調べてみれば、これは位置を特定するのとその存在を知らせる

力がこめられていたわ、つまりこの本は目印ってことよ」

洋輔は頭を抱えた、昨日からただでさえ常識外出来事の連続なのにここにきてまた厄介な事が起きたという事になる。

「おいおい・・・つまりこれはあの女のトラップってわけか？」

「違うよ、洋輔、今回のこの古書教授が最初持って来たんだけど覚えてる？あの教授が学会如きで調査を僕らに任すとか」

そういえばそうだと、洋輔は思った。今回も教授の気まぐれで調査対象が決まったが、あの変人教授にしては今回はおとなしいいつもなら学会すら無視って行ってもおかしく無い。あの人の性格を考えるとおかしい事になんて気がつ無かったんだろうと。

洋輔は残っていた珈琲を一気に飲み干して

「待てよ・・・つまり首謀者は」

「教授と八雲 紫どちらか、または両者ってことさ」

4話 紅魔館 図書館にて(後)(後書き)

連続投稿が続けてます

なぜだろう、最近筆が進む・・・
良いことなのか悪いことなのか
続けていくぜ

5話 暗躍するものと2度目の茶会

大量の本に囲まれた一室の中、髪はボサボサの白衣を着た男性が本読みながら口に啜えた煙草に火を付けた、そして勢いよく紫煙を吐きだし

そして吸いがらで山盛りになった灰皿に灰を落とす。

そしてコンコンと軽快なノック音のあと「ドアは開いていますよ」

と一言、そして、灰皿に煙草を突っ込んで消し。

誰も居ない室内で呟いた。

「ノックはドア開けてくる人がするものだよ、紫」

「あら、勝手に現れるよりましじゃない？教授さん」

女性は空間に出来たなぞの物体に腰をかけ教授と呼ばれた男性の前に突然出現した。

「まあ、キミにとってどつちでも良いことか、それで

『入場券』は役に立ったかな？」

「一々探す手間は省けたけど、あの『機能』のせいで、かなりずれたわよ」

「仕方ないさ、入場券であってフリーパスでは無いからね、ある程度はご愛敬ということで勘弁してほしい」

「所で、なんで今なのかしら？」「どどういう事だい？」

「彼らを幻想入りさせることよ」

「それに関しては説明したはずだが？」

男性は再度、煙草に火をつけようとするが、紫を見て吸っていいかと訪ねた

紫は少し不機嫌な顔をして、「今日は帰るわ」と言い残し空間の物

体の
中に消えていった。

「やっぱ煙草嫌いか・・・あ、もう無いか洋輔君にとって・・・居ないんだよな」
そう嘆いて煙草に火をつけ勢いよく紫煙を吐いた。

洋輔は紅魔館の中を歩いていて、先ほどからメイド服を着たどう見ても妖精
にしか見えない子達。もう驚き疲れて、この程度では驚かなくなっ
てきている
そうして外に出た洋輔はふらふらと門に向い、昨日あった門番の彼
女を見る。

寝ていた、どうみても寝ていた、明らかに寝ていた、昨日と同じく立ったまま

寝ていた。その身に纏うチャイナドレス見た目は人間のようだが咲夜さん曰く妖怪らしい、一番初めにあったけど名前まだ聞いてない。

「門番さん？」反応は無い

「門番さん！？」反応はやっぱ無い

仕方が無いので実力行使に出よう、まずは肩をゆすってみる。

ダメ、次、肩を叩いてみる・・・ダメ！

洋輔は思うこの人本当に門番なんだろうかと、失礼だが案山子でも置いておいた方がいいんじゃないかと。

次の瞬間、飛来したナイフが彼女の後頭部に刺さり飛び起きる

「・・・寝てません！寝てませんよ！あれ・・・？」

「どうもおはようございます」なんと微妙な空気だがそれよりも

「すいません、外で煙草吸わしてもらえませんか？」

今現在、精神的に限界な洋輔はそっちの方が重要だった。

「あー生き返る」口に煙草を咥えたまま壁によりかかり、紫煙を吐きながら

何処の親父と言われんばかりの台詞を放つ。

「すいませんね・・・えっと」「紅 美鈴ですよ」「美鈴さん」

「煙草吸われるんですね」

「流石に館の中でつてのは無粋でしたんで、あーお嫌いですか？」

「いえ、徳に気にしてませんので」「すいません、お言葉に甘えま
す」

「処で門番て大変なんですね」

洋輔は紫煙を吹かしながら美鈴に尋ねる、美鈴は苦笑いを浮かべな
から

「・・・ええ！大変ですよ、そうですね！居眠りも仕方
無いんです」

彼女はそう熱弁するが、あいかわらず頭に刺さりっぱなしのナイフが
妙にシユールである。

「所でお連れの方は？」

「パチユリーの所で論議の最中、俺にはついて行けないんで」

「外来人の方でパチユリー様と議論できる人がいるなんて・・・」

美鈴は驚愕の顔を浮かべるが、洋輔はほとんど無くなった煙草を
靴の踵でもみ消しながら

「あいつは真正銘の天才ですから」

まあ超変わり者ですけどねと付け加え、館の中へ戻っていった。

そして夜が来る

昨日に続き行われたお茶会、今日は出席者4名

紅魔館の主 レミリア・スカーレット
大図書館の主 パチュリー・ノーレッジ
天才の外来人 久我 優
外来人 凧沢 洋輔

昨日と違い大所帯、おいしい紅茶とおいしいお茶菓子でも、相手は吸血鬼と

魔女。何とも豪勢だが何所か響きが怖い。

相変わらず、現在の置かれてる状況に若干鬱になっている洋輔とそれを気にせず茶菓子を貪る優なんとも対照的だが、そんな優が茶菓子を食べるのをやめて静かに口を開く。

「それで、レミリア氏。あなたは何処まで見えているのですか？」
その言葉にレミリアは少し眉を吊り上げ「何のことかしら」と
つぶやき紅茶に手をとる。

「解っていたから、僕らをここに置いてくれたんじゃないかなかったですか？」

貴方の【運命を操る程度の能力】で僕らの運命を見て何かしらの利益が

ある、だからこそ僕らをここに置いた違いますか？」

レミリアは目を閉じ紅茶を一口飲むと「何のことかしら？」と
再び真実を口にすることを断った。

「おい、優どついう事だ？」

「そういうことだよ、洋輔いくらなんでもただの人間を吸血鬼が置く
と

思つかい？ただの気まぐれ？食糧にするならとつくに血でも吸われ
てる

だろう？」

「そりゃ・・・そうだけだよ・・・お前一宿一飯の恩義があるのに
そこまで言つかお前？」

喧嘩にすら発展する勢いで優に詰め寄る洋輔、そんな洋輔を止めた
のはパチュリーだった。

「レミイ、止めておきなさい今回は分が悪いわよ」

一瞬で興味が無くなったのか、彼女は持っている本にまた目を落と
した

レミリアはやれやれといった表情を浮かべ、腹の内を語り出した

「ええ、そうよ貴方達が来るのは解っていたわ。
目的は・・・残念だけど話す訳にはいかないわね」

そして、彼女は邪悪な笑みを浮かべながら

「貴方達が帰れないのも、これから厄介事に巻き込まれるのは確か
だけれども」

そんな、2人にとって非常に面倒な事を告げた後
たっぷりと苺ジャムをスコーンに塗りつけわざと舐めるように平ら
げた。

5話 暗躍するものと2度目の茶会（後書き）

連続更新継続中！

次回、2人の能力が明らかに。

6話 能力

「帰れないだと？つか帰れたのかよ」

流石にこの中で煙草を吸うのをためらったのか、洋輔は火のついて無い煙草を啜えながら嘆く。

「あら？言つてなかったかしら」

しらじらしく、嘘をつくレミリアを差し置き、

今度は優が悩みのタネを投下する。

「それで、洋輔の能力はなんなのさ？」

「能力？能力つてなんだよ？」

「あれ？僕には能力があつたから洋輔にもつて思つただけど？」

「意味が解らん、順を追つて説明しろこの頭脳派集団」

そして、またもいつのまにか注がれていた。リクエストした珈琲をブラックで胃に流し込みながら、洋輔は頭が痛くなりそうな話に耳を傾けた。

「そうだね・・・簡単にいえば、この幻想郷に住む、人間・妖怪たちが

もつ、特殊能力だね。色々なものを操ったり、様々なものに効果を与えたり、何かの技能を得たり。十人十色・多種多様で基本的に基本その人物の単一が多いね、種族別つてもあるらしいから興味は尽きないね」

「……正直ほとんど解らんが、便利な能力を基本皆持つてるってことか、それで優お前の能力はどんなもんなんだ？」

「そうだね僕は『魔法を使う程度の能力』だね」

一瞬、飲んでた珈琲を吹き出しそうになりながら、それを抑えこむ洋輔を尻目に優は説明を続ける。

「と言っても、『魔法を使う程度う程度の能力』はおおまかなくく
りで

僕の能力の詳細は、『理解した魔法を使う程度の能力』だね」

「なんか、物凄く反則くせえ感じがする能力だなオイ……」

「そうでも無いよ、結局理解しなければつかえないし。」

洋輔は思う、理解しなければつかえない、だが裏を返せば理解すればなんでも使えるという事である。しかも、その能力の使い手が天才であればどれほど、強力な能力であるか……

「優、取り合えず、お前能力の事は解った……でもな、お前が
あって

も俺が持つてるとは限らんだろ……その前に調べる方法とかある
のか？」

「んーそういえば無いね」

「そうだろがよ……大体んなパツと出るもんでも無いしよ」

そして、顔の前で手を握って開く動作をした

「出たね」

「出たわね」

「出たようね」

「出ましたわね」

皆々のそれぞれのツツコミを受けつつ、手の中で燃える火を見る。熱さを感じる事は無く、かといって服に燃え広がるうとしない。なんとも不思議な火。だが問題はいくつがある。

「所で・・・是なんか意味あるのか？」

炎とはとても言えず、焚き火の残り火程度の火が手で燃えているだけ。それ以外は特に何も無い。

「訓練を積みばなんとかなるよ？」

「だから・・・なんで疑問系なんだよ！」

「名をつけるなら・・・『火を付ける程度の能力』かな・・・」

本当に頭が痛くなってきた洋輔は、遂に我慢できなくなり自分の出した火で煙草に火を灯した。

6話 能力（後書き）

又詰まった・・・今度も連続更新出来たらイイナア・・・

ご感想、ご指摘等ございましたドンドンください
励みになります。

7話 特訓・地獄の一丁目

紅魔館の壁にもたれかかり、煙草を吹かしながら洋輔はここ数日の事を思い出していた。

能力の覚醒、そして、それに伴いこの幻想郷で生き抜くために必要な弾幕ごっこ、スペルカードルールを覚える必要があった。優の能力の特性からかパチュリーが知識を教えることになりそして、洋輔にはレミリアにより特訓という名の拷問が始まった。

特訓その1 まずは回避を覚えよう

「洋輔、現在の貴方の能力では戦闘ではまず役には立たないわ。ならば

やることは解る？」

「まずは防御ってことか？」

「あら？物分かりが早いわね、やることはとても簡単よ今から咲夜の弾幕を避け続けなさい。咲夜！」

レミリアが指を鳴らすと、彼女の横に静かに咲夜が文字通り突然現れる。

突然現れる彼女にもう驚かなくなっている自分が、だいぶ幻想郷に慣れて

きているのに若干の嫌気を感じながら、洋輔は身構える。

「咲夜、いい？くれぐれも強めでそして激しくよ、それ以外は認めないわ」

「待て、初心者相手にそれはおかしいだろ！」

「始めなさい、もちろん倒れるまでよ」

「話聞いてないだろ……」

そして、咲夜さんが持つて来たであろう椅子に腰かけ。

モーニングテーパーならぬナイトテーパーを決め込むレミリア

「申し訳ございません、お嬢様のご命令なので」

「いや……別に咲夜さんが悪い訳じゃ……」

「トドメは痛みが無いように、一瞬でつけますから」

『咲夜の世界』

そういう気づかいは何所か違うようなと突っ込みを入れる前に

『幻符「殺人ドール」』

世界がナイフで包まれた

数えるのがアホらしい数のナイフが絶え間なく襲ってくる

実際なんで生きてるのか不思議なくらいである、たぶん
咲夜さんが、なんだかんだで手を抜いてくれたのであるう

キツチリとトドメはさされたが。

「洋輔、やっぱりここにいたんだね」

空から優がゆっくり下りてくる、なおこの天才は能力を覚えたその日
に空を飛び、数日の内に弾幕ごっこでパチュリーに食い下がるほ
どと

なっている。

洋輔はその姿に妙に苛立ちを覚えて紫煙でも吹きかけてやろうと
思ったが空しくなりそうなので止めた。

「よくここに居ると解ったな」

「洋輔が煙草吸う時は大抵屋外だからね」

「吸うか?」「吸わないの知ってるでしょ?」「聞いたただけだ」

洋輔はゆっくりと紫煙を吐きだし、もたりかかりながら座り込んだ。
「にしても・・・優なんかお前が飛んでる姿に違和感が無くなつて
きた」

「僕もだよ、人間こんなに簡単に飛べるなんてね」

「俺はそうは簡単に飛べなかつたんだが・・・」

洋輔は特訓という名の拷問を再び思い出した。

特訓その2 空を飛ばう

「さて貴方も能力を覚醒したわけだから

空を飛べる事が出来るはずよ？優はもう飛んでいるわけだし」

「だから・・・んな簡単に出来たら苦労しねえって・・・」

「あの・・・お嬢様、なんで私は呼ばれたんですか？」

と庭に正座させられている美鈴さんがおずおずと手をあげて問いかける。

「美鈴、貴方には少し手伝いをしてもらうだけよ」

「あの・・・門番はどうすれば」

その瞬間風切り音と共に美鈴さんの顔すれすれをナイフが通り抜けた

「あら・・・聞き違いかしら、昼間居眠りをしていた不届き者などいないわよね？」

とても顔すれすれのナイフを投げた者とは思えないほど、平然と笑顔で

立っていた、さらに、彼女は「次は中てるわよ？」と付け加えた。

「いえ・・・ナンデモナイデス」

美鈴はその笑顔から目をそらしながら、頷くしか道は無かった

（だが咲夜さん・・・俺にも少し掠ったのはわざとですか？それとも偶然ですか？）

残念だがその素敵な笑顔の前に、洋輔は口を紡ぐしかなかった。

そして、レミリアはこの前と同じ様に椅子に腰かけ。ナイトティーを楽しみながら内容を口にする。

「何、とても簡単よ貴方は飛べるけど。今まで飛ぶという概念が無かったから飛べないと体が思っているだけ。要は認識よ」

「認識と呼ばれてもな・・・具体的にどうすればいいんだ？」

「だ・か・ら、強制的に認識させてあげるわ。」

「凄く嫌な予感しかしないんだが・・・」

「とりあえず、飛べると思いなさい。出来なければ・・・美鈴」

「は、はい！」

「合図をしたら、空に向って彼を投げなさい」

「「え!?!」」

「最初はまあ・・・5メートル程度で行きましょう」

「待て待て!!!それは本気で死ぬ、ヘタすりゃ死ぬ」

「大丈夫よ、ちゃんとある程度の高さから受け止めてあげるわ

・・・美鈴がね」

「わ、わたしがですか!」

「鬼か・・・アンタは」

「あら?私は吸血鬼よ、忘れたの?」

断ろうとしたが、結局のところナイフで囲まれ強制的にさせられた訳で・・・

「・・・すみません、すみません、すみません、すみません」

「いや・・・もう美鈴さんのせいとかじゃないですから」

「・・・失敗しても祟らないでください、恨まないでください、呪わないでくださいお願いしますから」

半泣き状態の美鈴さんが、そう懇願してくるが、そもそも失敗するのが

前提で話を進めないでほしい。

「解りましたから・・・恨みませんから、祟りませんから、呪いませんから」

「・・・本当ですか？」

「ただ落ちていてやってください、お願いですから」

もはや運命天恩、認識とかそんなレベルじゃねーぞ！と、いいたいこの事態の張本人であるレミリアは優雅に紅茶を飲み、一種の道楽としてこちらを見ている。

洋輔は飛んだ、美鈴の手で天高く。

結果として35メートルまで飛ばされて、地面に落ちるギリギリで何とか飛ぶことに成功した。

このとき、洋輔はいつかレミリアに何かしらの復讐することを心に深く刻んだ。

7話 特訓・地獄の一丁目（後書き）

洋輔特訓編第一段投下です

長くなりそうなのでここで終了いえ

本当はここで弾が尽きただけなんですが・・・

洋輔君の受難はまだまだ続きます

8話 特訓・地獄の2丁目編

今日も今日とて世界は進む、昼間に見える月を大の字になって見上げる洋輔は、昔、宇宙飛行士になって月に行ってみたかった。そんなどうでもいい思い出しか、頭の中にしか浮かばないほど洋輔は疲れていた。連日連夜行われる、特訓という名の拷問明らかに、レミリアの暇つぶしとしか思えない出来事を洋輔はまた思い出した。

特訓その3 スペルカードを作れ

「さて、洋輔、空も飛べるようになった、回避もマシになったという事で次は攻撃に行ってみましょう」

相変わらずナイトテイを洒落こみながら、レミリアは特訓と言っ名の

拷問を始めようとする。

「なあ、レミリア氏よ」

「何かしら？」

「前から言おうと思ってたんだがよ、いい加減死ぬぜ、マジで死ぬぜお前さんは加減という言葉を知らないのかよ！」

「さて、質問も終わったようだし、始めましょうかしら」
「デメエ……人の話を聞けや」

洋輔からの文句を無視してレミリアは続ける。

「スペルカードルールは、パチエから詳しく説明して貰ったと思うから

省くけど、なにより弾幕の要は『美しさ』よ」

戦闘に美しさに何もあつたものでは無いと洋輔は思ったが、そんな事を口にすれば、この後の地獄が、無限地獄か最終地獄かいったいどんな地獄がまっているのか、想像するのも悪寒が走るので洋輔は口を紡いだ。

「それで、洋輔、貴方スペルカードは何枚出来たの？」

「暫定的でいいから作つとけ言つてからなあ、まあ3枚は」

「そう……まあ合格点つて所かしら、相手は咲夜！」

「お呼びですか？お嬢様」

「今から洋輔の相手をしてあげなさい」

「かしこまりました」

(暫定的に作らせたのはこの為かよ、どうせ拒否権ないだろうし)

やれやれと肩をすくめながら、洋輔はポケットに入れておいたスペルカードを取り出し一歩前にでる。

「お手柔らかに……と言いたいですが無理ですよね」

「申し訳ありませんが、お嬢様はそう望まれていますので」

「……こつちのスペルカードは3枚です」

「かしこまりました、では十六夜 咲夜参ります!」

その戦いの火蓋が切って落とされた瞬間、最初に動いたのは洋輔だった、相手の攻撃を見てからのスperlから使うなんて考えてる暇は無い。策を練る・虚を突く・奇をてらうそんなモノを考える以前に、実力が違う、戦闘経験が違う、まず勝ち目など無い、だが風沢 洋輔という青年は何もしないで負けるという事が

『火炎「フラッシュオーバー」』

なによりも大嫌いだった。

広範囲にばらまかれる火の弾幕、途中さらにその一つ一つが連鎖的に爆発し逃げ場を奪う、が、咲夜はそれを時を止めることなくひらりと避け、何事も無かったかのように空から洋輔を見下ろしていた。

「下では、庭が壊れ兼ねません。上がってきてもらえませんか？」洋輔は絶望的な力の差を身をもって認識しつつ、静かに空へ浮かび咲夜と同じ高さまであがった。正直なところ打つ手無し、レミリアもとんだ地獄を用意してくれたもんだと、心の中で彼女を呪った。

「力の差があり過ぎますね、これではお嬢様のご命令に答えられません」

そこで私は、能力を一切使いません」

能力を使わない、要するにナメられているのだが、それは仕方が無い。

「それでは、次は私から行かせて頂きます」
それが現実なのだから。

『奇術「エターナルミーク」』

確かに能力を使わないと言ったが、彼女のナイフ投げの実力は天下
一品

そして戦闘者としても上位者、ハンデとなっても負ける要素にすら
ならない。なお優は時を操る魔術を覚えたらしく、それを使い
彼女を後一步というところまで行ったらしい・・・
ますます反則になってきている。

洋輔は、自分に向って正確無比に飛来するナイフの群れを
何とか避けながら、手段を模索する。

(フラッシュオーバーは通じないのは解ってる、なら、もう一つは
時間稼ぎに

すらならねえ使っただけ無駄・・・ならば、最後のアレは・・・出来
るか?)

洋輔は考える、自分に残されたであろう最後の手段であろうスペル

カード

確かに勝つことは出来ないだろうが、一矢報いることは出来るかもしれない

だが問題は多々ある、なによりソレは射程は短い、タメは長い、隙はデカイの
無い無い尽くしである。

まず、力を溜めつつ、あのナイフの雨をまず避けつつけなければならぬ

これが第一関門

そして、ナイフの雨をくぐりぬけ接近しなければならぬこと

これが第二関門

そして最終関門、相手に避けられることなく決めること

このなんとも絶望的でしか無い段階を踏む必要がある、だが悲しい事に

是しか方法が無い。泣きたい気持ちを抑え洋輔は右手を握りこみ力を込めた。

そして、拳が激しく燃え上がった。拳全体を包み込み、能力に覚醒した

時とは比べものにならない火力で燃え上がる。

その光景に咲夜は一度手を止める。

「能力が強くなったのですね」

「おかげさまでね、これぐらいは出せるようになった」

「ですが・・・その程度では届きませんよ？」

「届かないのも、敵わないのも承知の上ですよ」

「そうですね、では二枚目行きます」

『傷魂「ソウルスカルプチュア」』

凶悪な量の投げナイフが洋輔を襲う、一瞬右手でガードと考えたが是はあくまで、力をため込んでいるのであつて防御には使えないのだ。

仕方ないので避ける、避ける、掠ろうが少しぐらい当たろうが致命傷だけは避けるため気力と根性が続く限り避け続ける。

(・・・もう少し！)

そして、止むナイフの暴風それに少し遅れて溜めは終了取りあえず第一関門はクリア。

「やりますね、ここまで凌ぐとは思っていませんでした」

「しぶとさが売りなんでね」

「2枚目で終わりと思つたのですが、あなどっていました」

それでは、3枚目は・・・本当に手加減いたしません」

是非とも手加減してほしいものだが、目の前にいるメイドさんは言葉の通り全力で来るだろう。そしてこちらは第二関門、このスペルカードの射程範囲まで、あのナイフの暴風を抜け接近しなければならぬということ、射程は2〜3メートル
欲を言えば零距离、威力は申し分ないが何とも残念なスペルカードなのである。

「畜生！！やるしかねえんだろがよ！」
こっちはやけっぱちの玉砕覚悟。発動される前に少しでも距離を詰める、距離は目測40メートル地味に遠い。

『幻符「殺人ドール」』

今まで本当に手加減をしてくれたらしい、今までののが弾幕と比べると笑えてしまうほど強大な数と密度、避ける？防ぐ？絶対無理ならば遣る事は一つだよなあ

「突進！貴方死ぬ気ですか！？」
無駄口叩くな、こっちは喋る余裕すら無いんだよ！ 後20

「愚行にもほどがあります、万策尽きたとは言え。
諦めるなど期待はずれでしたね・・・」彼女は腕を振り上げる
その瞬間さきほどの倍以上の数のナイフの弾幕が展開される

なんとでも言え、尽きたんじゃないかって是しか方法がねえんだよ！
後10！

「落ちなさい！」振り下ろすと同時に展開されたナイフの団幕が
一斉に洋輔を襲う、洋輔はそれを回避すらせずと真ん中に
突撃する。

「チエックメイトね」

数十発の弾幕が洋輔に着弾するのを見て、彼女は終つたと目を背ける。

「終つてねえぞ咲夜さんよ！」

ポロポロになりながら、弾幕の嵐の中から洋輔が飛び出してくる。

「射程内だ！喰らえよ、俺の最後手をよ！」

『業火「バツクドラフト」』

右の拳を空間に叩きつけ、溜めに溜めた力を解放する。

勝てなくてもいい、せめて、この一撃だけは！

そして、一つ目のスペルカードとは比べものにならない一撃が咲夜を吹き飛ばした。

だが、吹き飛ばされた咲夜に大したダメージは無く、せいぜい服をある程度焦がしたに過ぎなかった。

余りにもあり過ぎる差、現在の死力を尽くしてこれとは。流石に限界に来たようで、洋輔は地に降りて両膝をついた。

肩で息をしながら声も絶え絶えに
「ギブアップ・・・もう無理」
と敗北宣言した

そんな、洋輔にレミリアはひとつ見下してやろうと近づくが、
レミリアの小さな体と洋輔の高い身長がそれを許さなかった
結局のところ構図的には、洋輔が目を合わすためにしゃがむで
いると見える、レミリアは妙に腹が立って来たので洋輔の頭を
一つ叩いて
「美しさが足りないわよ」と誤魔化した。

「素人相手に無茶言うな」
「あら？そうだったかしら」
「白々しく言うんじゃないよ」
「所で咲夜、私が始まる前に貴方に言った命令覚えている
かしら」

「・・・申し訳ありませんお嬢様」
「一発も貰ってはならない、私はそう言ったはずよ」
「おい！テメエら何処まで人のこと舐めてたんだよ・・・
まあ舐められても仕方ねえけどよ」
「さあじゃあどんな罰を与えようかしら・・・？」
「器が小さいな・・・」

煙草に火をつけながら、洋輔はレミリアに反論する。
レミリアは青筋を浮かべながら洋輔に迫る。
「誰が器が小さいって？」

「俺が死力を尽くして、酬いた一撃を舐めんじゃねえ
それに最初から人を舐めていた、指示したのはテメエだろ
それを他人の責任にすんじゃねえよ」

「アレは、明らかに咲夜の油断よ関係ないのは黙っていて
下さないかしら・・・？」

「おお、怖い怖いそれだから、そっち（背）も小さいんだよ
だが、あの状況に引き込んだのは、死力を尽くしたからこそだ
最初から人という存在を舐めてたのがそもその原因じゃねえの？」
「何処が小さいですって？」

レミリアの青筋が誰からも解るほどくつきりしたものになる。

「それに、主なら自分の部下を労うぐらいの許容見せるよ、
アンタはそんなに小さい吸血鬼かレミリア・スカーレット？」

紫煙を上空にひとつ吐きだし、洋輔はレミリアの目を見る
吸血鬼の眼は魔眼である、本来強く眼を合わせては良くないのだが
この男は無知なのか何なのか、目を少しも逸らさない。

レミリアはすっかり毒気を抜かれ、
「興が覚めたわと」目をそらしてしまった。

なお、良く食い下がった報酬として、レミリアからスペルカードの
ネーミングをもらったのだが非常にネーミングが「アレ」で
あったため、洋輔は「使える、自身がついたら使う」と
理由をつけ永久欠番行きとなったのは余談である。

8話 特訓・地獄の2丁目編（後書き）

洋輔君特訓編2&初戦闘シーン・・・

疲れた・・・疲れたよ・・・ぱと（ry

おかしい所等ありましたらドンドン

指摘してください・・・

次はついに紅魔館編終了予定です。

9話 旅立、ありがとうそしてさらば紅魔館

紅魔館の大図書館の一画で優は一人自分のスペルカードをチエックしていた、本来なら彼はこの主と同じく読書に興じるか彼女と議論を交わす事しかしないのだが、今日の彼は黙々と何かメモをとりながら、一枚一枚を品定めするように。

「ここにいらしたんですね」

そう言いながら、小悪魔がティーカップを持ちながら本棚の影から現れる、なお彼女の主であるこの図書館の主は別の場所で読書に興じ続けている。

「ああ。小悪魔どうかしたかい？」

「紅茶を入れたんですが、いかがですか？」

「ありがとう、いただきよ」

そうしてメモを取るのを一端中止し、優は紅茶に口を付ける。

「咲夜さんもそうだけど、子悪魔の紅茶もおいしいね、今日でしばらく
飲めなくなるのが残念だよ」

「そうですね・・・パチュリー様には？」

「もう言ったよ、パチュリーらしく」「そう」「って一言と」「また来て
良いわよ」

つて言葉貰ったからね、また機会があればよらして貰うよ」

「やっぱり、行ってしまふんですね」

「洋輔とも相談したけど、いつまでもお世話になり続ける訳には
いかないからね」

「あの優さん、クッキー焼いたんですけど食べます」
「うん、貰うよ」

彼女は悪魔の耳を嬉しい時の子犬のように動かしながら、本棚の影に消えた

洋輔も言っていたが、とても彼女が悪魔であるとは思えない。
優も同感である、名は体を表すというが、それは彼女には当てはまらない。

そして、彼女が持って来た紅茶を飲み干して、スペルカードのチェツクに

戻ろうとしたとき、子悪魔が戻ってきた。

「ずいぶん早いね」

「そうですね？後クッキーだけというのも何なんで、紅茶の御代りも」

ティーポッドを抱えながら、やっぱり悪魔とは思えない、天使のような笑顔で

彼女は微笑んだ。

「それにしても、一杯あるね」

皿に山盛りになったクッキーを一つとり、口の中に運ぶ。

硬過ぎず、かといって柔らかすぎない絶妙の風味を生み出す硬さ

そして、それに負けない甘すぎず、かといって薄過ぎない絶妙な味
高級菓子店で並んでも謙遜無い一品であった。

「味はどうですか？」

「おいしいね・・・久しぶりに食べたねこんなおいしいクッキー」

一つまた一つと口の中に放り込む。
そんな、優の感想を受け、笑顔になりながら子悪魔は紅茶を注いでいた。

「あの・・・優さん」

「なんだい？」

「優さんは幻想郷に来て・・・その良かったと思いますか？」

「どうして？」

「いえ・・・その・・・前に洋輔さんが帰りたがってましたので」

「そうだね・・・それは良い所もあるし悪い所もあるし一概には」

「うん、ここに来なければ、僕は魔法には出会えなかつたし

かと言って正直な所、洋輔は僕が巻き込んだようなものだし。」

「優さんが巻き込んだ・・・？」

優はまたしてもクツキーを口に放り込みながら、「そうだよ」と

呟いた。

微妙な沈黙が2人を包みかけた中、小悪魔は切り出した。

「あの・・・優さん、よろしければ優さんが向こうに居たときの話していただけますか？」

「え？」

小悪魔は少し頬を赤らめ

「いえ・・・あの・・・暇であればよろしいのですが・・・あの向こうがどんなのか気になるというか・・・あのその・・・」

「いいよ」「え！いいんですか？」

「うん、用意は終わってるからね。今やってるのは半分暇つぶしみたいなものだし」

そして、優は自分の生まれ育った町の話、自分の親友の事、そして静かに時間すぎていき、子悪魔はその話を楽しそうに聞き続けた。

洋輔は貸して貰った部屋で、荷物を整理していた。

レミリアと咲夜に挨拶を済ませ、図書館でパチュリーに挨拶を済ませた後

とても優と楽しそうに話す小悪魔を見つけたが、割り込んで挨拶するのは

不粋だと思い、部屋に戻り荷物を整理していた。

静かにドアが開き優が戻ってきた。

「よお、お楽のしみだったな」

「何をだい？」

「気にすんな、独り言だ」

「で・・・挨拶済ませたよな・・・と終わり」

「うん、終わってるよ」

そして二人ベットに腰掛け向かい合う。

「所で優・・・少し話がある」

「なんだい？行先ならもう決めたよね」

「違う・・・優、お前、俺が巻き込まれたとかで

自分に責任があるってお前が思ってるんじゃないやねえよな？」

「それは・・・だって僕があの時、神社探そうって言わなければ

こうならなかったし、それに、そもそもあの本がなければ・・・」

「ふざけんな！勘違いすんな、俺は誰のせいにもしたくないし、

誰かのせいだとも思ってるねえ。それに決めたのは俺だ教授の手伝いを決めたのも、お前とあそこに行ったのも俺だそれは変わらねえ

だから気にするな。言っとくが、でももストもねえぞ」

「・・・本当に、洋輔には敵わないなあ・・・解ったよ」

「そういう事だ、残念だが俺には一人で幻想郷回れそうにないしな
当てるにしているぜ優」

「解ったよ洋輔」

二人の振り上げた手のひらは、空中で交差し派手な音を立てた。

「所でよ、優お前いつこあちゃんとあんな関係になつてたんだ？」

「え？」

なんだかんだ騒がしくした二人が去り、何時もの静寂が紅魔館に訪れる。

レミリアはその静寂の中、眠気を覚えず一人紅茶を飲んでいた。

「あの、お嬢様」

隣に立っていた咲夜がレミリアに問いかける。

「どうして、彼らを此処に置いたのですか？」

「あら？どうしたの突然」

「いえ・・・少し気になっていたもので」

「賭けよ」

「賭け・・・ですか？」

「そう賭けよ、そうは言ってもまだオープニングベッドの段階、降りるか

乗るかそれはもう少しだけ先の話よ」

9話 旅立、ありがとうそしてさらば紅魔館（後書き）

こあ、かわいいよこあ

紅魔館終了とついでに優クンがフラグを立てました
次は少々閉幕を挟みつづきます。

閉幕

その日、本で囲まれた部屋で男が一人、椅子に腰かけ珈琲を飲んでいた。

何時もの彼は、ボサボサ頭に味気の無い白衣の姿だが、今日は髪は整えられており、スーツ姿であり、さらにいつも埃っぽい部屋なのだが

今日は掃除されており。

さらにヘビースモーカーである彼の灰皿は常に吸殻で山盛りになっているが

今日は、吸殻一つ入っていないかった。

そして何より、本日は煙草では無く、禁煙パイポがその口にくわえられている。

彼は何かを待つかの様に椅子に腰掛け、本を片手に読書をしていた。

そして、ノックが1つ響き渡る。

だが、彼は何も言わず本を閉じ、ドアの方向では無く自分の対面に向って

「ようこそ」とつぶやいた。

いつの間にか彼の対面にあつた、椅子に八雲 紫は腰かけていた。

「こんにちわ、教授さん。それにしても今日は偉く片付いているじ

やない？」

「今日はキミが来る予感がしたんでね、流石に散らかり過ぎていたんで

片づけた」

「珍しいわね・・・それで前に言った質問答えてくれる気になったかしら？」

「質問？そんなものしたかな？」

「彼らを幻想入りさせた理由よ・・・いい加減詳細を語りなさい」

「冗談だ・・・キミなら予想付きそうな気がしたんだが・・・所で珈琲居るか？」

彼は席を立ち、備え付けられた珈琲メーカーを指差しさした。

「・・・砂糖多めで頂戴」

そして紫の目の前に、砂糖がたっぷり入った珈琲と教授の前にブラックコーヒーが

おかれる。紫はそれを一口だけ飲み、手に持った扇子で口を隠しながら。

「それでは本題に入りましょうか」

「それじゃ、まず何から聞きたい？」

「まずは、なんで今なのかしら？あなたの計算ではもう少し先のはずよね？」

「簡単な事だ、どうせ入ってしまうなら早い方がいいって単純な理由だ」

「彼らを鍛えるため・・・かしら？」

「それもあるね・・・」

「何より、あの子なら鍛える必要も無いじゃない。あっちの子は話は別だけど」

「確かにそうだけどね、別に力を鍛えるためだけじゃないさ。

それに、彼の存在は力より大事なのさ、優君にとっても、まわりにとってもね」

「彼の存在がね・・・まあ貴方が言うくらいだからそうなのでしょ
うけど」

教授はブラックコーヒーが入ったカップを回しながら

「彼らには事後承諾になってしまうのが、申し訳ないけどね、所で
彼らはどうだい？」

「取りあえず、順長と言えるかしら」

「そいつは重畳だな」

教授は煙草が吸いたいのか禁煙パイポを口にくわえ、椅子の背もた
れに全体重を

かけ「本来なら、僕があそっち行けばいいだけなんだろうけどね」と
天井を見上げつつ嘆く。

「でもそれをする、是から起こるであろう異変の調査が厳かにな
るでしょ」

「分身できりや苦勞しないんだけどさ・・・そこまでは弄れないの
よ」

「そう・・・取りあえず珈琲御馳走様」

彼女は席を立ち、彼女がスキマと呼ぶ空間を作りだし、其処に入る
うとする。

「おっと・・・ちよっとまった紫」

「何かしら？」

彼は立ち上がると椅子に掛けてあった、ネクタイと上着を抱える

「これから私とディナーでもいかがですか？」

彼は西洋の紳士のようなポーズをとる

「あら？今日はほんとに珍しいことだらけね、明日は槍でも降るか
しら」

彼女は「ただし煙草はダメよ」と付け加え彼の手を取った。

――
ついに彼らは、自分たちを神隠しした主犯候補八雲 紫に近づく

だがそれは、彼らの幻想郷にかかわる始まりに過ぎなかった。

次回！「二人で幻想入り：人里編序章」彼らはそこで何を見る？

「あの文様・・・これ何なんですか？」

「何って椀、（私が勝手に作った）次回予告のナレーションですよ。解らないんですか？」

「ナレーションってなんでですか!？」

「うるさーいーい! シャラーラーープ! 地味に出番があつて、さらにナレーション役ですよ文句言わない! なんですかそれは？」

「まだ出番がない私への中てつけですか? それとも作者の好みが高いから」

「出番が多そうだっていう余裕ですか?

「..... 赦さん!! 絶対にだ! こうなったら腹癒せにもみもみしてやる!」

「やっぱり腹癒せじゃないですか! って..... アツーーーーー」

「.....」

—何があつたかはご想像にお任せします—

閉幕（後書き）

最後の寸劇はつい勢いでやった反省はしてない

ただし後悔はする。

そんなわけで、暗躍する教授とゆかりんです

そして次は人里編が開始予定ですが、

その前に（忘れないうちに）オリキャラ設定を公開予定です。

オリキャラ設定

なぎさわ
風沢 洋輔

主人公1 久我優とは幼馴染である、身長は高く体格も良いが少々目つきが悪いため、良く不良っぽく思われるが。義理人情に厚く普通にいい人である、不良っぽく思われているのは本人も気にしている。

また考えるよりも、感性で動くタイプであり頭はあまり良くないらしい。だが、なんだかんだクラスのリーダー格であった。

能力は「火を付ける程度の能力」最初は手の平の上で種火程度しか出せなかったが、数ある苦行を乗り越え、拳ごと付ける程度に成長したが、手からしか火は出せない。

そして、ついに全身から炎を出せるまで成、長手・足・身体各部から自由自在に火を付けるにまで至るが燃費は悪い。

くが
久我 優

主人公2 風沢 洋輔とは幼馴染である、身長は低く華奢であり本ならどれだけ分厚くても持ち上げられるが、本以外のものは10キロ以上のものを持ち上げると

全エネルギーを使いつくすほど体力をが無い、さらに童顔のため年下にしが見られないが、本人は何一つ気にしていない。

だが、類まれない頭脳の持ち主であり神童・天才少年と
言われていたが、本人には一切そのことに関して興味はなく
飛び級・有名学校など全て断り、幼馴染の優と同じ学校に
通い続け、小・中・高と全て同じクラスになるという
珍事を起こす。

能力は「理解した魔法を使う程度の能力」

優が理解した魔法ならば、どんな魔法でも使う事ができる。

ただし、魔法でなければならず魔法が無い、理解不可能だと

使うことすらできないが、優の類まれない頭脳により恐ろしい数の

魔法を使いこなすことができる、現在は火水木金土日月の七曜と闇・

光

時の魔法を使う事が可能。

オリキャラ設定（後書き）

二人の設定投下です。

さてついに人里編、どうなることやら・・・

10話 勘違いほど怖いものは無い

優と洋輔は博麗神社は、一路博麗神社を目指し空を飛んでいた。博麗神社、優の調べでは博麗神社はこの幻想郷と現世の境に位置しさらに、この幻想郷を管理する博麗の巫女なる人物が住んでいるらしい、管理者なら八雲 紫の居場所ぐらい知っているだろうと優と洋輔はまず博麗神社を目指すことにしたのである。

「にしても、空飛べるっていつでも・・・まだまだ慣れねえ」

「そうだね」

「高所恐怖症で無くてよかったとつくづく思うぜ」

「そうだね」

「そろそろ霧の湖だっけか、見えてきたぞ」

「そうだね」

優は空を飛んだ状態で、今日は本は読まずに古びた本に何かを書き綴っている。

「優？人の話聞いて無いよな？蹴るぞデメエ」

「そうだね」

全く人の話を聞かず、本に書き込みを続ける優に腹を立てた洋輔は勢いをつけ、蹴りを放つが見事に外れ態勢を崩した洋輔はその場で一回転してしまう。

「洋輔、何やってるの？」

「なんでもねえ・・・優後で覚えておけ」

「何をだい？」

そんなこんなしている間に彼らは湖の上空に辿り着き、当たりを見まわす

「博麗神社つてどつちだ？」

「ここから東方向のはずだけど、見えないね」

「まあまだ見えないだけだろ、とりあえず東にすすんでりゃ見えてくるだろ」

「……………!!!!!!」

その時、何所からともなく声が響く二人は周囲を見渡すが何も見当たらない。

気のせいかと思いい人は進もうとした瞬間、何かが二人のはるか上空から

降り注いだ……………洋輔に向って。

「……………ず頭突きが、み、鳩尾に……………」

見事なほど正確に洋輔の鳩尾に頭突きをぶち込み、のた打ち回る洋輔を

尻目にその頭突きを入れた何かが名乗りを上げた。

「こらぁ……………あたいの縄張りをあらすのはあんた達か!?」

その子は背中に氷の結晶のような三対の羽根を持ち、青いリボンをした

小さな妖精の女の子だった。

「……………『キミ』『おまえ』誰？」

「何ー！？あたいを知らないの？あたいはチルノ！サイキョーの妖精よ」

鳩尾に入れられたダメージからやっと回復したのか、よろよると洋輔は態勢を立て直す。

「人に行き成り頭突きを喰らわすのはどうかと思うぞチルノちゃんよ……」

「それは、あんた達が悪いんでしょ！妖精の縄張りに入ってきて皆はあたいが守るの、あんた達なんか氷漬けにしてやる！」

「話を通じなさそうだよ……洋輔……」

「らしいな……」

雪符「ダイヤモンドブリザード」

「凍っちゃえ！」

チルノから放たれる氷の弾幕を避けつつ、二人は一端距離を取る。

「マジで聞く耳持たずかよ！優！悪いが頼む」

「え！？僕がかい？」

「弾幕戦闘なら俺より強いだろがよ！それに俺じゃこの氷は無理だ」
「解ったよ、気が進まないけど」

そうして、ポケットからスペルカードの束を取り出し

これが良いかなと一枚をかざす。

炎符「エクストリームフレア」

スペルカードが発動されたその瞬間、チルノの回りを凄まじい数の業火が出現し爆大な渦を巻きながら、周辺ごと燃やしつくした。

短い悲鳴をあげ、チルノは重力に引かれ湖に落ちてゆく。
圧倒的な勝利、息を一つ整えスペルカードを戻そうとした瞬間
優の横を洋輔が猛スピードで通り抜けた。

「洋輔！追撃はルール違反だよ、それにもう勝負はついた」

「違う！やり過ぎだ馬鹿野郎！」

洋輔は考える前に体が動いていた、別に彼は追撃を行おうなど
考えてはいない。勝敗が決したのも知っている、妖精は死なない
それは前に紅魔館の妖精メイド達を見て。偶然にパチュリーが説明
してもらった

事を覚えている、チルノと名乗った妖精、確かにあの子はこのまま
湖に落下してしまっても何も無いのかもしれない。

自分がしようとしてる事は、何一つ無駄かもしれない、だが
洋輔は動かない訳にはいか無かった。

（っち！ もっとスピード出るよクソ！）

自分の遅さに心の中で悪態付きながら、なおも限界まで飛ぶスピード
を上げる、止まる算段は多少強引だがある。

だが、足りない距離が遠すぎる、少し少しだけ足りない。
足りなければ作ればいい・・・洋輔は強硬手段にでる

業火「バツクドラフト」

暫定的ではなく完全に己のスペルカード化した

事により溜めを作らなくても、威力は落ちるが打てるようになった

のである。

それを後方に打ち出すことにより、反動によって加速
何とかチルノの脚を掴む事に成功するが、ほぼ湖の湖面直前
焦りながらも、もう一枚スペルカードを発動する。

火竜「ファイアー・ドレイク」

西洋に伝わる、火のドラゴンの名を冠するスペルカード。

それはまさにドラゴンのブレスのように、手からレーザーのような
弾幕を発射、射程と威力ならトップクラスの威力を得ることに成功
した。

ただ使うと、霊力が0になるためリスクがでかい。

大量の水しぶきを上げながら、なんとか湖面すれすれで止まること
に成功する

「セーフ」と大きなため息をつきながら、何とかチルノを助ける（
？）事が

出来た洋輔だが、そんな彼にひとつ近づくと影があった。

緑の髪をサイドポニーにまとめ、チルノとはまた違う妖精の羽根を
持った

女の子が先ほどの洋輔に劣らない速さで突っ込んでくる。

Q・湖で妖精の女の子を逆さまに掴んだちょっと不良っぽい男が居ます

あなたはどう見えますか？

「チルノちゃんを放してくださいー！」

A・どう見ても変態か悪漢です本当にありがとうございました。

「・・・ま、またかよー！」

また見事に洋輔の鳩尾に頭突きが決まり、その拍子に洋輔はチルノを放してしまい、勢いよくチルノは湖に落水した。

10話 勘違いほど怖いものは無い(後書き)

人里編開始！の前にチルノと大ちゃん登場！！

人里じゃないのかって？誰も人里から始まるとは
言っておらぬ

単にチルノと大ちゃん出したかったわけじゃナイデスヨ・・・
ホントデスヨ・・・？

11話 博麗神社・前編

「ごめんなさい、ごめんなさい、本当にごめんなさい」

「いや・・・そんなに謝まらなくていいから・・・うん」

洋輔の鳩尾に見事なヘッドバットを入れてしまったことを大妖精は必死に謝っていた、だが、この、構図少し遠くから見ると、まるで大妖精を洋輔が苛めてるように見えてしまう。

「洋輔はちょっと見た目が怖く見えるからね」

そんな洋輔を傍から観戦状態であった、優が口を挟む彼の横にはチルノが寝転がっていた。結局の所、湖に落ちてしまい彼女は濡れで濡れで

ある、氷の妖精である彼女を洋輔の火や優の魔法で服等を乾かす訳にはいか無いので仕方なく寝かせてある。

優曰く、妖精は病気等そういうものは無縁らしくそう言うのは大丈夫

らしいが相変わらずそういう種族感に洋輔はまだまだ疎いたため「相変わらず、違和感が消えねえ」と漏らしていた。

「また、チルノちゃんが「人間が侵入してきたー」と飛びだしていつちゃった

ので心配なつて来てみたんですが、ごめんなさい
まさか助けてたなんて・・・」

「いや・・・まあ状態が状態だったしなあ・・・所で大妖精・・・

だった

かな、俺ってなんか怖い？」

「あ、私は皆から大ちゃんって呼ばれてますのでそう呼んでくださいはい、最初チルノちゃんが怖い人に襲われてるって見えつちゃたんで」

大ちゃんは洋輔の心に大ダメージを与えた。

純粹無垢とはある意味恐ろしい、とても素敵な笑顔で悩むこともなく嘘を吐くこともなく、なんの淀みもなくそう答える大ちゃんに

洋輔は改めて聞いてしまった事を後悔しながら、自分の不良っぽい雰囲気を感じた。

チルノが目が覚ました時、その目にまず映ったのは満点の青空だったそして、次に感じたのは地面の感触なんともぽかぽかして気持ちがいい

お昼寝でもしていたのかとチルノは思っていた。

目を擦りながら体を起こし、次に目に入ったのは大ちゃんと悪そうな男だった、チルノは徐々にさっきの事を思い出した

湖に入ってきた、二人の人間に弾幕ごっこをしかけてどうしたっけ？

だが今はチルノにとってそんな事はどうでもよかった、友達が目の前で
苛められている（ように見える）やっぱり、アイツらは自分が思った
通り

悪いやつらだった。

（大ちゃんは・・・大ちゃんは・・・あたいが守るんだ！！！）

「大ちゃんを！大ちゃんを！苛めるなああああああああ
！！！」

「さ・・・3回目かよ・・・」

そして、大ちゃんを守ろうと洋輔に突撃したチルノの頭が洋輔の鳩
尾にめり込んだ。

「洋輔……どうしてちょっと離れて飛んでるのさ？」
「うっせ……煙草吸いたいからだ……気にするな」
日に3回も鳩尾に頭突きを受けたせいも、洋輔は妖精に多少トラウマができた
らしく煙草を口にくわえながら、少し後方を一人離れて飛んでいた。
結局、なんだかんだで誤解が解け和解に成功、そして自分たちが
博麗神社を探していると言ったら、迷惑をかけた御礼に神社
まで案内してくれるということで、二人と二匹は空を同じく
している。

「あの……洋輔さんはどうしたんですか？」

「ん？気にする必要はないよ」

「そうなんですか？」

「そうだよ」

「優！優！」

「ん？チルノどうかしたかい？」

「優は強いなー、サイキョーのあたいに勝つなんて、でも

次は負けないからな！」

「そうだね、でも今回は2対1だったしね次は勝てる自信は
無いさ」

「そうか！やっぱりあたいはサイキョーよね！」

そんな、他愛の無い会話を続けるうちに、山の中に大層立派な鳥居を見つけ、チルノと大ちゃんからアレが博麗神社であることを告げられたあと、もう一度会おうと二人と約束を交わしたあと二人は博麗神社の境内に降り立った。

境内は綺麗に掃除されており、本殿事態も新築されたのかこんな山奥の神社とは思えないほどきれいであったが、

二人は思ったどうしてこうも人気が無いのであるかと、確かに山奥にはあるが、仮にも管理者が住む神社であるもう少し活気があってもいいものだが、余りにも人の気配がしなかった。

問題の博麗の巫女を探そうと境内を見て回る前に、洋輔は荷物の中から財布を取り出した。

「あれ？財布なんか取り出して洋輔なにするの？」

「ん？神社に来たんだぜ、参拝するのが礼儀つてもんだろ」

「それもそうだね」

二人は賽銭箱に向こうの硬貨ではあるが、投入そして2礼2拍手1拝そして、静かに目をあける2人は背後に気配を感じ振り返る。

「家に賽銭を入れる人間がいるなんて……」

洋輔と優の後ろには頭に大きなりボンをし、脇が大きく空いた特徴的な

巫女服を着た少女が立っていた。

楽園の巫女 博麗 霊夢

「おかしいわね・・・夢かしら、それとも異変の前兆・・・まさか妖怪

の嫌がらせ・・・」

二人は顔を見合わせ

「いや、神社では賽銭を入れるの普通の事だから」「声を合わせてツツコミを入れた。」

11話 博麗神社・前編（後書き）

ついに、東方の主人公霊夢さん登場。

もう一人の主人公も・・・登場させればいいなあ

12話 博麗神社・中編

「お茶でも入れてくるわ、ちょっと待ってて」

霊夢は妙に機嫌が良さそうに、二人に告げると二人を本殿奥の住居の縁側に待たせて、台所らしき場所に消えていった。

二人は取りあえず縁側に腰をおろす。

「・・・八雲 紫は居ないみたいだね」

「ハズレか、まあ情報ぐらいはあるだろ」

「とはいっても、彼女の能力を考えると見つけるのも、捕まえるのも大変だよ」

「それは承知の上、やらねえよりましだろ」

「お、変わったやつらがいるな」

二人の会話を遮る一つの声、それは上空から舞い降りた。

彼女は箒にまたがり、まるで魔法使いが被るとんがり帽をかぶった白黒衣裳の女の子だった。

「あーどちらさんで？」

「私は霧雨 魔理沙、普通の魔法使いだぜ。お前たちは？」

「俺は凧沢 洋輔まあただの外来人だな、んでこいつは久我 優

こいつは・・・こいつも魔法使いか？」

「ん？お前も魔法使いなのか、よろしくたのむぜ。あと私の事は魔理沙でいいぜ

それでお前らは何しに此処に？」

若干最後に、こんなボロ神社にと聞こえたような気がしたが、洋輔

は聞こえ

無かった事にし彼女にも事の顛末を話した。

「へえ・・・紫の奴を探してるか、悪いが私には心当たりが無いぜ。」

「内心仕方ないかと思いつつ、洋輔はちよつとだけ残念そうな顔をしながら

ふと優を見ると

寝ていた、静かな寝息を立てて優は完全に夢の世界へ旅立っていた。そんな姿を見た洋輔は、額に青筋を浮かべながら立ちあがり

「人が真面目な話してんだ、寝てんじゃねえよ！！」と優の脳天に手刀の唐竹割りを叩きこんだ。

「で・・・なんだっけ？」

「お前・・・いつから寝てやがった・・・」

「おまえら面白い奴らだな」

「魔理沙、あんたまた来たの？」

「おーす霊夢、暇だったから茶たかりに来たぜ」

「帰れ！」

洋輔は霊夢と魔理沙の関係になんとなく、近しいものを感じつつ
霊夢から貰ったお茶を一口飲んだ。

「私の分のお茶は無いのかよ？」

「あるわけ無いじゃない、今は取り込み中よ賽銭でも入れて帰りな

「さい」

「ケチ！茶くらいだせよ」「そーだぞ、ついでに私はお酒がいいぞ」
今までに居るはずの無かった第3者の声に洋輔は、その方向に首を
向けた

そこには、またいつの間にか居眠りをしている優の横に、少女が
いつの間にか座っていたのである。

確かに、見た目は少女いや少女というよりは幼女だが、その手は特
大の

瓢箪が握られており、そして、彼女の頭からは2本の角が天に向って
突き出していた。だが、そんなことよりも少女は

「おお、始めましてだな人間」

とんでもなく酒臭かった。

「誰……つか酒臭！」

「き……気持ち悪い……」

どうやら、優は居眠りでは無く彼女の酒臭さで気分が悪くなってい
たようである。

「私は、伊吹 萃香見たとおりの鬼だ」

「……風沢 洋輔だ、んでこっちの死にそうなのが久我 優だ」

「おお、そうか出会いの記念に一杯どうだ？」

「あんた達……今すぐ帰れー！！！！」

霊夢の怒号が境内に響き渡った。

12話 博麗神社・中編（後書き）

更新完了　今回はちょっと短め。

霊夢に続き、魔理沙そして萃香登場

次は・・・誰か出せるかなあ・・・

13話 博麗神社・後編

「それで、魔理沙氏と萃香氏重要な要件だけは、早めにすましておきたいから
少し黙って貰っていていいかな？」

萃香の酒臭さに当てられて、まだ気持ち悪そうな優は萃香から距離を置き先ほどから騒いでいた、魔理沙と萃香に釘を刺した。

「それじゃあ、本題に入ろう・・・まず状況を確認したい、先ほど言っていたけど八雲 紫の足取りは完全に不明、そして居場所も見当がつかない、そして何よりも博麗大結界に異常が生じていると」

「そこなのよね、紫の住んでる所は前から謎だったんだけど、結界に異常が発生していながら姿一つ表さないのよね。」

「それで、結界にでた異常ってどういうものなんだい？」

「別に、結界が消失しそうとか、そういうのじゃないの。言ってみれば
こうなっても、私達には対して特に実害も無いし、貴方達にしか実害が無いわ
簡単にいえば一方通行状態なのよね」

優は相変わらず古びた本に先ほどから、色々書きこみつつ様々なページに目を
通しながら会話するという荒業を披露している。

「つまり今は、入れるけど出れないととらえれば良いのかな？」

「そういう事ね、話が早いわ。申し訳ないけど貴方達は帰る事はできないの」

「なるほど・・・ちなみに結界に異変が起きたのはいつごろだい？」

「此処数日前の出来事よ、前兆もなし。私も修復しようとしてみたけど・・・

全く効果なし、博麗大結界を弄れるなんて芸当できるのは、紫ぐら
いだし

そして紫どころかその式すら表わさないなんてほとんど確定よ」

「確かに、僕達が幻想入りさせられたぐらいとほぼ一緒だね。状況
からみて

よほど僕達を返したくないのか・・・それとも他の目的があるのか
それにレミリアの言葉も気になる・・・でも全然情報が足りないな
あ
」

洋輔はお茶を飲みながら、優と霊夢の会話を傍観していた。彼もこ
の件の
当事者であるが、2人が何言っているかさっぱり理解できないので
ある

同じくお茶（優が手を付けなかったお茶を無断で飲んでる）を飲ん
でる魔理沙に

「なあ魔理沙・・・お前あいつらが言ってること解るか？」

「ん？まあ少しは解るぜ？」

「俺にはさっぱりわからんのだが・・・てか相変わらず優の野郎何処まで行く気だ」

「あいつが？確かに凄いが魔術師なんだろう？魔術師は知識が者を言うから」

私はそこまでないというか、自分の興味無いもの以外覚える気がないんだぜ」

自信満々に言う魔理沙、それは自身なのか開き直りなのかは不明だが。

「でも、酒は飲めないんだろ？その辺損してるね」

今まで黙って酒をのんでいたが、暇になったのか急に喋り出す萃香
そうして、手に持った瓢箪（おそらく中身は酒と思われる）を一気
飲みし

さらに、お茶を飲み干した洋輔の湯呑に並々と酒を注ぐ。

「オイ・・・なぜそうなる？」

「ん？お前さんも酒は嫌いか？人生の10割損してるぞ」

10割って人生の完全否定じゃねーかと心の中でツッコみつつ、この
鬼の幼女を黙らせるには一杯飲むしか無いだろ思い洋輔は

「嫌いじゃねえが・・・一杯だけだぞ」

そうして湯呑に入ってた酒を一気に飲み干した。

そして、洋輔は吹き出しかけた。洋輔は酒は決して強くは無いが、

飲める方であると

思っている、だがすすめられた酒は殺人級のアルコール度数を誇っていた。

その強さに流石に洋輔は吹き出しそうになってしまった。

「おい……！人を……殺す気が……！」

「んあ？口に合わないか？」

「強すぎるわ……！」

「ああ、鬼用は人に合わなかったか？それはすまなかったね」

反省するそぶりも見せず、悪ぶれようとせず、一気に瓢箪から直に酒を飲む。

取りあえず、優には一生飲ませられない酒だったのは解った。

優はアルコール分解酵素を持ち合わせていない人間なのである。

「洋輔、何やってるの？それより酒臭いよ……」

「好きでこうなった訳じゃねえよ……んで話終わったのかよ」

「洋輔……話聞いて無かったの？」

「あんな話について行けるほど、俺の頭は良くねえ」

「まあ……いいけどさ、取り合えずどうしようか」

「当初の予定通り人里行くか」

「紅魔館には戻らないの？」

「いや、流石にヒモ生活する訳にはいかんだろが。食い扶持ぐらい
どうにかしねえとな」

「でも、もう一度来ていってレミリアとパチュリーも言ってたし」

「テメエはいつからヒモになった」

「ヒモ？僕がかい、どのあたりが？」

「そういつ、自覚がねえ所だよ！」

そうして、洋輔の2発目の脳天唐竹割りが優の頭に直撃した。

「おまえらやっぱり面白いやつらだな」
そうして魔理沙はお茶を飲み干した。

14話　そして人里へ

結局のところ、博麗神社はハズレに終わりもし八雲　紫が現れたら教えてもらう霊夢に頼み彼らは神社を後にした。

そして、幻想郷の上空を飛行する3つの影、一人は箒に跨った魔法使い

一人は本を片手に飛ぶ魔法使い、そして、煙草を啜えた外来人だった。

「洋輔・・・中途半端に離れて吸おうとするけど、吸うなら吸いなよさつきから、出したり閉ったりきになるんだけど・・・」

先ほどから煙草を箱から出したり閉ったりし続けていた、洋輔について

ツツコミを入れる優を尻目に洋輔は、煙草の箱を揺らしカタカタと音聞きながら少し溜息をついた。

「いやなあ・・・ちょっと考えず吸い過ぎてよ、数がねえんだわそれでどうすつかなあって考えちまってよ」

「もうやめたら？補給のメドないんでしょ？」

「まあそうなんだがよ・・・」

彼らの教授もそうだが、洋輔も結構なスモーカーであるが、幻想郷にくる前に、たまたま多めに買った分がうちに尽きかけている。

だが、洋輔のその状況に一石を投ずる意外な人物。

「それなら香霖の所で似たようなものを見たぜ」

「香霖？」

「香霖堂っていう変なものばかり置いてる店の店主だぜ」

洋輔の目つきが変わる、若干ガラが悪い彼の目つきが完全にガラの悪い目つきに変わる。

「すまないが魔理沙、少しばかり詳しく教えてくれないか？いやマジで教えてくれたのむから！」

「いや、取り合えず目つきが怖いんだぜ。人里近くにある魔法の森の入口周辺にあるんだぜ。」

魔理沙は若干顔を引きつらせながら、洋輔から距離をとる。優はそんな光景にやれやれと肩を竦め。

「でも行くのは、人里にいったって要件をすました後だからね」
「解ってるよ・・・それくらい」

流石の優も洋輔に釘を刺した。

「んで・・・魔理沙なんでお前ついて着てんだ？」

「え・・・？なんでって特に理由はないんだぜ、しいて言うならお前らについて行くと面白いことが起こりそうな気がしたからからだぜ」

「残念だが対した事起きてねえし、起こしたくもねえよ」
「なんだなんかもう起きたのか、残念だぜ」

そうして人里に着くころ、魔理沙は「次は起きそうな時に呼ぶんだぜ」

と言い残し去っていった、洋輔は去っていく魔理沙の背中に
「絶対呼ばん！」と声を荒げて叫んだ。

そうして二人は人里に降り立った。

【人里】 妖怪が幅を利かせる幻想郷であるが、人が占める役割は大きい

そもそも妖怪は人が持つ恐れなどが起源で生まれるモノである。

人が居ないと妖怪は存続出来ない、だから向こうの世界で妖怪に對する

認識が薄くなつたせいで妖怪の存続が危ぶまれ。

この幻想郷忘れ去られたモノ達の樂園があるが、人が居ないと存続出来ないの

は何処でも一緒だからこそ、妖怪の世界でも人が住まう場所が必要になる

そのためにこの人里は存在する。

だが、世界から隔離された存在である幻想郷に置いて文化の差が離れてしまう

外からの文化の流入が無いからなのか、人里は向こうの世界よりも

一昔も二昔

よりも文化の開きがある、そのために洋輔と優にとっては過去へタイムスリップしたかのような感覚であるが、そこは向こうと変わらぬ

活気に充ち溢れ、人々が泣いて笑って元気に暮らす風景があった。

「なるほど……タイムスリップした感覚とはこんな感じなんだろ
うね」

「まあな、でも悪くはねえな」

そして二人の姿を見た村人の一人が驚愕に顔を染め、慌てて何所かに駆けて行く

その姿に一抹の不安を感じながら二人は人里へと足を勧めた。

107

「それで、確か人里の守護者だっけに会いに行くんだろ」

「それが最善と思うからね、彼女はこの里の代表のような存在らしい
いい」

そして里の中頃に入ったところいきなり里の人々が彼らを取り囲み始める。

「なんか、穏やかな雰囲気じゃないね……」
「おいおい……本拠地かと思ったらとんだ敵地アウエイってか」

そして、その里の人々をかき分けるように二人の女性が現れる。

知識と歴史の半獣 上白沢 慧音

そして彼女に並びもう一人

蓬菜の人の形 藤原 妹紅

彼女達は洋輔と優の前に立塞がりそして、慧音は口を開いた
「早急に立ち去れ妖怪共、でなければ痛い目をもてもらう！」

二人にとって最初の受難が始まる。

14話 そして人里へ（後書き）

ついに、人里編の中核

もこたんとけーね先生の登場です

でも出会いは最悪ですさあ彼らはどうなる？

15話 静かなる交渉

「早急に立ち去れ妖怪共、でなければ痛い目をみてもらう！」
白髪の女性の言葉が本物ならどうやら、優と洋輔は完全に妖怪と勘違いされているようである。

洋輔はやれやれと肩をすくめとりあえず誤解を解くために動く。

「すいませんが俺たちは妖怪じゃない、里にも危害を加えに来たわけでも

無い、だからこちらには戦闘の意志は無い」

洋輔は両手をあげ敵意が無いことをアピールするが

「何！？妖精相手に2対1で戦ったり、ルールを無視して追撃を仕掛けたり

する所を村人が目撃している、嘘を吐くな！」

どうやら霧の湖で起きたアレを目撃された拳句、恐ろしいほど勘違いをされている

なんとも笑えない結果を作り出してしまったものだと思つ。

「あれは突然攻撃されて仕方なくあんなったものだ、それに追撃はしてねえ、つか

俺たちはそもそも妖怪じゃねえよ」

「信用できるか、その悪漢面をよく言う。私は人里の守護者だが、引くなら何もせん

このまま立ち去ってくれ」

「誰が悪漢面だとコラ！好きこうなってるじゃねえんだよ！」

「洋輔」

優は洋輔の前に出て、まかせてと言わんばかり目配せをする。

「頭に血上らせちゃだめだよ、ここは僕にまかせてくれるかな？」

「……解ったよ」

「さてと……人里の守護者ということは、上白沢 慧音氏で間違いないかな？」

「そうだ……だが私の名を何処で知った？」

「幻想郷縁起を読ませて貰ったからね役職と外見的特徴が一致したからね、

僕は久我 優でこっちは凧沢 洋輔で、僕らを妖怪と言っただけど根

拠はあるのかい？」

「根拠……」

『根拠』と言われ、慧音は困惑した言われて見て気がついたが、彼らを妖怪と言わしめる

根拠は何処にもないのである、彼らを妖怪と思ったのは村人が彼らの戦鬪を

目撃し彼らを新種の妖怪だと騒ぎ立てたためであって

実際に彼らを妖怪と言わしめる確実な根拠はまるで無い。

「根拠は……無いみたいだね？」つつ

優は一瞬出来た慧音の困惑した表情を見逃さなかった、彼女は折れかかっている

あとは少し押せば……

「えっと……隣の貴方は……藤原 妹紅だ」なるほど、なら早いね

僕らから妖怪から出る、妖力とかは感じられるかな？」

「いや……ないね、妖力のよの字も感じられない」

そうして、優は慧音の疑惑の心を

「……疑ってすまない、我々の勘違いだったようだ」

完全に折ってしまった。

妹紅は目の前の少年に戦慄を覚えていた、少年はまるで詰将棋でもしてるかの如く、慧音の疑惑を折っていき、さらに自分まで使って慧音の心に王手までかけさせていた。ウソを付くこともできたが、その嘘まで看破されそうでした。

結局、慧音の肩すら持つことができなかった。

本当に警戒すべきは、あの悪漢面の青年ではなく、あの大人しそうな少年だとは長生きはしてるが人を見抜く事はまだまだ難しい……

「ね、まかせてって言ったでしょ？」

「解ったって言ったけどよ……お前……いやなんでもねえ」

洋輔も妹紅と同じく、目の前にいる腐れ縁の友人に改めて戦慄を覚えていた。

(こいつ……普段大人しそうにしてるけど、DSだよな)

「取りあえず、詳しい話を聞きたい家で話してもらえないか？」

取りあえず受難は去ったが、彼らの受難はまだまだ続くかそれとも？

15話 静かなる交渉（後書き）

ついに2人は人里入り

洋輔は顔に似合わず平和主義

優は顔に似合わず実は好戦的である

と行ったお話だと思っただ・・・

16話 人里での日常

洋輔は自宅（修理中）となった元あばら屋の中で目を覚ました。

時間は朝日も上りそろそろ人里が活気づく前である、洋輔は一つ背伸びし

まだ夢の世界真ただ中な優をまたいで、戸を開けた。

人里に来た時は散々な扱いを受けたものだが、あのあと町の代表者とも言える

慧音に事情を話し、迷惑をかけた礼としてこの元倉庫の代わりに自宅を
もらいうけた。

ただ、ボロい・狭い・里の端と悪条件ではあるが文句は言ってもらえない
だが住めば都である、現在も屋根を修理中という事を除けば文句なく住める。

ただ一つ。この住居を手に入れる時、慧音と優が何かを交渉した後、妙に青ざめた

慧音さんがこの家を紹介してくれたという事実である。

もしかすると優はその辺りの妖怪よりも達が悪かったのかもしれない。

なんてことを思い出しつつ

水がめの水で一つ顔を洗った後、洋輔は朝食の準備に取り掛かった。

日本人なら米、主食は米！何より米！日本人なら米を食べ！という名言がある通り

食うものはもちろん米だ、と言うより米しか無いのが本当なんだが、あとは貰った魚とか野菜と、我らの食糧庫はあまり潤ってはいないのだ。

そう思いながら、薪をくべて自分の掌に火を灯し火を付ける
最近生活には何とも便利な能力だとつくづく思いながら、洋輔は朝食作りを始めた。

「おい、いい加減起きろ優飯だぞ」だが当の本人から反応は帰ってこない

いつものことなのだが、しょうがないと洋輔は優に近づき。

「起きねーか！」と一発頭に拳を落とした。

「ねえ・・・洋輔、頭が妙に痛いんだけど何所かにぶつけたかな？」
二人で卓袱台を囲み、優は炊きたてのご飯を食べながら洋輔に問いかけた、

なお今日の朝食は白飯・鮎の塩焼き・野菜溜めといつもと対して変わらない。

洋輔は「さあな」と軽く聞き逃してやっぱ卵系もほしいなあと思ってご飯の御代りを椀に盛った。

そして朝食を食べ終えた後優は、寺子屋の授業があるとささっと出て行く

いった、優はその頭の良さを生かし慧音の寺子屋の手伝いをしているのである

だが、たまに暴走するらしく、あちらの知識を子供たち相手に教え得ていたらしく

たまに内容が私にも解らんと慧音から何度も愚痴を聞かされたものだが

「頭でも叩けば止める」と洋輔は当たり前のように教えたものだから拳骨では無く、頭突きにより優は何度か記憶が飛ぶこととなる。

一方洋輔は、里の人たちの力仕事や運搬・配達を手伝って日銭を稼いでいたの

だが・・・今日は珍しく何も無いという結果に終わり仕方なく、自宅のそばにある薪割り用の切り株に座り、ある作業に没頭していた。

「兄貴！」

「ん？ゲンタかどうした？」

洋輔を兄貴と呼ぶ少年、名を源田農家の息子であるが、たまたま酔っ払いの喧嘩を止めた洋輔の姿に憧れたと彼を慕って兄貴とまで呼んでしまっている。

だが洋輔もまんざでもないらしく兄貴と呼ぶのを特に止めてはいない。

「何やってんスか？」

「ああ、是か？竹トンボだよ」

そう言っつて、できたばかりの竹トンボをゲンタに見せる。モノ珍しそうに竹トンボを見つめるゲンタ。

「何するもん何スか？」

「ガキ共の玩具だよ、こうやってだなこうすると」

そうして、竹トンボは空高く舞い上がる

「おおー！すげー！流石兄貴だぜ！」

バタフライナイフをくるくると回してから、元に戻してまたしまいかんだ。

「兄貴、そのナイフ何処で手に入れたんスか？」

「ああ、香霖堂でなあうちの物の知識とかまあ吹っ掛けられたよ」

「そうっスか・・・」

「どうした？」

「いや、俺も同じもん欲しかったなあ・・・っつて」

洋輔は立ち上がり、ゲンタの頭を2回ぽんぽんと叩いて。

「やめとけ、いらねえぐらいふっかけられんぞ」

「それで、用事はなんだ？」

「あ、親父が言ってた水源の減少の話っすけど護衛は慧音先生がやってくれるって

ことらしいっすから」

「そうか、まあ順当に行けばそうなるよな」

17話 兆候

「以上だ、何か質問はあるかい？なければ今日の授業は終了だ。出された宿題を忘れないように、僕はいいけど・・・解るよね？」

軽い冗談を交えつつ、優は今日の授業をえた。慧音の代わりでは無いが

寺子屋は現在すべての授業と日程を彼女一人で回している、彼は慧音の負担の軽減という名目で彼は寺子屋を手伝っている。

「優せんせい」

「なんだい？」

「洋輔おじちゃんは今日来ないの？」

悲しいかな、洋輔は子供たちからおじちゃん扱いを受けている。

彼は悪漢面だが、子供には優しく面度見がいたため子供たちに懐かれてはいるが

年相応に見られないのと愚痴をこぼしていたのである。

「そうだね、今日は仕事が何もなければ来ると思うよ」

「ホント？来る？来るよね？」

「仕方無い、あとで様子見てくるよ」

「絶対！絶対だよ！」

そう言い残し、子供たちは一瞬で遊び場に飛んでいってしまった。無邪気なものだと思い、教材を片付け教室を後にした。

教材を片づけて、授業の終了を慧音に報告しようと居間を除くと慧音は何か考え事を

しているらしく、腕を組んでうんうん唸っていた。

「慧音さん、授業終わったんですが・・・」

「・・・ああ、すまない。茶でも出そう少し座っていてくれ」

そうして、台所に消えていく慧音、卓袱台にあるメモ書きを忘れて

「飲んでくれ」

「何かあったんですか？」

「・・・いや、とくに何も無いぞ」

凄く長い間をあけて否定する慧音、優は隠す気があるのかと思いいながら

メモに書かれていた題名を呟いた。

「水源の減少ですか？」

「つつ！！なぜ知っている、混乱を避けるためまだ村には広げていない」

親の敵を見るような眼で見られるほどヒートアップされる、やはり前に

若干やり過ぎたと思いながら、兎に角、慧音を静め優。

「いえ・・・目の前のメモに大きく書かれていますし、それにゲンタ君も話しましたし」

「ゲンタが・・・あの馬鹿者よりもよって・・・」

「慧音さん・・・そろそろ信用してほしいんだけどね、まあ初対面でしたことが

最悪だったことは認めますけど・・・」

やれやれと言いながら、ちやっかりメモに書かれてる別の箇所にも目を通す

別に話す気がなければ良い、信用されてないのも良い。必要になれば信用しなければさすれば良いし、言いだす気がなければ言わせればいい。

「それで、水源の減少どういったものなんですか？」

「何がしたい・・・」

「何って？」

「だからだ！知って何をする気だ！」

「何をつて、僕の知ってる知識で何か役に立てればって思っただけなんですけど？」

「だがだ・・・」誰にも口外する気はありませんし、ただの独り言ですから「・・・」

慧音は目の前の少年とも見える青年を見た、数百年ほど開きがあるう歳の離れた者

だが、この男は妙な気配を漂わせていた。昔一度だけ話した男とよく似ている

何処ともなく胡散臭く此方を煙に巻く雰囲気、ただ将棋を打つかの如く淡々と話す

あの姿、気がつけばこちらの情報は聞くだけ聞かれ、あっちの情報は掴めず

結局あの男が何者なのか今でも解らない、だから慧音は優が苦手だった。

「わかった・・・私も少し独り言を言うかもしれない」
「ん？解った」

あの男とよく似た雰囲気を持つこの男がどうしても苦手でしかたなかった。

気がつけば、廃屋とはいえ家を提供するわ、臨時教師として雇うわ・・・
なんとも守護者として威厳が不安になってくるのを感じ、ただ静かに内容を語り始めた。

「なるほど・・・確かに乾季でもないのにその減少量は異常だ」

「そうだからといって河童達の仕業とも思えん」

「河童は人間を盟友扱いしてますからね、その可能性は薄いでしょ
うね」

「かといって、放っておくわけにもいかん、農家の代表数人と調査にしたのだが」

「それで・・・彼らがどうかなったらどうしようと思っただけだ」と

「そうではないんだが・・・とりあえずその日は一日、寺子屋を任すことになるんだが」

「それは抜きでなく、一応一通り教えることは出来ますよ」

「それで・・・どう思う?」

「上流が枯れて入れば、下流が枯れるのが普通ですけど・・・話を聞けば妖怪の仕業の可能性が高そうですね」

「だが、私はそんな妖怪は知らんぞ?」

「ええ、知らない可能性は高いですね・・・」

「なぜだ」

「その妖怪は外から来た新しい奴の可能性があるのでですよ」

17話 兆候（後書き）

最近筆がすすまねえ・・・

というわけではちばち人里動乱編の開始です

ぼちぼち戦闘シーン入れる予定だけど・・・憂鬱だorz

18話 動乱

「ふうん ふふうん」

チルノは鼻歌交じりに、霧の湖の上を飛行していた。

ここは彼女のいつもの散歩コース、今日も晴れて気持ちがいい後でカエルでも凍らせて遊ぼうか、そんなことを考えながら速度を上げた。

慧音は霧の湖の畔で一つ溜息を吐いた、水源の異常ともいえる減少その調査のため動いてはみたものの、まるで成果があげられないためである、まず発端である人里近くの溜め池、
そのこの水の異常な減少だが実に不思議な事に水は平常に戻りつつある。

異常が消えてはいるが、二度三度起こっては困る調査はしたものの、

結局原因は不明

仕方なく池の水を引いている霧の湖まで出向いたわけだが、ここに来ても進展なし

幸いなことか不幸なことか、元凶と思える妖怪の気配すら無いともきている

里の人間に危害が出ないのは良いことなのだが、ここまで何もないと逆に不気味だ。

「何もないっすね、慧音先生」

「何もないからいいんだ、ゲンタ、所でゲンタ広めるなど言ったのに。」

他人に話したな？」

ゲンタは露骨に目をそらし「いえ・・・そんなことしてねえっすよ」と苦しく嘘をついた

「ゲンタ・・・お前が寺子屋に来ていたころから知っているんだぞ、お前が

ウソを付くとき目を合わせようとしな**い**のは十分承知だ」

それでも露骨に慧音から目をそらし「いえいえ嘘ついてねっすよ」と苦し紛れのウソをつく

「おい、ゲンタ！観念したらどうだ？いくら洋ちゃんに気に入られようとそんなネタで

取り入るうとしたことをよ」

「兄貴はそんな男じゃねえッスよ！誰にも言わないって約束しましたし……って

親父！！謀ったなあ！！」

そしてゲンタの両肩を凄い力で押さえつける慧音

「ゲンタ……そういえばお前はあの時から何度かしたことがあったな……」

顔面蒼白になりながら、必死に首を横に振り何とか慧音の呪縛からゲンタは逃れようと

するが、結局1cmも動かすことができずにいる。

慧音はにっこりと微笑みながら

「さあゲンタ、歯をくいしばれ、あと口は閉じる舌を噛むからな」

そして、勢いをつけ頭突きが……振り下ろされなかった。

上空からちよつと待ったと言わんばかりチルノが此方に突撃してきたためである

「……ちよ先生……頭突きよりひでえッスよ！」

とつさにゲンタを投げ飛ばしてしまい、地面に突き刺さるように倒れるゲンタに

文句を言われるがそんなゲンタの声を遮る妖精が一匹いや二匹いた

二匹目はおそろおそろ上空からゆっくり現れた大妖精だが

そんな大妖精の前に陣取り胸を張ったチルノが怒号を発した。

「またか！あたい達の縄張りに入るな！」

「や・・・やめようよ、チルノちゃん」

強気な一匹と弱気な一匹そんないつもの光景に慧音はやれやれと一つ溜息を漏らした

「別に縄張りを荒すつもりはない、その前にひとつ聞きたいことがあるのだが」

「誰が人間なんかに教えるものかー！そんない教えてほしければ、あたいに

弾幕ごっこでかつたら教えてあげるわよ！でもサイキョーの私に勝てればの話だけど！」

そんな超強気なチルノの態度に普段温厚な慧音なのだが、そうかそうかとスperlカードをとりだし

臨戦態勢を取った、なぜなら彼女は最近ストレスをため込み過ぎ

「・・・ならば一つお灸を据えよう」

ついに爆発してしまったのだから。

「後で後悔してもしらないんだからね！」

そうして湖の上で向かいあう二人

そしてその二人をまるで狙っていたかの如くスライムののような物体が彼女たちを飲み込んだ。

「……慧音先生！」 「……チルノちゃん！」

そしてそのスライムもどきはみるみる形を変え

今度は氷でできた大きな猿のような姿に己を変えたのである、その半透明の体の中に

慧音とチルノを閉じ込めながら。

目も口も耳もあるのか解らない何とも奇妙な猿のような化物を目の前に、里の人々と

大妖精は凍りついた、そんな光景を目にしたのか氷の大猿は腕を振り上げ

里の人間相手に力任せに振りを下ろした。

まるで警告と言わんばかりに、誰にも当たらず地面を抉った一撃は人々に恐怖を植え付けるには十分な一撃である。

里の人々はじりじりと一歩づつ後退させられ、それに合わせじりじりと前進する大猿
そしてゲンタの父親が叫びを上げた。

「ゲンタア！！！」

「・・・・・・・・」

恐怖で完全に凍りついているゲンタであるが、そんなゲンタに関係なく声を上げて彼を呼ぶ

「オイ！この馬鹿息子！！この程度でびびてんのかあ？なんんじや洋ちゃんにいつまでたってもならべねえぞ気合入れねえか！」

「誰が兄貴に並べねえって・・・！」

「はあん、返事は出来るか！オイ馬鹿息子、俺が気を引くその間に逃げろ！」

「ふざけんな！バカ親父ボケるには早いだろうが！」

「誰がボケてるだあ！？お前が一番足早いだろが里に行って妹紅さん呼んで来いって意味だよ！」

「でも親父が！」

「馬鹿息子が！テメエ以上に足早い人間いねえだろうが後・・・妖

精の嬢ちゃん」

「私ですか？」

「すまねえが……あの馬鹿息子について行ってやってくんねえか……たのむ……」

「……解りました」ゲンタの父親の懇願に大妖精は首を縦に振った

「親父……」 「行け！」

「でも……」 「行け!!」

「……あの行きましよう」 「そうだ妖精の嬢ちゃんの言うとり行け！」

「……絶対助け呼んでくるからよ死ぬんじゃねえぞ!!!」

そしてゲンタは力の限り出せる速度で人里に駆けていき大妖精もそれにつづいた

「皆すまねえな……」ゲンタの父親は残った数人の里の人間に話しかけた

「気にすんなよ」「なあにどっちにしろ逃げる気なんて誰にもないんだからよ」と

数人から言葉が帰ってくる。

皆考えてる事は同じだった、確かに逃げるのは簡単ではあるが此処で逃げれば

まず慧音が危ないこと、そしてこの氷の大猿が人里を襲いかねない事を。

ただ人を襲うだけであれば、自分とゲンタのやり取りの間襲ってくるのだが

この猿は動こうとしなかったどう思ってるかは知らないが、こつちには願ったり

叶ったりであったことは間違いない。

確かに自分らは弱い、敵わないであろう、しかし、弱いものは弱い者なりにの意地がある

それは皆同じだそしてみんなそれぞれの武器になりそうなものを持つと

「行くぞおおおおお!!!」

雄叫びをあげ大猿に立ち向かった、少しでも慧音先生や里の皆を救えることを信じて。

18話 動乱(後書き)

人里動乱開始

ああ・・・なんか知らない間にオリキャラ乱発してらあ・・・

ぶじじぶじ・・・

19話 許せぬモノそして火は燃えるモノ

ゲンタは走った、ただひたすらに走った昔から走るのは得意だが、これだけ速く

走ったのは初めてだ、心臓は早鐘を超えて今にも爆発してしまいそうだが。

今のゲンタは止まらなかった、どれだけかっこ悪くてもいい一分一秒でも早く里へ

唾を吐き散らしても、胃の中身戻してもいいただひたすら早く里へ足を動かしていた。

里が見え里の入口あたりでついに足がもつれゲンタは飛び込むように倒れた。

大丈夫ですかと寄り添う大妖精を手で制止し、息も絶え絶えに無理やり

起き上がるうとしてもう一度倒れる、息が続かない息をすることが苦しく感じる

自分に鞭をうち舌に感じる砂の味をかみしめながらゲンタは再び立ち上がったが

そんなゲンタの目の前に

「何やってんだゲンタ？・・・それに大妖精だっけか？」

何所かへの荷物を抱えた洋輔が立っていた

「兄貴！！」

彼は己が慕う人物の名を力の限り叫んだ。

「話は解った、よくここまで来たなゲンタ後は任せろ」
状況を話し終えたゲンタを大妖精と里の人たちに任せ
妹紅さんと優に連絡を頼みますと言い残し、放たれた矢の如くその
場から洋輔は飛び立った。

そして霧の湖についた洋輔の目についたモノ、ボロボロにされた里
の人たちと

勝ち誇ったようにいる氷の大猿

その光景が洋輔の中にあるあるものに火を付けた

洋輔はこの世で2つ嫌いなものがある

一つは茄子、洋輔曰くアレはこの世の食い物ではないとのこと

そしてもう一つは 己の心を許した人を傷けられるということ

常洋輔の能力ではせいぜい拳にしか火を付けることは出来ない。

だが今はその感情に比例するかの如く、火は拳から広がり四肢を燃やし豪炎の如く燃え上がっていた。

「これをしたのはデメエか・・・？」

火とは闇を照らし、万物を創造する役目なり。だからこそ人は火を信奉してきた、しかし

氷の大猿は何一つ答えようとしな

火とは一度付けば、全てを燃やしつくすまで止まる事を知らない

「まあ・・・ゲンタの言うとおりの姿だしよ、慧音先生もチルノちやんもいるしよ・・・」

間違いねえよなあ！この氷の猿モドキ、ああ猿語も喋れねえか！？」

故に火とは万象を燃やしつくし灰に歸し、無に歸すものなり

「言うことなしか？じゃあ落とし前はキッチリつけさせて貰うぜ・・・
行くぞ！」

掛声と共に、より一層燃え上がる炎を纏い洋輔は氷の大猿に突撃した。

振り下ろされる剛腕をすり抜け、その凶体からは信じられないほど素早い動きで距離を取り腕を振るう動作と共に数十発の極大の氷の弾幕が洋輔を襲う。

洋輔は避けようと受けようとせず全弾氷の弾幕をその炎でかき消した。

「オイ……舐めんなよ、これでこの程度で俺を止められるとか思ってたんじゃないかねえええ!!」

さらに激しく降り注ぐ氷弾を気にせず突撃し

「まずは！2人を返して貰おうか！」

その氷の体に慧音とチルノを救い出すために、炎の拳を叩きこんだ！

20話 そして集う者達

「うおおおおおお!!!!」

その氷の巨体にめり込んだ拳、その炎は氷の身体を溶かす事無く蒸発させる

まるで呻く様に、後ずさりする氷の大猿。凄まじい量の水蒸気が湖を文字通り

霧の湖に変えた。

「もうちょい!」

炎を纏った腕は、大猿の身体に徐々に吸い込まれていくが、いったいどれほどの氷を凝縮しているだろうか、洋輔の炎でその身体を蒸発されながらなお

まだ3分の1ほどしか腕は届いていなかった。

「もう少し!」

3分の2の所に差し掛かった所で、氷の大猿は渾身の力で抵抗に出た洋輔を掴み

片方の指すべてを犠牲にしてまで、洋輔を投げ飛ばして引き離したのである。

洋輔は空中で炎をバーニアのように噴出して投げ飛ばされた勢いを殺すと、地面に降り立ち再び大猿と対峙した。

「つち」と舌打ちし再び腕を振り上げ飛びかかろうとした時、体に異常な倦怠感を覚え思わずふらついた。理由はとても簡単な事だ

ガス欠である洋輔はお世辞を言っても力の許容量は多くは無い、それを普段以上の力で使い続けていたわけだ限界は当然早くきてしまった。洋輔は自分の早計さに舌打ちし、このままでは本当に動けなると感じ自ら纏う炎を消してしまった。

そして、そんな洋輔の姿に野生の感で勝機を見出したのか、氷の大猿は天高く咆哮するように両腕を振り上げると洋輔が蒸発させた箇所を一瞬で再生させてしまったのである。

「おいおい・・・マジかよ!」

そして、両腕を振り下ろし凄まじい量の氷の弾幕を撃ち放った。

炎符「エクストリームフレア」

不死「火の鳥 - 鳳翼天翔 -」

だが、その氷の弾幕は2つ炎の弾幕によって相殺された

「待たせたね」「待たせたな」

世界を解する魔法使い 久我 優

蓬莱の人の形 藤原 妹紅

参戦

「遅いぞ優」

「一番早く飛んでいったのは誰だい？」

「お前ら！痴話喧嘩は後でやれ・・・今は慧音を助けるのが先だろ
！」

背中から鳥のように炎の翼を出した妹紅、そして慧音の親友でもある彼女はそんな

慧音が氷の大猿に囚われるのが一番我慢できていないのだろう。

「インペリシャブルシューティング」

明らかに敵意むき出しの彼女のスペルが大猿を直撃した

だがそんな妹紅の攻撃した箇所は、洋輔が蒸発させた時と同じようにたちまち再生してしまっただ。

「何！」

「なるほど」

「おい！優何か解ったのか？策があつたら言え！言ってくれ！」
妹紅は考えこむように大猿を見ていた、優を問い詰める。

「奴は・・・空気中から水分を吸収して氷にしているんだよ・・・だから」

「・・・だから！？」

「火とはかなり相性が悪い、溶かしても再生されるのがオチだよ」

「優！火以外使えるんだろ何とかならないのかい！？」

「・・・木では氷にはキツイ、日と光の単体では威力不足だろうし・・・」

組み合わせや雷もあるけどそれだと慧音先生にもダメージがいつてしまっし・・・」

「つまり・・・八方塞がりってことかい？」

「そうともいう・・・かな・・・」

何とも齒切れの悪い返事で妹紅を一瞥した後、氷の大猿を見る。
あの、捕らわれる慧音先生とチルノあの二人を救えれば何とかなる
のかもしれない
だからこそあの二人を捕まえているのかもしれない、猿の外見に似
合わずなんとも
したたかな奴である。

「おい」

「でも・・・なんでチルノと慧音先生なんだ・・・」

「・・・おい」

「くそ・・・私なら何とでもなるのに・・・何で慧音なんだ・・・」

「人の話を聞けやコラ!!!」

「何だよ洋輔」 「なんだ洋輔」

「さつきから、人を無視すんなお前ら・・・取りあえず優、足止め
して来てくれ」

「え?」 「いいから行ってくれ」

優はしぶしぶ大猿の注意を引くため、飛び立った

「作戦つか・・・助ける方法は無い事は無い」

「本当か!?どうすればいい!?」

洋輔の肩を掴み、唇が当たりそうな距離まで顔を近づける妹紅

「・・・顔近い、話せないから」

「あ・・・悪い」

「至極簡単だ・・・あいつの体に零距离まで接近して炎で抉じ開け引っ張り出す」

「・・・待てあいつは再生しちまうんだろ？」

「さっき3分の2ぐらいまで行った・・・次こそはと思うんだが力が足りねえんだ
だから妹紅さんよ・・・その力（炎）を俺に貸してくれ！」

20話 そして集う者達（後書き）

戦闘シーンとか難しいすぎるお

此処で俺はダウンだ・・・続きは次ダス

21話 動乱終結そして意外な存在

「力（炎）貸せといつても・・・出来るのか？」

「出来る」

「・・・しくじる事は私が許さないからな」

「無論ただ助けた後の奴の事は頼みますよ」

「そうかなら・・・好きなだけ持って行け！」

妹紅は妖力によつて燃え上がるその手を洋輔の肩に置き、ありつたけの力を洋輔に注ぎ込んだ。

洋輔は、まるで全身に高純度のアルコールを注がれる様な感覚に覚えた、純粹で熱い妖力の炎は煙草や酒のように妙に病みつきになりそうな癖のある炎だった。

拳を固め弓を引くように構える、今度炎を点けるのは腕のみ他はいらない

今度も出し惜しみなし、自分と妹紅の炎が強いか氷が強いかただそれだけ。

洋輔は一直線に氷の大猿の懐に飛び込んだ。

「全部もってけ！ただ二人は返し貰うぜ！」

洋輔の咆哮と共にその腕は大猿に吸い込まれる。

腕が着弾する瞬間、纏う炎は前と比べならない勢いで燃えあがった。

凄まじい勢いで大猿の体を水蒸気に変え、慧音達にその腕は伸びる。ただ氷の大猿も見守るなんてことはしない、前と同じく洋輔を引きはがそうと

巨腕を伸ばすそうとするが。

そんな両腕を優と妹紅の弾幕が弾き飛ばした。

「もう少し！」

そして洋輔の腕は二人へ届く寸前、氷の大猿は最後の抵抗に出た。その巨体を振りまわし意地でも二人を救われたくないらしく必至の抵抗を試みている。

「動き！回ってんじゃ！ねえ！！！！！」

だが、そんな最後抵抗受けつつも洋輔はついにその巨体を溶かしきり、二人を引きずりだした。

「よっしやああああああ！！！」

勝利の雄叫びと共に大猿に中指を立てつつ二人を抱え洋輔は後方に飛んだ。

二人を取り戻そうとしたのか、氷の大猿は手を伸ばすが空しく虚を切った。

それでも諦めず、胸に風穴を開けつつ二人を取り返そうと大猿は動こうとするが
そんな大猿の前に妹紅と優が立ちはだかった。

「させると思うかい？」 「させると思ったか？」

蓬萊「凱風快晴 ・フジヤマヴォルケイノ」

妹紅のスペルカードが氷の大猿を吹き飛ばし。

日輪「 - 紅炎 - プロミネンス・ストライク」

トドメと言わんばかり大質量の熱を持った、レーザー型の弾幕が直撃した。

「……………輔……………洋輔」
「あ……………？優？」

そして、洋輔は空を空を見上げて起きた。

「あれ？なんで俺寝てんだ？」

「それはだね・・・君が後方に一人を抱えて飛んだのは良いけど、そのまま

木に激突したからだよ」

「・・・ざまあねえな・・・オイ・・・」

優から差し込まれた手に掴って立ちあがり、ふと慧音とチルノの事を思い出し回りを忙しく見渡した。

そして、そばに二人とも並べて綺麗に寝息を立て寝かされているのを見て肩を落とした。

「でも、きつちり二人大丈夫だったよ、慧音先生は呼吸とかも問題なし数分したら目も覚ますよ」

「そっか・・・んであの猿野郎は？」

「それなんだけどね・・・」

優はある方向を指さす

其処にはまるでスラムのような物体が鎮座していた。

洋輔はポケットをあさり煙草を取り出し、指先から出した炎で火を

点けた。

「何アレ？」

「だから……あの大猿だよ」

「……マジかよ？」

「本当さ……私もまだ信じられないけどね……煙草かい？洋輔私にもくれないか？」

妹紅は洋輔から差し込まれた煙草を受け取り、洋輔と同じ様に指から火を出し煙草を付けた。

「まあそれは良いけど……なんであそこに放置してるわけ？」

「それはな……」

「私が頼んだのだ、人間よ」

「……喋れんのかよ、このスイムモドキ」

「それも驚きなんだが……何より」

「水神様だったんだよ……なんとも驚いたよ」

やれやれと溜息一つ洩らした優を見て驚いた洋輔は、マジかよと咳き思わず煙草を落としかけた。

21話 動乱終結そして意外な存在（後書き）

動乱編 ついに終了

次は人里編エピローグと次回予告です

さて次は何処に行くのかなあ……
どね

決めてないんですけ

22話 一つ終わればまた次があるもの

「よお、水神サマ調子はどうだ？」

洋輔が話かけるのは、人里の農地に急造で作られた本当に小さな社の上に浮かぶ

今はス イムもどきから、水の玉になった物体。

その正体は洋輔が言う通りの水神。 水神または龍神とも呼ばれる

水を司る神様であり

かなりの高位に位置する神様でもある、今までかなり衰退の一途を辿っていたらしく

先の荒事でその力をかなり失ったらしく、今ではスラムもどきか水の玉の姿しかとれないらしい。

それで、そんなス イムもどきこと水神様がなんでこうなった経緯を説明せねばなるまい。

話はあの動乱が終わった後に遡る、氷の大猿と化し、里の人たちを襲い慧音とチルノを

人質までにまで取った相手を妹紅と優が何もせず手を拱いていた理由。

それは、あの暴れていた大猿の時とは180度違う態度と「消滅させてほしいという」

水神の願い事のせいであった。

だがこれの願いも困った願いであった、弱っていても水神高位の神様である。

大猿であった時に優が放ったスペル、優曰く現在自分の最高威力であり低級妖怪なら

軽く消し飛ばす威力があるらしいがアレを持ってしても、消滅しないなら無理と結論

そして妹紅も無理と言われ、宙に浮く状態になった。

そして結局の所、起きた洋輔と意識を取り戻した慧音とチルノそして里の人々を交え

水神の対処について論争状態となる。

消滅させるや博麗の巫女に任せたらどうだやら、あたいが氷漬けにするやら、提案が飛ぶ中

おそろおそろ大妖精が「どうして、こんなことしたんですか？」という問いかけに

頭脳派組の慧音や優までが「忘れてた！」といった顔をしたのは忘れられない。

だが水神が話した理由は何とも不鮮明なものだった、この水神とある山村で祭られてた

水神であつたらしいが、数百年前疫病や戦などで村は完全に崩壊し

同時に水神の社も崩壊

水神はこれも運命であると思いいのまま消滅するまで、山村の山々で静かに暮らしていた

というが、ある日、己を「キング」と名乗る西洋妖怪が現れて何かされたまでは覚えているらしい。

そして、これに里の人々はさらに困ってしまった水神の話が本当なら、その西洋妖怪に

能力で操られたか何かで人々を襲った事になる、そうなると加害者でもあるが被害者でも

あるからだ、そして、揉めに揉めた水かけ論に水かけ論そんな彼らに洋輔が業を煮やし

「とりあえず、暫く保留ってことでどうだ？もしなんかあった時は・・・
俺が何日かけてでもキツチリ消滅させる」

と勢いで言ってしまったもんだから、あとは大変なぜかトントン拍子で話が纏まり

なぜか洋輔がこの水神の面倒を見るといふ結果になってしまった・・・

結局だれもが許したいのだが足を踏み出せなかっただけ名なのかもしれないが・・・

なんだかんだ里の人々はお人好しなのかもしれない。

それで、罪滅ぼしとはいかないが水源と井戸の水源の管理を提案させ
洋輔が里の人に頼んで作った、急造の社に納まっている。

長くなったがこんな経緯があっただこうなっている。

「それで水神様、例の「キング」だっけかなんか思い出したか？」

洋輔は社に靠れかかりながら煙草を口に啜え、さらに神様にタメ口
と完全罰あたり
にもほどがある行為を働いているのだが、その悪漢面のせいかなん
の違和感もない。

「すまぬが、まったくだ思い出したらいの一番言っ」

「まあ焦ってる訳じゃないゆっくり思い出してくれ、そうすりゃ誤
解も解ける」

そうして、指先に炎を点け煙草に火を点け紫煙を吐きだした。

「なんか、久々に落ち着いて煙草吸えた感じがするぜ」

「そういえば、又シの能力なのだが」

「ん？炎点けるだけの能力なんだけどそれがどうかしたか」

「それなのだが「兄貴ーーーーー！」」

水神の話遮るように、ゲンタが走ってくる彼は洋輔を探すようにいつでも何処でも狙ったかの様に現れる世になってしまった。

「なんだゲンタ？相変わらず何処でも現れる様になったなあお前」

「そうツスか？それで水神様と何話してたんツスか？」

「まあ大した話じゃねーさ」

「そうなんツスか？それにしてもここ最近で神様とか神社とかが急激に増えたツスよ」

「ん？博麗神社だけじゃ無いのか幻想郷の神社って」

「此処以外にも命蓮寺つつう妖怪と人間の共存を謳う寺と守矢神社っていう神社があるツスよ」

「守矢神社・・・？」

その名を聞いたとき洋輔は持っていた煙草をポロツと落としてしまい、考えこむように額に手を当てた。

「なあ・・・もしかしてその神社に東風谷早苗っているか？」

「ええ、その神社の巫女さんツスけど・・・って兄貴！煙草落としてるツスよ」

「悪い・・・急用ができた」

そう言い残すと矢の如くすつとんで云った。

「兄貴！火の始末忘れてるツス！・・・行っちゃまった・・・水神様火の始末できるツスか？」

「できるが・・・何があつたやら、話まだ終わって無かつたのだが」

一つの終わりは一つの始まりにしか過ぎない、彼ら2人は自ら幻想と関わることになる

守矢神社・東風谷早苗この二つが指し示すは妖怪の山

次回：妖怪の山編

22話 一つ終わればまた次があるもの（後書き）

なんだかんだで、人里編はひとまず是にて終了です

次回からは妖怪の山編スタートとなります

なんだかんだで洋輔君主体多いし・・・

そろそろ優君主体のも書きたいけど浮かばない・・・

23話 3人目の幼馴染

慧音は寺子屋の授業が終わり、溜息一つ付き居間へと戻っていた。

最近、人里の守護者としての役割を果たせていない、この前起こった人里の襲撃は
現在居間で古めの本に何かを書き綴っている、少年のような青年と
かれの友人である
悪漢面つばい青年と友人の妹紅が見事解決してしまった。

悪いことなのか、良いことなのか最初彼らを妖怪と勘違いし追い出そうとして
彼らに相当不信感を与えていただろう、だが現実はどうだ、彼らはその身を持って
自分を救い、里の人たちを救いさらに原因を作った水神様まで救ってしまった
それが出来なかった自分に嫌気がさす。

「・・・優、まだいたのか？」

「ん？慧音先生授業終わってたんですか？」

「ああ、先ほど終了した。何をしてるんだお前は？」

「ん？邪魔ですか？すぐ片付けますかよ」

「いや、かまわん・・・所で何をしてるんだ？」

慧音が一瞬覗き見た本の内容は、教職に身を置く彼女にすらちんぷんかんぷんだった。

「ああ、現在探究してる魔法を纏めてるんですよ。僕は理解すればするほど、力が付きますからね

研究と探究は大事な行為なんですよ、もうすぐ終わりますから」

「お前は十分強いだろ、別にそんなに力を付ける必要があるのか？」
そんな、慧音の言葉に優は今まで滑らかに進んでいた筆をぴたりと止めて

そして少しだけ俯いた。

「駄目なんだ・・・このままじゃ。やっと並べたんだ」

「並べた・・・？」

「ずっと追い続けるだけだったんだ、でも幻想郷に来てやっと追いつけたんだ

でも追いついたと思ったら、洋輔はもう先に行こうとしてる、だから、力が力が

いるんだ洋輔と並び続けられる力が！」

優の片手は固く握られていた、慧音と優はさほど長い付き合いでは無いが

彼があまり感情的に動く人間では無いことは理解している。彼とその友人との間に

何があったのか定かでは無いが、しかし、慧音は思う。

目の前の青年は、自分を凌駕する知識と力を持っているが、まだ2

0年ほどしか生きていない
人間なんだと、彼は間違えもするし焦りもするそして悩みもする、
人間の男の子なんだと。

今まで彼を苦手扱いしていた自分はなんだったんだろうと思う、彼
なら別に問題ないとか
彼ならと思っていた感情が一気に消える、そう彼は今間違えかけて
いるのだ

ただ力だけを求めるのがどれだけ危険なのか、周りにもそして自分
にも。

だからこそ必要なのだ、自分らのような大人が、彼らは立派に成人
して大人ではある
でも、まだまだ彼らは若い間違えることなど当たり前なのだ。

だから伝えよう、自分なり方法で言葉ではきつと彼には届かないだ
ろう

でも方法はいくらでもある。 今度は自分が彼を救う番なのだ

慧音は優の肩をしっかり掴み、思いきり頭を振り下ろした。

部屋にとてもいい音が響き渡り、痛さの余りのたうちまわる優と腕
を組んで

堂々とする慧音

優は額を抑えながら、よろよると立ちあがった。

「何……するんですか」

「馬鹿者！力だけ求めてどうする、そんなものあいつも望んではいない筈だ！」

「解ってる、解ってるよそんなこと。でも僕はそれでも洋輔と肩を並べていたいんだ！」

「深くは聞かない……だが予想以上にあいつはお前の事を信頼してると思うぞ」

けたたましい足音と共に洋輔が居間へ飛び込んでくる。

「……洋輔どうしたんだい」

「探したぞ、所で優……守矢神社・東風谷早苗これに聞き覚えは？」

「……どこかで聞いたような」

「なら……最後に俺達の三人目の幼馴染って誰だ？」

「……どうして忘れてた……いや気がつかなかったんだ？」

「それは俺も思ってるんだが、それよりも……守矢神社の場所何所か知らないか？」

「やっぱり何も調べず動いたんだね……守矢神社は妖怪の山だよ・

・洋輔

「マジかよ……優！」

「力貸してくれって言っただけでしょ、わかったよ洋輔」

「立派に肩並べ合ってるじゃないか・・・その前に洋輔、土足で家に入るなちゃんと行くなら掃除してから行け！」

23話 3人目の幼馴染（後書き）

妖怪の山編・始動

早苗さんは洋輔と優と幼馴染って設定デース

そして次は人里の番外編を一つ挟む予定です。

見苦しい文章ですが、向上のため
御意見・ご感想を頂けたら幸いです。

人里編番外 魔法使い達の昼

幻想郷の昼下がり、青い空に白い雲何とも気持ちいい日和だが博麗神社には宴会でもないのに、大所帯が集まっていた。

「……でこれが、この前の騒動の顛末だね」

「……そう、本当に博麗の巫女を蚊帳の外に置くなんていい度胸ね貴方達。」

腕を組み、その顔と全身から不機嫌オーラを漂わせる霊夢を飄々と受け流す優と

覇気が消滅して、半分屍状態の洋輔が境内の階段に座り込んでいた。

「それで……その屍はもとより、あんた達は何の用!？」

そして、そんな霊夢をさらに不機嫌にさせている人物たち。

「別に、暇つぶしに来ただけだぜ」

普通の魔法使い 霧雨 魔理沙

「私は、私用できただけよ」

七色の人形使い アリス・マーガトロイド

「私も私用よ、ちょっと優に呼ばれてた言っておくわ」

動かない大図書館 パチユリー・ノーレッジ

見事なほど、幻想郷の魔法使い大集合状態である、だが霊夢にとつて待ち合わせ場所にされたとはたまった者では無い、妖怪神社と呼ばれてたださえ人が来ないのにこれ以上人が来なくなる原因を作られてはたまったものでは無い。

「帰れ！」

「まあ霊夢ケチケチすんなよ」

「別に減るものじゃないでしょ？」

「そうね、どうせ人なんて来ないじゃない」

そんな、三者三様の言葉にさらに、不機嫌さを増す霊夢。そして集合場所の原因を作った

男は「まあまあ、今回はたまたまなんだし、そうなると来にくくなるなあ」と賽銭箱を

見つめながらそう発言する、つまりもう賽銭いれないと遠まわしの警告である。

事実、この神社で賽銭を入れる存在など目の前にいる、飄々と腹立つ事を言う男と

現在境内の階段で屍化している男しか居ないという、泣ける現実がある。

腹が立つし、今この場で夢想封印でもぶち込んでやろうと思うが。

「・・・勝手にしなさい」

神社として最低限の状態を維持するには、背に腹は代えられなかった。

そして、その明らかに「悪いね」と、どう考えても口だけの謝罪を述べた。

怒りを通りこして、呆れてしまい現在屍と化している洋輔の見た。優の話では、騒動が終わってから異常なほど調子が悪いらしく、当事者だからという理由で無理やり来たらしいが、現在こうしてダウンしてしまっている。

「・・・あんた結局なにしに来たの？」

「・・・ああ？いや当事者だしよ、まかせるのも何だとおもったけど・・・」

すまん無理だった・・・」

「・・・お茶でも飲む？」

「わりい」

そんな姿に不憫差を感じ、霊夢はお茶入れに境内の奥へと消えていった。

「優、結局パチュリーとアリスなんで呼んだんだ？その前にお前アリスと知り合いだったんだな、初めて聞いたぜ」

「ああ、前魔法の森訪れた時にアリスとは知りあってね、その時人形の真の自立行動化に

おいて、AIの理論は考え方が似てるかなって思ってね、けどそれを魔道を用いて、行うには

知識と情報が全然足りない、そこでパチュリーに相談しようと思っ
て呼んだんだけど」

「私は、相談があるとしたか子悪魔から聞いて無かったのだけど？」

「私は、良い考えがあるとしたか聞いて無いわよ？」

そんな反目しあう二人を差し置いて優はすんなりと恐ろしい事を言う。
う。

「だって、普通にいったら来そうに無かったからね、かなり興味深いテーマだったし

せつかくだからって思ったんだけど？」

「……確かにそうだけど」

「……そうね」

恐ろしきかな、すでに魔女二人を手玉に取りかけているなんとも恐ろしい男である。

「それで……何が聞きたいのかしら？人形遣いさん」

笑うでもなく、蔑むでもなく無表情でアリスと向き合うパチュリー

「あら……魔道の知識を貴方からご教授できる日が来るとはね、
動かない大図書館」

それを絶対零度の笑顔で迎えるアリス

静かに殺気と怒気を振りまく二人、そこは青い空に白い雲何とも気持ちはいい日和をぶち壊す

別世界、そんな世界を作り出した張本人は。

「やっぱり、自我の確立からかなあ、でもそれでは魂の・・・」
完全に気にして無かった

「なあ、洋輔・・・優の奴って大物なんだな」

そんな別世界からすでに逃げだし、洋輔の隣に座って観戦を決め込む魔理沙

「いや・・・大物じゃなくて、鈍くてただのアホだ」

「ねえ優、急に呼ばれから、整理がついて無いの2人でやらない？」

「優さん、この前のAI以外にもあるって言うてたわよね？少しばかり」

二人きりで説明していただけない？」

お茶を持って来た霊夢は境内で繰り広げられる、争いを目にして
「何やってんの？」と洋輔と魔理沙に問い正した。

「ジゴロの観察だ」「女たらしの観察だぜ」
そう二人は口をそろえて言った。

そんなある日のどうでもいいお話。

「もみもみさせなさい！早く！ハリーアツプ！」

「え……またこのオチですか！アツーーーーー！！！」

「うへへへ！よいではないか、よいではないか！」

ー以下御想像にお任せしますー

人里編番外 魔法使い達の昼（後書き）

やっちまったー！ マジごめんなさい本編も茶番も
勢いでやりました

反省はする、でも後悔はきつとしない。

そんなこんなで番外編として成立するんだろうかと心配になりつつ

感想とご意見お待ちしております。

24話 妖怪の山

妖怪の山

この幻想郷において、人が行くには一番危険な場所とされている。呼んで字のごとく妖怪たち最大のテリトリーである、天狗が住み河童が住み

古今東西の妖怪たちの住みかであり、そして天狗が一大勢力を築いており排他的

一言でいえば地雷原に自ら突っ込むようなものである

というのが、今自分の横を飛んでいる天才魔法使いからの有難い解説である。

そして、目的である守矢神社はその妖怪の山の上に位置するものだからさらに

厄介この上ない、だがそこまで言われても行く気が失せない自分も相当な馬鹿である
事は百も承知だがな。

だが怖く無いと言われれば嘘だ、山が近くになればなるほど恐怖感が増大してくるのだが

ふと、隣を見れば我が腐れ縁の幼馴染はまた本に何かを書き込んだり読み直したりして

いるという、あまりにも気になって問いかけた。

「なあ、優連れ出してなんだが・・・怖くねえのか？」

「ん？そうかな？」

そんな問いかけに、首をかしげながら言うもんだから天才の感性と
いうのは
相変わらず解らない。

妖怪の山の麓部分にたどり着いた時である、「待てい！」と声と共に上空から
何かが道を遮る、さっきからの恐怖感で気が立ってたせいかな身体中に炎を点して
臨戦体制をとったが、その姿をみた見た瞬間気が抜けて消えてしま
う。

だってよ、目の前に現れたのが白い犬耳少女だったら気が抜けるよなうん。

「何者だ！ここは天狗の縄張りに立ち去れ！」

背中に担いでいた大剣をこちらに向け警告するが、なんとも締まらない
だがそうも言ってもらえない、だが戦いに来たわけでは無いため洋輔は
穏便に済まそうと話しかけた。

「縄張りに勝手に入ってしまったのはすまない、俺たちはただ守矢
神社に
行きたいだけだ、通してはくれないか？」

「ならん！何人も妖怪の山へ入れることは出来ん、それに
貴様のような悪漢面の言うことなど誰が信じるか！」

「悪漢面」 言われ慣れてはいるが、言われるとやはり腹が立つらしく
額に若干青筋を浮かべる洋輔を差し押さえ。

優が今回も任せろと言わんばかり前が出る。

「それで・・・所で君は哨戒天狗かな？」

「そうだ！私は白狼天狗・犬走 椀何度も言わない去れ、人間！」
今度は優の方に大剣を向け睨みつける、犬耳少女こと犬走 椀だが
なんともかわいいと思わせるその容姿では睨みつけても迫力が感じ
られない。

「縄張りに無断で入った事は改めて謝罪しよう、だが僕達は守矢の
神々達と個人的な
知り合いでね、この山においてかなり権威のある方たちだ。その個
人的な知り合いが
来たのに哨戒天狗の君は一存で入山拒否するのは・・・問題無いの
かな？」

「え・・・それはその」

明かなる同様。

悲しきかな、天狗の社会はかなりの縦社会である、哨戒天狗は言わ
ば下っ端その
社会体制の隙を突く。そして恐ろしいのは優である、隙あらば何で
も利用する

この青年はそういう男なのである。

「別に僕らは問題ない、日を改めて来てもいい。けど・・・管理者
の天狗がなんて

言うかな？」

「えっと・・・その」

「なら、確認取ってきて貰えないかな？」

「わ、わかりました！」

そうして、椀はあたふたと慌てながら山の中へ消えていった。

「・・・うん、行こうか」

「そりゃ駄目だろ？」

「え？此処から動いちゃダメって言われてないし、本当に確認取れ
無いしね

だって名前も行つて無いし。」

「鬼か・・・お前」

洋輔は優とは絶対に口喧嘩はしないと心に誓った。

24話 妖怪の山（後書き）

妖怪の山へ合理的侵入

そしてマジキチ優ケン

・・・最近自分の文才に限界を感じつつある
どうしよう・・・止めるべきが・・・続けるべきか・・・

御意見・ご感想を頂けたら幸いです。

24話 天狗のブン屋

妖怪の山へ一時的にはいえ入ることに成功した、でも世の中
そう上手くは
いかないらしい。なぜなら

「もう容赦しません！ここで散ってもらいます、山に埋めますか、
それとも

川に流されるか選びなさい！」

顔を真っ赤にして激怒する犬耳少女と

「あやや！これはスクープの臭いがしますね！」

カメラ片手に妙な野次馬臭を漂わせる、鴉天狗の少女

天狗達に早々に道を阻まれているからだ、優の作戦は結局大した時
間を稼げる

わけでもなかったようだ、大した期待はしてなかったんだけどよ。
だが此処まで来たら止まる訳にも行かない、それに今さら返してく
れるわけもないだろう。

特に横の犬耳少女がな。

さつきから、耳と毛と尻尾を逆立てて解り易く激怒している。

「おい・・・優、時間稼ぎにもならないじゃねーか」

「あれ？もう少し時間を稼げる予定だったんだけどね」

「それに、引き返せそうにないだろに・・・特に横の子がよ」

「最初から引き返すつもりないんでしょ、ならやることは一つじゃないかな？」

そう、俺はもともとから引き返すつもりはない。やばくなったら優だけでも里に返すつもりだったが

その本人はお見通しだと言わんばかり悪戯少年のような笑顔を浮かべている。

コツチに来てからというものの、こいつに勝てた試しがない、それはそれで少々癪なことだが
それはそれで仕方無いと思いつつ、拳を軽く握り2匹の天狗を睨めつけるように見据えた。

「あややや、そんな怖い顔なさらずに。別にとって喰いにきたわけではありませんよ」

そう言っつて無害をアピールするかのように手に持ったメモ帳をぶらぶらさせながら

彼女は名乗りを上げた。

「私は射命丸文、清く出ししい幻想郷一の新聞。文々。新聞の記者です、というわけで

取材させてください、その外来人のお二人」

「あの・・・文様、取材に来たわけではないのですが・・・」

「椀、貴方は黙りなさい！」

「ひい！」

明らかに自分達に話す口調とは違う、威圧のある言葉で

犬耳少女に命令を飛ばす。 あっちのぼうが素であるらしい

まあ取材に託けて神社に行くという手もある、こちらとて穩便に澄ましたいのが本音だ。

「ええと、射命丸さんだったかな、取材って言うが何を取材するわけ？」

「もちろん、妖怪の山に侵入した命知らずの外来人、コレ以上のネタはありませんよ」

「その子に聞いているとは思うが・・・守矢神社には「それはダメです」

流れるに行けると思ったが・・・心の中で舌打ちしつつ、もうひと押ししてみる

「駄目か？」

「此方にも面子というものがありますので」

「どうしても？」 「駄目です」

「少しだけでも？」 「駄目です」

「・・・」

少しは期待したが、押ししても引いても無理らしい。

「ですが、もし私に勝つことが出来るならば・・・通してあげましょう」

「・・・本当か!？」

とんだ僥倖だが、少し気に入らないことがある。

あきらかにこちらを見下した目、それが少し気にくわない。

だが、その見下しがチャンスを生んだそれは感謝せねばなるまい。

「私は清く出しく射命丸。嘘は言いません、それに二人がかりでかまいませんよ」

「舐めやがって・・・後で後悔はすんなよ！」

軽く握っていた右手を開き、そして堅く握りこむ勢いで拳に炎を点す。

ならば越えて行くまでだ、舐めた事をその身を持って後悔してもらおう。

そうして、臨戦態勢をとる俺の肩を優が掴んで来る。

「待って、洋輔」

「なんだよ、説得は効きそうに無いだろうが、戦う気が無いなら下がってろ」

そうして、敵に対して向き直る、だが優は掴んだ肩を離そうとはしなかった。

そして肩を掴んだまま、優は予想もしない事を口にする。

「違うよ洋輔、ここは僕に任せてほしい」

その言葉を聞いた瞬間、えっと間拔な言葉を吐き出してしまふ。

何を抜かすかと思えば此処は自分に任せる言ふ。

説得をするのか何かを交渉するのは知らないが、一度破局しているし

通じるわけが無い、それにわざわざ2対1でいいと言ってってくれるのだ

コイツは何を考えてるか知らないが、振り返ったときにあったのは睨みつけるように闘志を燃やす優の姿だった。

「任せてほしい・・・何考えてんだお前？」

「ここは僕が戦つ」

「本気かお前？」

「冗談も嘘も言つ気は無いよ、二対一の有利な状況を捨てるのも解つてる

それでも……此処は僕に任せてほしい」

その闘志に呼応するかの如く掴まれる肩に入る力が上がっていく、昔から争いごとには興味すら抱かず、そして大抵のことは若干俺に依存する傾向があった、

腐れ縁の幼馴染が幻想郷に来てからというものこのも変わるものなのかと環境は人を変えろというのは嘘では無いらしい。

そして、拳に点けた炎を消して優の腕をつかむ

「ただし、負けたらゆるさねえからな」

「うん、そのつもりもないし負けはしないよ」

優は笑って手を放し、向き直ると洋輔が向けている拳に拳を合わせた。

「あややや、作戦会議は終わりましたか？」

「待たせて悪いね、じゃあ始めようか」

「貴方一人ですか？」

「そうだよ、それがどうかしたかい？」

「舐められたものですね・・・少し痛い目を見て貰いましょう」

「舐めてはいないよただ・・・僕一人で戦いたいだけさ、そういえばまだ名前乗って

無かったね。僕は久我 優・・・魔法使いだ」

そしてお互い、スペルカードを手に持ち睨みあうように相対する
一瞬の静寂のあと、お互い待っていたかの如くほぼ同時に動き出す。

「それでは、いざ」

「尋常に」

「勝負」

鴉天狗対外来の魔法使いの戦いが切つて落とされた。

その光景を洋輔は遠くから眺めていた。

「あの・・・」

同じく遠くから眺める羽目になっていた椋が洋輔に弱々しく問いかける

今の彼女は戻ってきた時とは全く別、尻尾も耳も弱々しく垂れ下がっている

それでが一層かわいく見えるのだからなんとも不思議なものである。

「あれ？・・・いたんだえつと犬耳の嬢ちゃん」

「私は狼です！それはそうと、二人で戦わないんですか？」

洋輔は煙草を取り出すと、箱を振って器用に一本だけ出すと口にくわえ

指に火を点ける

「あいつが任せろっていったんでな」

「それだけでですか・・・？」

「任せるって言ったんだ、なら信用するだけだろ」

洋輔は睨みつけるに二人を見た後、ゆっくり紫煙を吐き出したあと
椀に吸わないでくださいと言われ、御免御免と平謝りし跡形もなく
炎で消し飛ばした。

24話 天狗のブン屋（後書き）

久方ぶりの投稿。

ダメダメウクジケソウ . . .

御意見・ご感想を頂けたら幸いです。

25話 鴉天狗VS魔法使い

僕と洋輔は幼馴染とは言いが、別に生まれた時からの付き合いだという訳ではなく

出会ってから2年は殆ど口すら聞いた事は無かった。

あの時の僕は本から得られる知識が世界のすべてだった、だから妙に大人びて

周囲から浮いていたし、それに対して何にも思わなかったし友達すら作ろうとしなかった。

きっかけは些細な事だった、小学3年の時に写生の授業でたまたま洋輔と班に

なった時だった、偶々洋輔と話した時に「本には全て書いてある」と冷めながら言った僕に

「そんな事はねえ、なら書いて無いもの見せてやる」と小さな喧嘩をしたのがきっかけだ。

そして、僕が教えてもらったのはこの周辺で一番夕日が綺麗に見える場所だった。

洋輔は「もう覚えてねえよ」と言っているが、僕は今でも覚えている山にあった無人給水施設から見たオレンジの世界、それはどんな本にも載って無かった

僕の知らない世界、それから僕と洋輔が幼馴染と言われるまでになったのは

気がつけば洋輔の背を追いかけ、洋輔の背越しに世界を見ていた

今までの僕の半生は洋輔の背中を見ていたと言っても過言では無いのかもしれない。

今までならそれで良かった、だが幻想郷に来てからだ。

僕は力を手に入れた、そして並んだと思った洋輔の隣に・・・だが、

それは儚い幻想だった、僕が近づいた分洋輔も進んでしまったそれだけの事だが、僕にはその一瞬得てしまった夢のような感覚が忘れられなかった。

見てみたくなってしまったのだ、洋輔の隣に立って見える世界が知りたくなってしまったのだその景色が、くだらないと言われそうだが

止めようとは思わないし止めたくもない、だからだ隣に立つためには

お前程度には負けられない・・・鴉天狗

突符「天狗のマクロバースト」

風符「ランドスパウト」

開口一番2つの風が激突する、双方恐ろしい程の風速を出す風の弾幕が

ぶつかりあい、対滅しあい、相殺しあう。

「あややや、風の魔法とはやりますね！ですが・・・風を操る天狗にはその程度意味ありませんよ！」

「確かに・・・【風】で君に勝てるとは思ってはいないよ」

「そうですね・・・ならば次はどうですかね、幻想郷最速の速さ貴方に見切れますか!？」

「幻想風靡」

目にもとまらぬ速さで駆け抜け大量の弾幕を隙間なくばら撒いて行く、
優は顔をしかめると隙間を見つけ何とか弾幕をよけてゆく、が、すぐに限界に来た
そしてとっさにスペルカードを発動する。

土符「クレムリンの攻防」

優がスペルを発動した瞬間、土の魔法で組まれた強固な防壁が優の前に要塞のように
立ち並ぶが、その土の障壁を文の弾幕が強烈な風が地面すら削り飛ばして行くかの
如く撥つてゆく手を突き出し、魔力を込めることによって、元来スペルカードに込められた
力以上に障壁を強化する。

削る風と耐える土しばしの攻防の後、スペルの時間切れと障壁がロボロになるのは
ほぼ同時に起きる。優は肩をなでおろし、文は残念そうに首をかしげる。

「あややや、今で終わると思って思っていたのですが。中々腕が

ありますね」

「褒められるのは悪く無いけど……でも次はこちらから行かせて貰うよ、

確かに【風】は君の勝ちだろう……でも他のならどうかな？」

「あややや？次は何で来るつもりですか、何をしても同じですが！」

「僕はね……君程度に苦戦し続けるわけには行かないんだよ」

優は少しだけ口を吊り上げスペルカードを発動させた。

氷園「ホワイトプリズン」

カード宣言と共に、氷の弾幕がゆっくりとした速度で文の元に迫る

「そんなゆっくりして、数の少ない弾幕程度で私が遣られると思ってるのですか？」

「いや思っていないよ、それにね一つ勘違いをしているようだけど」

「これはただの布石だよ」

そして、文の近くで弾幕は静止したかと思うと爆散して多量の冷気を振り出し

大量の霧を発生させ文を霧の中へと飲み込んだ。

余りの冷気に目をつぶってしまった文はゆっくりと目をあけて、その光景に愕然とする

白だった

上も下も右も左も、むしろ今自分がどっち向きなのかも解らなくなっ
てしまっている
どっちに飛べばいいのかすら解らない、そもそもどっちが地面だったかすら
あやふやになってきている、それもそのはずであった

彼女は現在ホワイトアウトの真ただ中にいるのだ、普通に方向感覚や位置感覚まで
くるってしまうのは当たり前である。

ホワイトアウト現象、本来極寒の土地等で吹雪によって視界が白一

色となり、
方向・高度・地形の起伏が識別不能となる現象であるが、優は氷の
魔術によって
大気を一気に冷やすことで濃霧発生させ相手をその中に閉じ込め、
ホワイトアウト
状態に叩きこみ完全に自分の位置を見失わせるという極悪なスペル
だった。

日輪「-紅炎- プロミネンス・ストライク」

そして、霧の中で自分の位置を見失って慌てているであろう文に向
って

優は問答無用の攻撃を叩きこんだ。

「あやややや、お強いですね。私の完敗ですよ」

負けた負けたと言いながら、優スペルの中でも高威力の一撃を受けてもピンピンしてるいるのだから天狗とは恐ろしい。

「じゃあ・・・通してくれるんだよね？」

「約束ですからね、それは保障しましょう・・・ただし」

「まだ何かあるのかよ」

「監視はつけさせて貰います・・・権貴方は彼らの監視として一緒に行きなさい」

「えええええええ！」

「それでは、私は準備がありますのでまた」

権に後始末を丸投げして、文は消える様に山へ向って飛んで行ってしまった

「・・・なんで私がこんな目に」

「巻き込んでいてアレだが・・・悪い・・・」

そう言って、権の頭をぐりぐりと撫でる洋輔。妙に気持ちよそそつにしている権も

まんざらではないらしい。

「優……すげえなお前」

「えっ……今何て？」

「すげえって言ったんだよ、いつの間にか離されちゃったモンだな」

「離された……？」

「そつだよ、喧嘩とかそういうのお前には任せられなかったけど……こっちきてから
かなりお前に任せっぱなしだからなあ……俺も何とかなんねえ
かなあってことだよ」

「僕が……洋輔を離している……」
優の眼には困惑の表情が浮かばせ、解らない……と小さく呟いた。

25話 鴉天狗VS魔法使い(後書き)

連続投稿！

取りあえずやる気を切らさないために続けるぜ！

今度はいつまで続けられるかなあ・・・

御意見・ご感想を頂けたら幸いです。

26話 河童の少女

さて、何とか悪徳記者アヤ・シャメイマールを退けた我々一向は現地住民、モミジ・イヌバシーリをガイドにさらに妖怪の山の奥地へ進むのであった。

まあ、そんなガキの頃テレビの再放送で見たバライティ番組のような下りは

本当にどうでもいいが。何とか妖怪の山へ真の合理的に入山出来たのは本当だ。

さっきから下を向いて何かを考え続けてる、参謀役(?)の優そして仲間(監視役)になった椀ちゃんを加え、われら探検隊(?)は守矢神社へ近づいてるのだ。

・・・そろそろ探検隊風の喋り方も止めよう、悲しくなってきたならはじめからやるなって？そりゃ、優は話しかけても反応しねえし椀ちゃんはジト目で睨み続けてくるし、俺が何したって言うんだよ！

ちよつと現実逃避したっていいじゃねえかなあ……

……悲しくなるので本当にやめよう。

「あのさ……椀ちゃんそろそろ睨むのやめてもらえないかな」

「睨んでません」

そうして、ジト目で睨むのを止めない椀ちゃん……まあこれで1
2回目なんだけだよ

「おい！優」

「……」

下を向いて無言、何かをずっと考えてるようだがせめて反応ぐらい
はして

欲しいものである……これも12回目である

「あのさ・・・」「睨んでません」「・・・」「」

13回目を迎えた同じ反応、洋輔は少し無表情になった後、あきらかなる

怒気を含んだ顔で胸倉をつかむ勢いで2人の前に立ちふさがる。

「ああ！？テメエら喧嘩売ってんのか！？あ？喧嘩売ってんのか
売ってんだよな！？人の問いに同じ反応しかしないしょ
テメエらはオウムか？焼くぞコラ！」

元から人相が悪いのに完全に怒気全開、二人に詰め寄るその姿はチンピラを通りこして

完全にヤの付くお方、その姿に耳と尻尾を垂らして「めんなさい」「めんなさい」と

謝る椀と、それでも見向きむせず考え事を続ける優

そんな優に洋輔は拳を振り上げ

一直線に頭に拳を落とした。

「……洋輔。痛いんだけど」

「散々人の話無視した報いだ、甘んじて受ける」

酷いなあと頭を摩りながら飛ぶ優とまだ耳と尻尾が垂れ続けている椀

まだ若干機嫌が悪いのか表情の悪い洋輔はたから見れば

やっぱり悪人面に連れられた二人と言う構図である。

「あの……」

やっと回復したのか、椀が弱々しく問いかけるが

「あー!?!」

それをまだ若干ドスの利いた声と悪漢面が遮る、椀は「ひい」と短い悲鳴を上げたあと、また耳と尻尾を垂らして「いえなんでもないです」
と静かになる。

その光景に洋輔は明後日を見るような表情になって、またかと小さく嘆き

さっきとは打って変わって、暗く沈む。

そうして、今度は逆に椀が頭に？マークを浮かべるように顔を上げた。

「あの……どうしたんですか……？」

「いや……なんでもねえ」

そうして、暗く沈みながら答える洋輔をフォローするかのよう

に「洋輔はね、自分が悪人面なの気にしてるんだよ」と優が椀に耳打ちした。

「それで……なんですが、なんでお二人は危険を冒してまで守矢神社に行こうとしているんですか？」

「言ったら、守矢神社に居る知り合いに会いに行くって」

「え……本当にそれだけなんですか？」

「それ以外に理由がねえよ、嘘ついても得がねえだろ？」

「……正直に言いますが、貴方は「ああ馬鹿だよ」で、え？」
洋輔は懐から煙草を取り出し、火を点けずに口にくわえる

「俺は言われ慣れてるからな、馬鹿で結構だが譲れねえ事があるんだよ

まああいつは違うけどな……天才は何考えてるか解らねえ」

そう言いながら洋輔はさつきと同じように下を向いて何かを考えこんでいる優を指差す。

「……本当に馬鹿ですね」

「何度も言うんじゃないよ……」

洋輔は急に止まったかと思うと、妖怪の山のある一点を見つめる

「洋輔……止まるなら止まるって言うてよ……」

「うるせえなら、考え事しながら飛ぶのやめろ」

そして、やはり何も無い場所に向って手をかざす

「おい！5秒やるさつさと姿あらわせ」

「5」

「洋輔……何もいないじゃないか」

「4」

「まさか・・・でもどうやって」

「3」

「2・・・警告した遠慮はしないぞ」

「1」

「わわ！！！！解ったよ、何もしないから攻撃はしないで！」

何もない、場所から突然響く声、そして、風景と同化しているかのように

現れる一人の少女

「に・・・にとり！なんで」

頭に緑の帽子と胸に謎の鍵をつけそして巨大なバックを担いだ、にとりと呼ばれた少女が
やあやあと妙にフレンドリーに現れる。

「やあ盟友。悪いけど此処から先は危ないから、進ませるわけには行かないよ」

「・・・誰」

「私は、河童のにとりってもんだ。よろしくね盟友」

26話 河童の少女（後書き）

河童のにとり登場

かつぱっぱー

前半のネタはいったい何人の人が解るだろうか・・・

御意見・ご感想を頂けたら幸いです。

27話 立ちふさがる者達

「……河童ねえ……かっぱ」

【河童】日本において、1・2を競う知名度を誇る妖怪。主に川に住み

身体は緑色、嘴を持ち背中には甲羅そして頭には皿を持つというのが一般大衆がもつ河童のイメージであろう。

のだが、目の前に居る河童と名乗る少女はどうだろうか

身体は緑（の服）、背中には甲羅（だと思われるバツク）そして頭には

皿（と思う帽子）確かに、人に伝えられる特徴はあると言えばあるが（当たり前だが嘴は無い）残念な事に河童と言われても説得力は無いのだが。

215

「やっぱり僕らのイメージとは違うね。天狗達もそうだったけど」

「あいや、盟友。ちゃんと人間の想像通りの河童も天狗もいるさ」

「へえ、そうなんだその辺りは幻想郷縁起にも詳細が載っていないかなったしね

なるほど、それも気になるけど、どうやって姿隠していたんだい。

僕の記憶では君は水を操る河童のはずだけど、能力ではないよね？」

「そうさ盟友！ 私の開発した光学迷彩（ver.2.2）は!？」

途中まで全然気がつかれなかったんだけどさ、その盟友にばれたけど・・・

所で盟友なんで私が付いてきているって解ったのさ？

能力か？それとも私の迷彩が不完全だったか？好学のためにぜひ教えてほしい」

すごい勢いで洋輔に詰め寄るにとり、それを洋輔は困った表情で迎え煙草をくわえたまま額を抑える。

「えっと・・・にとりって言ったか？んで危ないから進むなってなんでだ？」

「いや取りあえずそれは後でいいから！どうして気がついたのさ！風下から近づいて椀の鼻すら気付かせなかったのにさ！教えてほしい盟友！」

洋輔は確信する、コイツもあいつらと同種だと。隣にいる腐れ縁幼馴染とか

某紅い館の魔女だとか、それ同じくするやつかいな類の奴であると。

この類の奴は答えてやらないと、まず人の話を聞かない。

己が領域で生き、己が領域に入ると見境が無くなり、己が領域に入ると何にも

見えなくなるといふ、なんとも面倒くさい奴らなのだ、とはいっても洋輔は

長年つきそう腐れ縁幼馴染のお陰か対処法は知り尽くしているのだが。

一つは率直に話すこと、だがこれは次から次へ質問が移行し長時間かかることが多い

一つは注視を他の何かに逸らしその隙に離脱すること。しかし誰か及び何らかの

被害が及ぶ可能性があるのであまり使えない。

そして最後に、殴る・蹴る等して強制終了させる。これは無論であるが

相当仲がよくないと出来ない芸当なのでまず出来ない。

流石に初対面の河童に2と最後の手段（優には割といつもの手段）を選ぶ訳にもいかず、

1番目の手段を選択せざるを得なかった。

「まあ・・・たぶんなんだが能力だな」

「ほほう・・・していかにして見破った」

「なんつうかな・・・そこに居るつてのが解ったんだよな、そこだけ

暖かい感じがするというのが・・・熱っぽいというか・・・
感覚的な事だから上手くは表現できねえんだが」

「たぶんだけど、洋輔は火の能力の使い手だから熱とかを感知するのが得意になったんじゃないかな？」

「言われればそうなのかもな」

「うむむ・・・熱探知とは想定外だった何処を改良すべきか・・・有難う参考になったよ盟友！・・・それとこれ以上進むのは危険だから帰った方がいいよ」

このまま流れるに通れると思っていた洋輔は心の中で軽く舌打ちをした。

「一応・・・天狗にや許可もらってんだがな、監視として椀ちゃんもついてるしよ」

「ありやあの鴉天狗が独断で決めた事だろ、下手に上の天狗に見つかつたらただじゃすまないさ。これ以上進むのは河童として見ちゃいられないね」

「そこから見てたのかよ・・・」

「そーです、それに私も貴方達がこれ以上進むのは良くないです」

そんな声と共に、大きなリボンとゴスロリとも取れる衣裳の女性がなぜか

くるくると回転しながら飛んできています。

「あ！雛！」

「どうも、人間の御二人さん。私は鍵山 雛がない厄神ですうー」

そうして、やっぱりくるくる回りながら器用に会話する自称厄神様所で疑問なのだが、目が回らないのは神様だからなのだろうか・・・

「貴方達、かなり厄いです。特に貴方はもっと厄いです」

ぴたりと洋輔を指差し止まるといっさら器用な事をする自称厄神様

「ですから、すぐ引き返した方がいいです。とつても厄いですから」

「そうそう、悪い事は言わないよ盟友悪い事は言わないからさ」

「・・・もしそれでも行くと云ったら？」

「その時は力づくでも止めさせて貰うさ」「以下に同じです」

洋輔は一つ溜息を吐いた後、加えていた煙草に火を点けた。

「・・・忠告は有り難い。でも行かなきゃならねえんだどいても
らえねえか？」

「さっきも言った通り力づくでも止めさせてもらつよ」

洋輔は溜息と紫煙を一緒に吐き出したあと、口に煙草をくわえたまま喋る

「さっきからさ……どうも邪魔ばっかされてんなあ。つまりは通りたければ
力づくで通れって解釈でいいかなこつこついう場合」

「そうなるね、盟友」

「そうか、悪いけど。どいてくれねえよなあ」

「無理ですね」

「……そうかよなら、答えは一つだな。」

先ほどからすでに握られていた拳はすでに爆発寸前であったかのよう
うに
激しく燃え上がり、拳から腕そして肩まで達し爆炎の如く燃え上がる。
る。

その炎は洋輔の吐き出した、煙草を一瞬でかき消した。

「一度しか言わねえ……………どけ！」

少し顔伏せられた顔は、ヤの付く家業のお方も納得いく表情となっているだろう

洋輔は振り向かず優に告げる。

「悪いな優、第二ラウンドは俺が行く」

そうして洋輔は自身から腕から燃える炎を全身から燃え上がらせ

河童と厄神様に突撃した。

28話 理由

「さっきからどいつもこいつも、邪魔ばっかすんじゃねえ！」

開口一番叫びと共に特攻する洋輔その表情は、

邪魔され続けた怒りでその悪漢面はさらに悪化し。ヤの付くお方達と同業ですと間違われていても文句も言えない状態にまでなっていた。

その表情を見た雛にとりは、短い悲鳴を上げさらに火の玉と化しまっすぐ

突撃してくる洋輔を左右に避ける。悲しいことか厄神様であろうとも人間を盟友と呼び友好的な河童であろうとも、どこの世界でも悪漢面は怖がられるようである。

そうして洋輔が二人の間を抜けた瞬間、炎の軌道を残して洋輔が一瞬にして
にとりの目の前へと現れる。

「な！」

「悪いけどよ！あんたから先だ！」

少し離れた場所から2対1の戦闘を見守る椀と優

「速い！あれほどだななんて・・・」

「やっぱり君達は洋輔を甘んじて居るみたいだけど・・・舐めない方がいいよ」

「でも・・・どうしてあんな力の流れに逆らった動きをが出来るんですか？」

「ああアレかい？ネタは単純だよ、体から炎を噴出してその方向に飛ぶ推力を得てるんだよ・・・
なるほど、幻想郷の飛び方にああいうのは無いんだね」

「うわわわわ!!」

「つち！ちよろちよろすんじゃねえ!!」

追いかける洋輔と逃げるにとり、確かに炎を噴出することによって凄まじい速さを手に入れることは出来た

だが、これにも致命的な弱点がある。それはやっぱり燃費が悪いこと、元々全身に炎をいきわたらせてる事も含め使う時間が長ければ長いほど即ガス欠に陥る、そのために短期決戦が望ましいのだが。

残念な事に短期決戦向けの長距離用のスペルは有るのだが、どれもこれも消費が激しいそのために近距離戦に持ちこむしか無いのが泣けるところではあるが……

「なんで追いかけてくんのさ！」

「そりゃ！これが俺の戦法だからな！」

「ああ！付き合ってらんないよ！」

光学「オプティカルカモフラージュ」

洋輔の余りのしつこさに光学迷彩を起動し姿を隠しつつ、弾幕をばら撒くにとり

洋輔は弾幕をさけつつ、ある地点に向って再び炎の起動を残して飛んだ

「忘れたのか、俺に光学迷彩が効かない事をよ？でも……もう遅え！」

業火「バツクドラフト」

「吹き……飛べ!!!!!!」

スペルの発言と共に空間に叩きつけられた拳が業火と共に回りごと吹き飛ばした。

光学迷彩を破壊したのか姿をあらわした、にとりだがそのまま地面に落下していった。

「おみごとですね」

そこには、先ほどとは会話していたとは打って変わった冷たい雰囲気を出す雛がたたずんでいた。

「……なぜ手をださなかった？それに……落ちてるぞ、助けなくていいのか？」

「アレはにとり事態招いた結果ですから、手を出さなかったのは見極めるのに回ったからです」

「あんだ意外とドライだな……まあ手を出されなかったのは幸いだったけどな」

「再開する前に貴方にひとつ、聞いておきたいことがあります」

「なんだよ？言っとくが始めちまったんだ。やっぱり引けとかは無しだぞ」

「いえ違います。どうして貴方はこんな無茶をする？友人を巻きこみ、天狗の縄張りを荒らし
そして自らの危険すら振り返り見ない・・・なぜそこまでするのですか？どんな理由があるというのですか？」

雛の質問に洋輔は自嘲するように少し笑った。

「何が・・・おかしいのですか？」

「いや・・・おかしいのは自分にだよ、確かに無茶だろうな、理由と言われる理由か・・・あると言えばある
さっきも言ってたかもしらねえが、守矢神社にいる人に会いに行く
ってだけだ」

「だからです、ただ人に会いに行くのにどうしてこれだけ出来るのか、別に特に危険を冒す必要は無いでしょうに」

洋輔はまたも自嘲気味に笑ったあと、唇を釣りあげた状態で雛に答えを返す。

「まあ、言われる通りだ・・・正直に言わねえで適当な事言つと面倒くさそうだからな・・・言つてやるよ」

理由は簡単だ惚れたヒト（女性）会いたい、これ以上の理由があるか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・それだけですか？」

「ああそれだけだ」

「それだけのために、これだけのことをしたのですか？」

「だから、そういつてるだろ」

別に恥じることもなく、嘘を吐くでもなくそう言い切る洋輔を雛はジト目でにらみつけやれやれと溜息を一つ吐く。

「あなたは・・・」

「うわぁ、言い切りましたね・・・恥ずかしくないんですかね？」

遠くから二人の言い合いを見ていた、優と椋は洋輔の告白とも言える答えを

遠巻きながら聞いて、椋は若干頬を赤く染め優は当然と言わんばかり特に変化は無かった。

「僕は知ってたからね今さらだし、けど大声で叫ぶように言うのは僕もどうかと思うよ」

「確かに女性としてはまるで物語の一節みたくで、憧れると言えば憧れますけど

実際にやる人を見ると・・・やっぱり

「馬鹿ですね」

「一々言うな、んなことは言われんでも解る・・・んでやるのか

「やらねえか？」

「仕方がありません、此処まで厄い方は久しぶりですからね。厄神として見て見ぬふりは出来ません」

「そうかよ……なら……第三ラウンドだ！」

洋輔は拳を弓のように引き絞るように構え雛を射抜くように見据える、対する雛はまるで打つてこいと言わんばかり無防備にそこにたたずんでいる。つまり誘っているのだ、こつちが接近主体である事を踏んで、なら自ら近づく必要はない此方がかつてに間合いに入ってくれるのを待つだけ、不気味なほど一瞬の静寂のあと洋輔が動く。

「まっすぐ突っ込んでくる……やっぱり馬鹿ですなあなた！」

悲運「大鐘婆の火」

「落ちなさい……人の子よそれが貴方のためです」

「だからよ……馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿うるせえんだよテムエらは、それにコレしか能がねえんだよ文句あるか！」

雛から放たれた弾幕を掠り・少々被弾しながらも問答無用で突っ込む洋輔。

そして左手に握られていたスペルカードが発動される。

延焼「ストライクドラフト」

スペルの発動とそして炎の噴出による推力を得ることにより、火の玉と化した洋輔が雛に襲いかかる。

「落ちなさい！」

「消し……飛べ！」

拮抗しあう雛と洋輔、襲いかかる弾幕を力づくで抜こうとする洋輔。そうして小さな爆発とともにその拮抗は終わりを迎えた。

そして煙の中から現れたのは拳を雛の眼前に向けた洋輔とスペルカードを破られた雛の姿。

「ブレイクだ！厄神様よ……」

「本当に無茶をしますね貴方は……私の負けでいいです」

やれやれと溜息をついて敗北宣言をする雛、その姿に妙に気に喰わない顔をする洋輔

「……妙に投げやりだなオイ」

「いいえ、気のせいです。貴方とやり続けても無駄と解りましたので」

「あなた……割と毒舌家だな」

やれやれと言いつつ洋輔は煙草を取り出し加えると、火を点け紫煙を吐き出した。

「後一つ」

「なんだよ」

「煙草は止めたほうがいいですよ」

「ホントに味方いいえな……」

投げやりに眩いたあと、洋輔は再び紫煙を吐き出した。

28話 理由(後書き)

にとり&雛終了

最近忙しくて書けないよ・・・

友達に東方小説書いてる事がバレて

新しい小説を書くかもしれない

レベルアップのためにも良いのかもしれないが・・・

何本も掛け持ちしてできませんよね。

私だけかな？

小説等々御意見・ご感想を頂けたら幸いです。

29話 友達・親友・幼馴染

少し過去の話をしよう。

東風谷 早苗、僕の二人目の幼馴染にして僕ら幼馴染3人の中で唯一の紅一点である。

東風谷との出会いも洋輔がもたらしたようなものだ。

当時東風谷は悪く言って正直僕と同じ浮いた子だった、「神様は本当に居る」と

口癖のように言っていた。今の僕らのように幻想郷を体感すれば神様は信じられようが、当時僕ら現代小学生にとっては『神様なにそれ？居るわけないじゃん』
『』
というのが悲しい事に現代の考え方だ。

中には東風谷を嘔吐き呼ばわりする奴もいたが、それでも東風谷は「神様は居る」と言い続け

それがいつそう拍車をかけていってしまい、そのせいで男子からも女子からも浮いた存在になってしまっていた。

だがその当時僕は東風谷には興味も無かったし、その時の僕は初めて出来た友人しか見ていなかったからだ、そして出会いはとても些細なモノだった。

当時僕らの間では秘密基地作りが流行っていて、僕は洋輔に連れられて辿り着いたのが

東風谷が住む守矢神社だったのだ、そして賽銭箱の隣で隠れて泣く

東風谷に
僕と洋輔は出会った。

「ねえ、洋輔ホントに此処に秘密基地に出来そうな場所あるの？」

「えーだつてさ、神社つて秘密っぽいじゃん」

「それだけ？でも秘密の場所があるからもういらないんじゃない？」

「あそこは秘密の場所で俺達の探してんのは秘密基地！全然違うつ
うの！」

そう言つて、洋輔は僕の頭に軽くチョップを入れるそんな些細なや
り取りをしながら

僕らが今上っている階段の先にあるのは、守矢神社という僕らが生
まれる前から

ある神社らしい、何時から有るかはまだ本で読んだことないから知
らないけど

かなり古くからあるというのは聞いた事がある。

「ねえ洋輔・・・声聞こえない？」

「あ・・・？確かに聞こえんな・・・？」

「誰かいるのかな？」

「優、お前馬鹿だな。神社ついたら幽霊に決まってんじゃない。先行くぜ」

「あ、待ってよ」

かすかに聞こえる、女の子の泣き声を幽霊の声だと言って

洋輔は階段を駆け上がったいく、僕もそれに何とか続き

一着と声をあげながら軽々上りきる洋輔は息切れすしてその場に入り込む僕を差し置いて

幽霊は何処かなと周りを探し続ける。

そして、賽銭箱の横から聞こえる泣き声に気づいた洋輔は僕を呼ぶと息を声出すなよと言って

ゆっくりと近づくそして、のぞき込んだ僕らの目に映ったのは幽霊では無く

緑の髪に蛇と蛙をあしらった髪飾りをつけた女の子だった。

「なんだ……東風谷かよ」

「ふえ……えっと」

「風沢！ 風沢 洋輔忘れたのかよ!？」

「えっと……そのごめんなさい……」

どうやら僕らを知らなかったのか覚えてなかったのか、それに怒ったように大声を上げる

洋輔に東風谷に驚いたのかまた涙を浮かべる。

「ああ！泣くんじゃねえ！俺が泣かした見てえじゃねえか！」

「ひう！」

そして大声で泣くなど叫ぶ洋輔にまた涙を浮かべる東風谷、そうして悪循環は二度三度と続く

泣くなど言う洋輔それに驚いて泣く東風谷。

なんとという堂々めぐりそしてそれを傍観する僕、このころから洋輔は相手を怖がらせる事が多く

今思い返せば悪人面・クザ面はこのころから始まっていたと僕は推測する。

「……というのが僕らの初対面かな」

「洋輔さんはこのころから悪人面だったんですね」

空を飛びながらまるで先生のように身ぶり手ぶりで思い出を語る優
とそれを生徒のように
聞きながらメモを取っている椀。

「……オイ何やってんだテメエら」

「ん？僕らと東風谷の出会いの話？」

「出会いの話で俺の悪人面の推察してんじゃねえよ、んでそっちメ
モんな！」

「いえ後で文様にでも流そうかと思ひまして」

「いいじゃないか減るものでもないし。洋輔……恥ずかしいのか
い？」

「……違つけど！ああもう余計な事言つなよ！」

洋輔は、頭をがりがり掻きながらそっぽを向くように少し先に出
てしまつた。

「相変わらず……口上手いですね……」

「違つよ、洋輔はああいうところ恥ずかしがるからね。余計な事言
つなとは言つたけど」

話すなどは言っていないから大丈夫だよ」

「そんなものですか……」

「そんなものだよ、さて……続きでも話そうか……」

続きか、確かここからだったね

なんとか東風谷を泣きやまず事が出来た洋輔と傍観し続けた僕
そしてまだ涙が若干残る東風谷、傍から見たら洋輔が泣かしたと見
れるけど

洋輔は絶対しないからね、洋輔はそういうの大嫌いだからさ口は悪
いしすぐ怒るし

すぐ殴るけど、絶対いじめたり泣かしたりしないよ。

なぜだつて？だつて僕が一番良く知ってるからさ、この時もそうだ
つたしね。

「それでさ……東風谷お前なんで泣いてたんだよ……」

「え？」

「え？……じゃない何で泣いてたんだよ、このままだと俺が泣かした様だから教えるよ」

「えっと……その……笑わない？」

「笑わない……なあ優」

「僕は泣かして無いんだけど……解ったよ」

あの頃の洋輔は今以上に無茶苦茶に引つ張って、無茶苦茶に同意を求めてくる
といつても小学生ならこんなものかと思えるから今となってはいい
思い出だ。

「絶対？」

「……絶対笑わない」

東風谷は大きく息を吸い込んで呼吸を整えると、おどおどと理由を話し始めた。

「あのね二人は神様は本当に居ると思う?」

「へ……………?」

「……………え?」

「だから……………神様居ると思う?」

「えつと……………それが泣いてた理由かよ」

「うん……………だってみんな、神様なんて居ないって言うんだもん。居るもん

私には見えるからでも誰も信じてくれないし、ウソツキってみんな言うんだもん居るもん……………神様は……………神様は……………ホントに居るもん!」

誰かに何を言われたかは定かではないけれど、またも思い出し泣きしそつになる東風谷

「あああああああ!だから泣くな!」

「……………ごめんなさい」

「泣くな!……………居るんだろ神様……………俺は信じる!」

「え……………本当に?」

信じられないと言った顔で洋輔の顔を覗き込む東風谷、本人は今でも答えてくれないが
この時言った神様を信じると言った言葉は東風谷を案じて言った嘘なのか

それとも本当に洋輔は神様を信じていたのかそれは解らない

「ああ、だってさオマエ泣いてんじゃん。ウソじゃなくてさ本当に居るのに誰も

信じてくれないのが悔しくて泣いてたんだろ？だったらホントだろ嘘だったら

泣かないじゃん」

「……信じてくれるの？」

「居るって言ったのオマエだろ、嘘なのか？」

「嘘じゃない……」

「だったら信じる、優！お前も信じるよな！」

でも、にいと唇をつり上げて笑う洋輔を見るとそついな事はどうでもいいと思う

その時でも今となってもそつと思う、僕もただ笑って頷いた事はよく覚えている。

「だからさ泣くなよ、俺たちはお前を笑ったりウソつきって言わない俺たちはさ……今日から……友達だからよ」

そして東風谷は「うん！」と初めて笑顔で返事をして
洋輔が差し出した手を握り立ち上がった。そして僕は笑いあっ
た。

「……まあこんな感じかな」

「不思議な人ですね」

「そうだね、でも僕は洋輔以上の友人は見えないよ」

「でも……やっぱり私はあの人は馬鹿だと思います」

「それは……僕も否定できないところがあるかな……」

だがそんな椀と会話する優はまたも急停止した洋輔の背中に顔をぶ
つける。

「……だから止まる時は言つてよ」

洋輔は答えない、構える様に立ち止まり睨みつけるように上空を無

表情で見上げている。

つられるように優が上空を見上げると、この場所には明らかに異質な空気を出す2人の人物。

一人・背中に注連縄のようなものを付けた大きな女性

もう一人・蛙の目のようなモノがくつついた帽子をかぶった小柄というより完全幼女な女性

なんとも対局な二人であるが同等に放つ異様な空気だけは一緒であるその二人が腕組をしながら背中合わせで立ちふさがるように降りてくるのだからそりゃ
洋輔が急停止もするものである。

そして注連縄を付けた大きい方の女性が口を開く

「久しぶりだなガキ共」

「……………どなたですか」

まったく初対面の人間に久しぶりと聞かれたものだから、洋輔と優は双方顔を見合せて
同じ言葉を吐いてしまった。

ついに最後の最後、最大の難関が一人を待ち受ける。

29話 友達・親友・幼馴染（後書き）

というわけで今回は過去編でござる。

それに伴い妖怪の山編はそろそろ終了

次はどこにしようかなあ

小説等々御意見・ご感想を頂けたら幸いです。

30話 最終関門 神の試練

上空で背中合わせで腕を組み、二人を見下ろす二人の人影。

注連縄を付けた女性が放った「久しぶり」という言葉つまり少なくとも

彼女は洋輔と優に会ったことがある事を示す、だが、等の本人達は
その事についてまったく記憶が無く、彼女たちが出す異質な雰囲気
も相まって

さらに彼らを混乱させた。

「優・・・マジで覚えがねえんだな」

「さっきも言った通りさ・・・でも検討はつきそうなんだけど・・・」

「心当たりはあるってか？」

「一応ね・・・桜ちゃんちょっと聞きたいことがあるんだけど」

「どなたですか」その予想に反した反応に八坂神奈子は少々混乱していた、
本来なら「何故ここに！」のような言葉が返ってくるはずで、そしてカッコよく
敵っぽい言葉を返してラスボス臭を漂わせるはずだったのだが、これは完全に失敗した。

計画は完全に丸つぶれ、これでは諏訪子が無理矢理連れ出してカッコよく決めた意味が無い。

「うち……計画が丸つぶれじゃないかい」

「ねえ、神奈子ー」

背中からやる気なさそうに答える諏訪子、そもそも彼女は元から無理矢理連れ出されたのだから仕方がないのかもしれないが。

「なんだい諏訪子、こっちは計画の修正を練ってるんだけど？」

「計画以前にさー あの子たちに姿見せるのは初めてになるんじゃないの？」

向こうじゃ信仰が足りなくて、実際に見えてたのは早苗だけなんだしな」

「え？」

「守矢神社の神様だ!？」

「うん間違いはない、それにしても縁起で読んだんだけど本当になんで気がつかなかったんだろ？」

「間違いねえのか？」

「はい、守矢神社の方々が幻想郷に来たのは少し前です。縁起にもきちんと

記録されていますから間違いありません」

洋輔はやれやれと頭を掻きながら、また煙草を一本啜えようとしたが吸い過ぎかと
呟いてしまい直す。

「また神様とはな・・・縁深すぎだろ」

「この前みたいには絶対にいか無いよ?」

「言われなくても解る……でも鬭うとは限らねえだろ?」

「……これだけ荒らし回つといてそれはないだろっけどね?」

だよなあと洋輔は溜息を吐くと優と共に2人の神様を見据えた。

「……まさか神奈子」

「……いやその事を忘れなんていないようん、忘れてないよ」

「忘れてたんだね?」

「イエエワスレテマセンヨ? ホントウデスヨ?」

「なんで疑問形とか棒読みだとかは言いたいことあるけど……普

段あんなに

カリスマ溢れるのにどうして稀に抜けた行動とるかなあ・・・で
どうするの?」

「・・・計画はBプランで行く!」

「何それ?後そろそろこのポーズ止めていい?」

未だに背中合わせで腕組みという(神奈子発案)を取りながら二人
は二人を見据える
彼らを見据えた。

「『改めて』久しぶりと言っておこうガキ共・・・私は八坂神奈子
この先にある
守矢神社の神様さ」

「私は洩矢諏訪子、私としては『初めまして』といった所かな?あ
私も神様だしね」

一人は妙にドヤ顔で一人は妙にやる気なさそうに、そしてやっぱり

背中合わせの腕組み

という、そろそろツッコミの一つでも入れたいポーズを取る神様？
人だが、

そのオーラは本物、何もしなくても感じる力強くそして溢れでる神力
今まで感じてきた中でも最上級レベルの威圧感が二人を支配してい
た。

洋輔が口を開く前にいつものことながら、優がまかせると言わんば
かり

先に口を開く、感情的に成りがちな洋輔より論理的かつ知識量が豊
富な

優の方が話し合いや交渉事といった事は得意であるため、気がつけば
二人の中でこのような事は優が切り出すことが自然となっていていつて
いる。

252

「これはどうも・・・八坂様に洩矢様、僕らとしては初めましてで
すね

それでどういったご用件で？」

「要件？ここまで人の領域荒らし回っというて、要件も何もないだろ
？」

「別に荒らす目的で来たわけでもありませんし、戦いに来たわけ
もありません

確かに不法侵入はしましたがいくつかの戦闘は不可抗力です。

本来こちらには戦闘の意志はありません、僕達の目的は貴方達が

祀られる神社

守矢神社の風祝 東風谷早苗と会う事です、不法侵入した事は謝罪します、

せめて・・・少しだけ会わせて頂けませんか？」

「へえ・・・言うこと言うねえ、でも私達も領域勝手に嵐回られてごめんなさいで

すますほど甘く行くわけには行かないよ？」

「・・・つまりは僕らにどうしろと仰りたい訳ですか？」

「簡単な事じゃないか此処（幻想郷）でのトラブルは弾幕ごっこで解決するのがスジだろ？」

「・・・拒否することは？」「無論認めないよ」

洋輔はやれやれと溜息を吐きながら、最近癖になったのか煙草を取り出していた事に気づき
すぐさま戻す。

「・・・流石に今回はダメかよ」

「そうじゃなきゃわざわざ出向いたりしないさ・・・」

「だよなー」

投げやりに優に言葉を返す洋輔だが、目だけは決して2人の神様から背けようとしな

あ。の二人の神様の先には目的の場所があるのだから。

「・・・悪いな優。今さらだけどこんな事につき合わせてよ」

そんな洋輔の言葉に優はやれやれと溜息をつき、今までに見せたことないほど鋭い目つきで答える。

「・・・それは勘違いだよ洋輔。前僕に言ったよね幻想郷に来た時にさ、巻き込まれたんじゃないよ」

自分の意志だって。あの時の言葉をそっくりそのまま返すよ、僕はここに来たのは自分の意志だってね」

洋輔はまるで狐に化かされた時のような顔した後、自嘲するように大きなため息をした後にやりと笑う

「言うようになったじゃねえかよ・・・俺は八坂様だっけか？そっち方行くしよ・・・」

「解った僕は洩矢様の方だね・・・相性的にもそれがベストかもしれないね、結局どっちに行っても

キツイ事にはキツイからね」

そうして拳と拳を軽く合わせた後一人はそれぞれ神様に向い力強く
飛翔した。

30話 最終関門 神の試練（後書き）

そんなこんなで、遂にVSかなすわ様

ちょっと抜けてる神奈子様は好きですか・・・？

小説等々御意見・感想を頂けたら幸いです。

31話 神様の試練・天

「相談事は終ったみたいだね」

「それでー神奈子どっち行くの？」

なお二人はやはり背中であ腕組みというポーズのままである。

「なんだいさっきまで妙にやる気無かったのに？」

「少し思うところがあったね、優クンは私が相手をしていいかな？」

「まあ私はどちらでもいいからねえ・・・ま、諏訪子がそっちでいいよ」

そして神様達も己が的に向け飛翔する。

「俺の相手はアンタか・・・八坂様よ」

「私の相手はアンタかい・・・凧沢」

洋輔を蔑むように笑みを浮かべる神奈子とそれに負けないと何時もの割増になつた悪漢面でにらみ返す洋輔、その場の雰囲気だけ見ればとつても悪い顔の二人が『今から喧嘩始めますよ準備はよろしいですか』と

メンチの切り合いをしてるように見えるが、洋輔にとっては負け勝負である

神奈子と対峙している洋輔には絶望的な力の差を直に感じ取っているだろう。

「所で凧沢・・・アンタなぜこんな事しでかしたんだい？」

「理由・・・解つてんだろ？意地悪な神様だな」

「アンタの口から直に聞きたいのさ、月並みな答えはいらないよ。アンタが

正直に思つてる事を言えばいい、私はそれが聞きたいだけさ」

「・・・簡単なこと、俺は早苗に会いたかった、会つて伝えたいことがあつた

「ここ（幻想郷）に居るって聞いて我慢なんて出来なかった。周りの迷惑も考えた

と言えば考えたさ……でも……止まれ無かったそれだけですよ」

神奈子から威圧を持って問いかけられた質問に、目をそらすことなくやや自嘲

気味に笑いながら答える洋輔

「……アンタ馬鹿だろ？」

「言われ慣れてるけど……わざわざ言わんでもいい、馬鹿で結構だ。

あそこで動かず後で後悔して、遣れば良かった言えば良かったああしとけば

「うしとけばなんて思うのなら俺は馬鹿で結構だ！」

「言いきるねえ……でも嫌いじゃないよそういう馬鹿は！」

「そりゃ有難い……」

「所で久我か？ あの子ヤバイよちょっと諏訪子のヤツ、妙なやる気出してからね

まあ怪我させないくらいに手加減してやるからかかってきな！」

そうして神力をさらに高め戦闘態勢に入る神奈子を尻目に、洋輔は

ついに煙草を取り出し
口にくわえると突然笑い出す

「何がおかしいんだい？」

「いや・・・優の奴だよ、ヤバイのは諏訪子様かもよ？ なんつた
てアイツは天才だからよ」

それは強がりなのか、ほんとの自信なのかどっちとも取れない笑みを洋輔は浮かべるだけだった。

「僕の相手は貴方ですね諏訪子様」

「わたしの相手は君か優君」

洋輔と神奈子が火山とならば、こっちは氷山だった。

ただ、ニコニコと笑顔を浮かべてはいるのにその身から放つ神力は一つも緩めようとしなない諏訪子。そしてそれに対して優は不敵な笑みだけを

浮かべるだけ。水面下で続く見えない腹の探り合いが既に進行していた。

「それで・・・神様が覗きするなんて趣味が悪いですよ」

「ありゃ？ばれてた、気配も力も消してたんだけどなあ意外と鋭いね」

「ええ、探ってましたんで」

「何処から気づいていたのかな？」

「洋輔が河童と厄神様と闘ってた時にコイツで密かに偵察してたんだけど」

「まあ発見は完全に偶然でしたけどね」

そういつて優の手の平には野球ボール大の光の玉が浮かんでいる、そして彼が

指を軽く動かすと、UFOのように不規則な軌道を描き彼の回りを飛びまわる。

「人形遣いの魔法の応用なんですけど、斥候とか偵察にはもってこないんですよね」

「やられたね・・・君の力には底がしれないね・・・でも悩みを抱えたまま勝てるんですか?」

「流石ですね・・・そこまで気が付いてるなんて、でも僕は所詮足止めみたいなもの

ですから諏訪子」

「えらく、自信たっぷりと言っじゃないか」

「ええ、だって洋輔の諦めの悪さとしつこさは神奈子様も手を焼くでしょうから」

優は諏訪子にただただ冷笑を浮かべ続ける。

「だから、優を、

舐めない方がいい」

「だから、洋輔を、

そんな二人の言葉に神様二人は同時に大きく笑った。

そして試練は始まる。

31話 神様の試練・天（後書き）

久しぶりに更新したけど・・・短か！

次はもうちょっと長くします

戦闘シーン苦手なんですけどね！

小説等々御意見・ご感想を頂けたら幸いです。

32話 神様の試練・中

妖怪の山上空、疾走する2つの影その一人はその手に火を点した
外来人風沢 洋輔

そしてもう一人は洋輔に合わせる様に飛び弾幕をばら撒く注連縄を
付けた女性

八百万の神八坂 神奈子、状況は洋輔の劣勢であり敗色は濃厚。

だが洋輔は弾幕を避け・掠り・受け流し、なんとか現状を保つこと
ができています

しかしそれは神奈子が少々手を抜いていることも大きい、元々から
洋輔と神奈子の

実力差は比べものにならないほどである、そこに、にとり・雛との
戦いによる消耗が

拍車をかけて洋輔の敗色を濃くしている。

「ほらほら！さっきまでの啖呵を切った勢いはどうした、もう終わ

りかい？」

容赦なく降り注ぐ大量の弾幕それを洋輔は軽く舌打ちをしてなんとか避ける

開幕一番に懐に潜り込むと言う案もあったが、それは降り注ぐ大量の弾幕で

不可能になった、炎を利用した軌道で接近という手もあるがそれは消耗が

激しすぎるため出来ない、近づく前に力尽きるなど目も当てられないからだ。

残念なことに洋輔には遠距離において効率的に使えるスペルカードが存在しない

洋輔は心の中で現状にさらに舌打ちし弾幕を避けるのに集中する。

諦めるような状況だが、その右手の炎はまだ決して揺らいではないのか

勢いは衰えておらず少しずつ炎は勢いを増す。

そうした、神奈子と洋輔の一方的な攻防が繰り広げられている近く
そこでは高密度の弾幕戦が展開していた。

火・水・木・金・土・日・月・光・闇ありとあらゆる森羅万象の魔法を

もってこの場を制そうとする外来の天才魔道士・久我 優

そして、その森羅万象の魔法をもってしても引くことも無くそれどころか

押しきろうとしている守矢神ことミシャグジ様・洩矢 諏訪子

優の様々な魔法を持ってしても彼女を打ち崩す事は容易では無い

『 坤を創造する程度の能力』

坤いわゆる地の属性の最高位に位置する能力と、神という種族
それも要因の一つそしてもう一つ

「それで、優君は何でそんなに戦いを求めているのかな？」

彼女のは優を心の底から揺さぶっているからだ。

木符「ユグドラシルの枝」

優によって発動された木の魔力を持つスペルカード

世界樹ユグドラシルの枝の如く、弾幕が枝別れを繰り返して広範囲に空間を埋め尽くす木の属性を持つ弾幕が諏訪子を取りかこむようにして接近する。

五行思想の考えでは、木はその力を持って大地から力を奪い取り地を支配する

木は地に勝つとされている、そのために優は木の属性を持つスペルをつかったのだが・・・

「甘いよー..」

簡単に彼女の能力で作りだした地の壁の前に全弾弾かれ終わってしまう
優にとって世界樹の名を取ったスperlカードであつても
諏訪子にとってはたかだか大地に生えた一本の木程度のものである
らしい

高々一本の木では豊穡の大地を枯らすことなど不可能に近い。

「なかなかやるね優くん」

「それはどういたしましたして・・・」

「それで、君はどうして戦う事がそんなにうれしいのかな？」

質問と回答と弾幕が飛び交う

「・・・僕は別に戦いを望んで来たわけじゃない」

「嘘だね、そうだったらどうして君は私たちと戦う事になった時に
嬉しそうな顔をしていたのかな？」

「・・・違う」「いやしていたね、間違い無くな。君は戦いたいんだ」

「・・・違う！」

「何がしたいか知らないけど、それだけ強く否定するなら当たりだね
普段の君ならこの程度の探りすぐ気がつくだろうにね、だが
今の君は如何だい？」

諏訪子からの言葉で優の動きが少しづつ鈍る、彼女の言葉の一つ一

つが
優の内側を少しづつ決る

「違う！僕は！僕は・・・僕は！洋輔の隣に立ちたいんだ！」

優の怒号と共に出鱈目に放たれた弾幕が諏訪子に当たることなくすり抜ける

「へえ、君は昔から余り前に立たず達観して物事を見ていたけど初めてだね君がここまで感情をむき出しにするのは、でも、隣に立つために戦いを望むとはまた酔狂だね」

「力が・・・力が居るんだ洋輔の隣に立つには、今の僕じゃダメなんだ
強い僕じゃなきゃ、だから・・・だから戦うんだ強く・・・強くなるために！」

そして、狙いも付けず大量の弾幕を出鱈目に打ち続ける優。そしてその姿に諏訪子は表情を変えた、今までは遊んでるようなふざけてるような笑顔から一切笑顔の欠片もない冷酷な顔へ。

「・・・久々に会ってどうかと思っていたけど、随分つまらない考えをもつようになってるね優くん。本当はやる気はあんまり無かったけど
ここは少し神様として悩める人間一人くらい救っておこうかな」

諏訪子は一切の手加減を捨て弾幕を放つ、そして冷静さを欠いた優はその弾幕に直撃した。

洋輔は今だ神奈子の放つ弾幕を避け続けてた、そして不思議な事に彼は攻撃は一切していない、飛びこむどころか弾幕・スペルカードの一枚すら使っていないのだ。

別にガス欠になった訳でもなければスペルカードが使えない訳でもない
そもそも、現在の洋輔にとって攻撃はそうそう何発も打てるわけには無い
洋輔は感じていた打てて一発、それが神奈子に出来るであろう攻撃の回数だと。

下手な威力の攻撃など聞きもしない、かといって遠距離からなど負けに行くもの
だからこそ洋輔は一発も攻撃を行っていないのだ、込められた一発

の弾幕ならぬ

弾丸にすべてをかけ、そのチャンスを虎視眈々と狙っている。

均衡は未だ破られない。

32話 神様の試練・中（後書き）

久々に更新だが・・・やっぱバトル回苦手だわな

というわけで3回に分けてます・・・

小説等々御意見・感想を頂けたら幸いです。

33話 神様の試練・地

正直に危なかった、内心冷汗をかきながら魔力で作った障壁を解除しながら

さきほどの事を優は思い返していた。自暴自棄に弾幕をばら撒いて弾幕の直撃を

受けそうになった瞬間何とか魔力障壁を作りダメージを抑えることには成功した。

熱くなっていた頭が少しづつ冷めていく、勝負は結局冷静で入れられない方が負ける。

良く分かっていた事なのに、確かに自分が今悩んでいるの自分でも分かっている

だが今それは関係が無い……いや無いことも無いのだが、乱されてどうすると

こんなものじゃ結局洋輔には追いつけない、気合を入れるため優は自分の頬を

一発力いっぱい叩いた。

「……危ない危ない」

「……しぶいとね、今ので決まったと思ったんだけどね」

「残念ですけど、そうそう簡単にはやられる訳にはいきませんので」

やはり冷酷な表情をする諏訪子と開き直ったのか笑ってるかのよう
に少しだけ唇を吊り上げる優

「君は気がついてしているのかな、危ない領域に踏み込もうとしている
のが？」

「……解ってますよそれぐらいはね！」

再び始まる弾幕と弾幕のせめぎ合い、襲いかかる地の権化たる弾幕を
九式の弾幕がそれを相殺し合う。

「解ってるのならなぜ止めない!？」

「僕の中に二人僕が居る、一人はこのままでいいと言う僕と
もつと行かないといけないという僕

それは僕が単に欲を出し過ぎたなのかもしれません……けど・
……それでも

力が必要なのは確かなんですよ

「何のためだい？」

「洋輔はすぐ無茶をして、なんだかんだでいつも荒事になってしま
いますからね。それでも洋輔は
いつも乗り越えてしまうそんな姿に焦ったのかもしれないね。
でも……だからこそ

無茶する洋輔が僕のことなんて心配する必要が無いほどの力が必

要なんです。

僕は……重しにはなる気はないですから」

そうして、諏訪子と優の動きが合わせたかの様に止まる。一瞬の静寂の後、諏訪子は

今までの冷酷な顔が嘘だったかのように声をあげて笑い出す。

「あー悪役ばくしてたのがなんか可らしい、ちよつと塩を送り過ぎたかな……」

なんだちゃんと男の子してるじゃないか、悩んで嫉妬して暑苦しい友情物語してるねー

外で見たＴＶでも君みたいな子今頃いないよ」

「そりゃ……どうも、といっても洋輔あつての事ですし」

「そうだねー、昔から今時の子とは思えないくらい変わった子だったからなあホントに可らしい

あー笑った笑った、それでどうする？」

「無論……解っているのに人……いやこの場合神？うーん表現としてどうなるのかなこの場合」

「どっちでもいいけどねー、じゃあ……全力でおいで受けて立つよ」

「ええ……ならば挑戦させてもらいますよ！」

そうして、再び動き出す両者だが前のように冷酷な顔は無く、まるで遊んでるような笑顔
そして優もまるでどこか楽しそうであるがその目はまるで笑っていない

弾幕はさらに激しさを増す、束の間の均衡のあと優がこの戦いにおいて初めてスペルカードを使う。

氷園「ホワイトプリズン」

優より放たれた氷の弾幕がはじけ飛び、諏訪子を白一色の世界へと飲み込む。

無論このスペルカード自体威力は無いあくまで時間稼ぎ無論本命は次にある

そうして優の手から偵察に使っていた魔力の玉が出される、ただ異質なのは

その大きさ偵察に使っていたのは野球ボール程度だったが、今回の出されたのは

バスケットボールほどの大きさを持ちそしてその数は8つ、

そして優はその魔力の玉を飛ばす訳でもなく自らの前に集結させた。

そうこうしている間に、白の世界など関係ないと言わんばかりスぺルごと
吹き飛ばして諏訪子が姿を現す、そうして視界を晴らした彼女は見た優が何をしているのかを。

優が作り出した8つの魔力球は彼の操作により大きな八角を描き大きな方陣を描く、

『八卦図』 古代中国において乾・兌・離・震・巽・坎・艮・坤の易えきと呼ばれる

符号を元に宇宙の万物生成過程を現した図である。

巨大な八卦図を前に優はにやりと笑いながら諏訪子に狙いを定める。

「御存じですよ？八卦を使って幻想郷において異変の解決の第一人者の人物を

今僕が用いる属性では貴方の乾を超えるのは至難の業だ、だから僕は利用できる

ものならなんでも利用させて貰う・・・星の魔術受け止められるか？」

優の手に魔術が集まる、そして逃げられる距離では無いと思ったのか身構える諏訪子

「マスターーーーーー」

そして極限まで集まった魔力を八卦図に叩きつける

スパーーーーーク！

優の叫びと共に放たれる七色の星の魔砲、純粹な魔力の暴風が諏訪子を飲み込んだ。

残り魔力の60%を叩きこんで放った魔砲若干肩で息をしながら優は着弾した場所を見つめる、いくらなんでもただでは済んで無いだろう、だが甘かった着弾した場所から一步も動かず諏訪子はそこにたたずんでいたからだ。

多少予感はしていたが此処までとは少し落胆したが、その前にこれからの筋書きを優は考える
現在の魔力は先ほどでほぼ使ってしまった、もはやギリ貧なのは痛い
が
そうして戦略を組み立てる間に諏訪子は考えてもいないことを口にする。

「やれやれ・・・もうこーさん私の負け」

やたら投げやりな敗北宣言、そして唾然とした顔をした優

久我 優 VS 洩矢諏訪子 決着！

神奈子から放たれる弾幕の嵐を洋輔は未だに避け続けていた、いまだに攻めきれないでいる

洋輔とそろそろこの状態に嫌気がさして来たのか弾幕の密度をさらに強める神奈子

均衡はいつ崩れてもおかしくない。

そしてその均衡は早くも崩れる、弾幕をかわし続けついに洋輔はミスを犯した

逃げた先に逃げ場が存在しない八方塞がりの場に入ってしまったのだ、迫りくる弾幕の

目の前にして、洋輔は仕方無くため続けた力を解放した。

業火「バツクドラフト」

ため続けた力は迫りくる弾幕と周りをすべて吹き飛ばし灰塵へと返す、しかし

これによって洋輔の手段が完全に無くなってしまった。力が尽きた仕方ねえなどと心の中で悪態をつきながら、晴れて行く煙の中映る神奈子を睨みつけるように見つめる。

神奈子は晴れゆく煙の中に映る洋輔を見る、さっきのスペルカード

には正直背中に悪寒を感じた
先ほどまで攻撃出来なかったのではないしてこなかった、攻撃のチャンスは虎視眈々と狙い続けていた
のだ舐めた状態で戦っていた自分ではチャンスがあれば確実に食らっていただろう
神奈子は少しだけ状況を見直し洋輔を見据えた

「意外と持つじゃないかい、ここまで耐えるとは思ってなかったよ」

「ああ・・・俺もここまでもつとは思ってなかったですよ」

不敵に笑う神奈子とその悪漢面をさらに強める洋輔
対峙する風と炎だが、圧倒的に不利なのは炎強がってはいるが風前の灯火なのだが

「なあ風沢、お前どうして此処まで無茶をする？別に此処までやる必要はないだろ？」

「聞いてただろうが・・・人の悪い神様だぜ」

「嫌・・・それまでして早苗に会いたいのかってことさ」

「ああ・・・会いたいね！此処まで来て引き下がれるか！」

「解ったよ・・・なら引導を渡してやるっじゃないか！」

「マウンテン・オブ・フェイス」

神奈子の発動したスペルによって周辺が数えるのも馬鹿らしい数の弾幕が展開される

さらに展開した弾幕が神奈子自信を護るように展開されてるのだから

洋輔にとってはさらにタチが悪い。

接近は不可能そして大量の弾幕が襲い来る、まさに四面楚歌・絶体絶命状態

その状態に洋輔は……最後の手段にでる、できるなら使いたく無い

今からするのは、無茶と無謀を足して2乗するような行為なのだ。しばし神妙な顔した後、洋輔は神奈子に向かって突撃した。

洋輔が持つ『火を点ける程度の能力』呼んで字の如く、拳に火をつけたり

指に火を点けたり、それこそ全身に火を点けることも可能なのだがこの火の正体は何か別に火そのものを出しているわけではない
そうなれば、衣服は燃えてしまうしその周辺を火事ばかりにしてしまう

この火は霊力の炎。

己が燃やすべきものを灰塵に返し、燃やし尽くす

霊力とは神力や魔力に比べ生命力つまり命にもっとも近い……

この炎を燃やす力はまだあるのだ、名の通り命に代えてだが

そして、その右腕に燃え上がる生命力を糧に生まれた二重螺旋の巨大な炎

その腕振り上げながら問答無用に弾幕の渦の中に突撃した。

神奈子は洋輔の腕に燃え上がった炎に驚愕した、アレは霊力であつてそうではない

生命力をそのまま燃やしていると、そして臆することも無く自分に向つてくる

洋輔にある意味の敬意すら被いたく、本当に馬鹿な奴だと神奈子は洩らす

そんな姿は天晴だがこちらとて簡単に負けてやるほど甘くは無いからだ。

ポロポロになりながら弾幕の渦を無理矢理抜けてきた洋輔はついに神奈子と肉薄する

そしてその己の魂と己の生命力をかけた右腕がついに解放される

だが・・・その拳は神奈子を作り出したオンバシラによって防がれる振り切った拳は止まることができずオンバシラに炸裂した

凄まじい爆炎と轟音とともにオンバシラは粉々に砕け散る
全てをかけた一発が外れた、その一瞬の弛み神奈子は終わったかと思
い溜息をついた瞬間

「まだ！・・・終わってねええええ」

その爆炎のなかから再び洋輔が飛び出してくる、完璧なタイミング

「やられた」神奈子は
次にくるであろう一発に身構えるが・・・洋輔の拳は・・・

神奈子を少し押す程度で止まってしまう・・・完全な終わり、力も
体力もすべて終わり気力のみで
最後に一発だけ当てるだけは出来た・・・ただ当てるだけの力も何
もない悲しき一発。

「早苗に・・・早苗に・・・早苗に会った！」

肩で息するのも大変な状態、目も疲労のためか半分落ちているだが・
・・・その瞳の力だけは
まだ落ちていない。

そんな洋輔の目を見た神奈子は洋輔の拳をゆっくり掴む。

「お前の勝ちだ……すまないなお前の覚悟甘くみ過ぎていたよ」

そして神奈子に倒れこむ洋輔を優しく抱きとめる、そして洋輔はそのまま気を失った。

凧沢 洋輔 VS 八坂 神奈子 決着！

33話 神様の試練・地（後書き）

あーやっぱ戦闘シーン書くのむずい

というわけで神様達との決着完了

次はついに早苗さん登場予定！

……たぶんですけどね

小説等々御意見・ご感想を頂けたら幸いです。

34話 そしてそろり

夏本番が終わったと言ってもまだまだ暑い、地球温暖化してるのは本当のことだろう、そんな他愛の無い会話を机に突っ伏した洋輔と本片手に行く優。

夏休みも終わって学校が始まったが、嫌になる厚さでクラス全体がやる気の無いオーラに包まれていた。そんな洋輔と優に近づく一人の人物、緑のロングヘアに独特な蛇と蛙をあしらった髪留めをつけた一人の女の子。

制服の夏服と短めのスカートが出すなんと艶かしい雰囲気を引き連れ街に出れば確実に何度もナンパされるなんともかわいらしい系の女の子。

幼馴染三人衆の紅一点・東風谷 早苗

早苗に気づいた洋輔は机に突っ伏したまま、「よお」と気の抜けた挨拶をかわし、優に至っては目を合わせた後手を上げる挨拶だけしてまた本に視線を移してしまう、そんな何時もの如く繰り返し続ける光景だが今日は少しだけ違った。

何処となく早苗に元気がない、いつもなら男性なら一瞬で魅了してしまいそうなの

笑顔全開で「おはよう」なり「熱いね」なり言いそうな事だが

彼女若干曇った笑顔で「おはよう」とだけ答える。

そんな彼女の姿を洋輔は見逃さな無かった、気だるそうに突っ伏していた状態から

すぐさま起き上がり立ち上がると、彼女の傍による

傍から見ると、目付きの悪い不良が脅しているかのように見えるのが不思議だ

「早苗、なんかあったか？」

「え！？・・・うつん何も・・・無いよ」

「嘘だな」

そんな言葉と共に洋輔は軽いでこピンを早苗に当てる

「お前は滅多に嘘はつかねえからな、すぐ解るお前が嘔吐くときはなぜってえ顔見ねえし、そうやってちよっと驚かすと口隠す癖が出る解りやすいんだよ」

「洋輔、東風谷だって元気がない時だってあるさ、それに嘘だって付くでしょ」

「気になるからって無理矢理はダメだよ」

「まあそうだけだよ・・・だがなあその台詞は本から目を離さない奴が言う台詞じゃねえよなあ！？」

そして、振り下ろされた洋輔からの頭部への手刀を「甘いよ」と本

で受け止める

優。その反応に腹が立ったのか今度は鉄拳を落とそうとする洋輔いつもの光景だった、自分を心配してくれている幼馴染。とっても優しい二人

男とか女とか関係無く、友人いやそれ以上として居続けてくれた二人だからこそ言いつらかった、いや本来なら言いたくはなかったのかもしれない

でも・・・そんな事をすればこの二人は烈火の如く怒るだろう
幼馴染だからこそ・・・幼馴染だから早苗は覚悟を決めた・・・

「あのね・・・洋輔君・・・優君・・・言わなきゃいけないことがあるんだ・・・」

彼女は何所か寂しそうにしながら、それでも笑顔で2人に打ち明けた。

己が・・・引越すからもう会えなくなるという事を。

だが、自分が『この世界』からい無くなるという事は最後まで言う事が出来なかった。

目に映るのは青空と感じるのは草の上に寝転がる感覚と木々の臭い
少しか昔の思い出を思い出すとはしかもピンポイントにあの時
の事を

思い出すのは良いことなのか悪いことなのか・・・

「気がついたかい、洋輔？」

「優？なんで俺寝てんだ？」

「覚えてないのかい？無茶し過ぎで倒れたんだよ」

「そうか・・・負けたんだな俺・・・」

「いや、勝負はあなたの勝ちだよ」

洋輔を覆うように、神奈子が出てくる。その顔は解りやすいにやけ

顔で

あったため、腕組んで仁王立ちの姿は余りにも威厳が無かった。

「それで？行くのかい？行かないのかい？」

「いや・・・それなんだけだよ」

「どうかしたかい？」

「ここまで来てなんだが、俺やっぱアイツに会っていいのかわかって

「洋輔・・・何言ってるのさ」

「覚えてんだろ・・・俺はあいつと別れの日には早苗に会ってやることも

別れの言葉すらいつてやれなかったんだぜ・・・だからさ・・・
やっぱ会っていいもんかなってさ」

「洋輔・・・君は・・・馬鹿な行動をすることは良くあるでも
今さらそんな事言うなんてそれは馬鹿じゃなくて白痴にでもなっ
たかい？」

「そうさ、黙って気いてりゃいい気になってんじゃ無いよ！」

そして神奈子から放たれた、剛拳が洋輔の顔面に正確無比にヒットする。

「早苗は・・・あの子はお前さんが来なかった事を少しも恨んだり
そんな事はしてない、むしろ、自分に非があるともいつてる、
だからさ、私がお前と戦ったのはお前が腐った人間になってるなら

何をしても早苗と合わす気など無かった、でもお前は少しも
変わっていなかったじゃないか、お前が来なかった理由なんどど
うでもいい

これでもまだ悩むってんなら、帰りな・・・そして二度とくるん
じゃないよ!」

洋輔は考えこむように目を伏せ、突然声をあげて笑い出す。

「あーあ、何へンテコに悩んだりしてんだろ・・・馬鹿らしくなっ
たぜ

ほんと・・・キャラじゃねえか・・・行くよ連れて行ってくれ」

神奈子を見るその目は何一つ悩みなど感じられないその眼光、
その目を見て神奈子はにやりと笑って「ついてきな」と手まねきを
した。

そして、彼らはずいぶん守矢神社の眼前にたどり着く、何も変わっていない

石段と鳥居全てがあこの時のままのようであつてまた違つ

そんな事を考える前に洋輔は石段を駆け上がった、そんな姿を見て

やれやれといった表情を見せて追いかける優と何所か嬉しそうな顔を見せながら後に続く神奈子と諏訪子。

そして、石段を駆け上がった先に彼女はいた、此方に気づいて緑の髪を

揺らしながら振り返るその姿、何も変わっていなかった外で神社ではいつも来ていた青と白の巫女服と蛇と蛙をあしらつた髪留め
何一つ変わっていなかった。

洋輔は言葉が出なかった、昔では余りにも当たり前前に喋っていたのに此処に来て何一つ言葉が浮かんでこない。

少しばかり対面しあふ二人、そして洋輔の後ろから声が響く。

「やあ、久しぶりだね東風谷」

「え……優君?……という事はまさか」

「……よお、久しぶりだな……早苗」

「久しぶりだね、洋輔君、優君」

昔から変わらない笑顔で答える早苗に、何を迷ってんだと平常心を取り戻した洋輔は自分になのかそれとも早苗に対してなのかやれやれといった表情をとる。

「あんなあ早苗、確かに久しぶりだけどよ……なんでこっち（幻想郷）

に来てんだとか思うのが先じゃねか？」

「あ……そういえばそうだね、2人ともどうしてこっちに？」

「言われてから気づくな……変わんねえなあお前は」

「洋輔は悪漢面に磨きがかかったけどね」

「うっせ！なりたくて悪人面してんじゃねえよ！」

そして、誰が最初に笑ったかわからないが3人のうち誰かが笑ってそして二人目が笑って最後は3人そろって笑い出す

そして3人の幼馴染は再び揃った、ほとんど変わらないその場所でそう変わったのはここが幻想郷であることと彼らが少しだけ大人になったことだけだった。

34話　そしてそろそろ（後書き）

久々に更新でついに早苗さん登場

なんでこんなにリアルが忙しいんだ
パト　ツシユ僕はもう憑かれたよ・・・

小説等々御意見・ご感想を頂けたら幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6485r/>

二人で幻想郷入り

2011年11月16日14時25分発行